

解き明かす： 慶長一分判の金型研究

リアナ スポリア

UNTANGLED: A Die Study of Keicho Ichibu

Lianna Spurrier

バージョン 1.0 ・ Version 1.0

The Rectangle Coins
rectanglecoins.com



片本-S
B1

片本-S
B2

片本-S
B3

片本-S
B4

片本-S
B5

片本-S
B6

片本-S
B7

+3種類の固有

両本-S
B1

両本-S
A1

無本-S
A1

無本-S
A2

無本-S
A3

無本-S
A4

無本-S
A5

無本-S
A6

無本-S
A7

無本-S
A8

無本-S
A9

無本-S
A10

無本-S
A11

無本-S
A12

無本-S
B1

無本-S
B2

無本-S
B3

無本-S
B4

無本-S
B5

無本-S
B6

+15種類の固有の金型ペア

+4種類の固有の

無本-O
A16

無本-O
A6

無本-O
A7

無本-O
A8

無本-O
A9

無本-O
A10

無本-O
A11

無本-O
A12

無本-O
A13

無本-O
A14

無本-O
A15

無本-O
A16

無本-O
A17

無本-O
A18

無本-O
A19

無本-O
B1

無本-O
B2

無本-O
B3

無本-O
B4

無本-O
B5

無本-O
B6

無本-O
B7

無本-O
B8

無本-O
B9

無本-O
B10

無本-O
B11

無本-O
B12

無本-O
B13

無本-O
B14

無本-O
B15

無本-O
B16

無本-O
B17

無本-O
B18

無本-O
B19

無本-O
B20

無本-O
B21

無本-O
B22

無本-O
B23

無本-O
B24

無本-O
B25

無本-O
B26

無本-O
B27

無本-O
B28

無本-O
B29

無本-O
B30

無本-O
B31

無本-O
B32

無本-O
B33

無本-O
B34

無本-O
B35

無本-O
B36

無本-O
B37

無本-O
B38

無本-O
B39

無本-O
B40

無本-O
B41

無本-O
B42

無本-O
B43

無本-O
B44

無本-O
B45

無本-O
B46

無本-O
B47

無本-O
B48

無本-O
B49

無本-O
B50

無本-O
B51

無本-O
B52

無本-O
B53

無本-O
B54

無本-O
B55

無本-O
B56

無本-O
B57

無本-O
B58

無本-O
B59

無本-O
B60

無本-O
B61

無本-O
B62

無本-O
B63

無本-O
B64

無本-O
B65

無本-O
B66

無本-O
B67

無本-O
B68

無本-O
B69

無本-O
B70

無本-O
B71

無本-O
B72

無本-O
B73

無本-O
B74

無本-O
B75

無本-O
B76

無本-O
B77

無本-O
B78

無本-O
B79

無本-O
B80

無本-O
B81

無本-O
B82

無本-O
B83

無本-O
B84

無本-O
B85

無本-O
B86

無本-O
B87

無本-O
B88

無本-O
B89

無本-O
B90

無本-O
B91

無本-O
B92

無本-O
B93

無本-O
B94

無本-O
B95

無本-O
B96

無本-O
B97

無本-O
B98

無本-O
B99

無本-O
B100

無本-O
B101

無本-O
B102

無本-O
B103

無本-O
B104

無本-O
B105

無本-O
B106

無本-O
B107

無本-O
B108

無本-O
B109

無本-O
B110

無本-O
B111

無本-O
B112

無本-O
B113

無本-O
B114

無本-O
B115

無本-O
B116

無本-O
B117

無本-O
B118

無本-O
B119

無本-O
B120

無本-O
B121

無本-O
B122

無本-O
B123

無本-O
B124

無本-O
B125

無本-O
B126

無本-O
B127

無本-O
B128

無本-O
B129

無本-O
B130

無本-O
B131

無本-O
B132

無本-O
B133

無本-O
B134

無本-O
B135

無本-O
B136

無本-O
B137

無本-O
B138

無本-O
B139

無本-O
B140

無本-O
B141

無本-O
B142

無本-O
B143

無本-O
B144

無本-O
B145

無本-O
B146

無本-O
B147

無本-O
B148

無本-O
B149

無本-O
B150

無本-O
B151

無本-O
B152

無本-O
B153

無本-O
B154

無本-O
B155

無本-O
B156

無本-O
B157

無本-O
B158

無本-O
B159

無本-O
B160

無本-O
B161

無本-O
B162

無本-O
B163

無本-O
B164

無本-O
B165

無本-O
B166

無本-O
B167

無本-O
B168

無本-O
B169

無本-O
B170

無本-O
B171

無本-O
B172

無本-O
B173

無本-O
B174

無本-O
B175

無本-O
B176

無本-O
B177

無本-O
B178

無本-O
B179

無本-O
B180

無本-O
B181

無本-O
B182

無本-O
B183

無本-O
B184

無本-O
B185

無本-O
B186

無本-O
B187

無本-O
B188

無本-O
B189

無本-O
B190

無本-O
B191

無本-O
B192

無本-O
B193

無本-O
B194

無本-O
B195

無本-O
B196

無本-O
B197

無本-O
B198

無本-O
B199

無本-O
B200

無本-O
B201

無本-O
B202

無本-O
B203

無本-O
B204

無本-O
B205

無本-O
B206

無本-O
B207

無本-O
B208

無本-O
B209

無本-O
B210

無本-O
B211

無本-O
B212

無本-O
B213

無本-O
B214

無本-O
B215

無本-O
B216

無本-O
B217

無本-O
B218

無本-O
B219

無本-O
B220

無本-O
B221

無本-O
B222

無本-O
B223

無本-O
B224

無本-O
B225

無本-O
B226

無本-O
B227

無本-O
B228

無本-O
B229

無本-O
B230

無本-O
B231

無本-O
B232

無本-O
B233

無本-O
B234

無本-O
B235

無本-O
B236

無本-O
B237

無本-O
B238

無本-O
B239

無本-O
B240

無本-O
B241

無本-O
B242

無本-O
B243

無本-O
B244

無本-O
B245

無本-O
B246

無本-O
B247

バージョン1.0

2025年11月発行

更新情報は <https://rectanglecoins.com/keicho-ichibu-die-study> をご覧ください。

日本語訳はリバティ・キャップ財団の助成によるものです。

—

Version 1.0

Published November 2025

Please visit <https://rectanglecoins.com/keicho-ichibu-die-study> for updates.

Translation to Japanese funded by the Liberty Cap Foundation.

目次

日本語

序論.....4

要旨.....5

表面と裏面についての注記.....5

現行分類体系.....5

鑄造数と鑄造地.....6

書体.....6

新しい年代区分：前期・中期・後期.....9

別の年代理論.....10

金型地図キー.....11

前期 無本 K 慶長一分判.....11

中期 無本 K 慶長一分判.....13

中期 片本 K 慶長一分判.....14

中期 無本 S 慶長一分判.....14

中期 片本 S 慶長一分判.....15

中期 両本 S 慶長一分判.....16

後期 無本 E 慶長一分判.....18

後期 片本 E 慶長一分判.....19

後期 無本 H/U 慶長一分判.....20

無本 Y 慶長一分判.....22

外れ値.....23

鑄造場所の識別.....23

オークション出品例に基づく比較的稀少性.....25

金型個体数に基づく相対的希少性.....26

打ち込み桐紋印.....26

価格動向.....27

今後の展望.....28

付録1：典型例.....29

付録2：金型配置図(完全版).....32

付録3：両本に関する別理論のコメント.....34

画像提供クレジット.....35

参考文献.....38

Table of Contents

English

Introduction.....4

Abstract.....39

A Note on Obverse and Reverse.....39

Current Classification System.....39

Mintage and Locations.....40

Calligraphy Styles.....40

A New Dating System: Early, Intermediate, and Late...43

An Alternate Theory for Dating.....44

Die Map Key.....45

Early No Hon K Keicho Ichibu.....45

Intermediate No Hon K Keicho Ichibu.....47

Intermediate Single Hon K Keicho Ichibu.....48

Intermediate No Hon S Keicho Ichibu.....48

Intermediate Single Hon S Keicho Ichibu.....49

Intermediate Double Hon S Keicho Ichibu.....50

Late No Hon E Keicho Ichibu.....52

Late Single Hon E Keicho Ichibu.....53

Late No Hon H/U Keicho Ichibu.....54

No Hon Y Keicho Ichibu.....56

Outliers.....57

Minting Location Identification.....57

Comparative Rarity Based on Auctioned Examples....59

Comparative Rarity Based on Unique Dies.....60

Incuse Kirimon Stamp.....60

Pricing Trends.....61

Next Steps.....62

Appendix 1: Typical Examples.....63

Appendix 2: Full Die Map.....66

Appendix 3: Commentary on Alternative Double Hon
Theories.....68

Image Credits.....69

References.....72

序論

本稿はもともと英語で執筆され、日本語版と同時公開するために第三者によって日本語へ翻訳されたものです。ここには日本の貨幣研究者にはすでによく知られている一方、英語圏ではほとんど知られておらず、情報にアクセスすることが非常に困難な内容も多数含まれています。そのため、初期の部分には日本の慶長一分判に詳しい読者にとって不要と思われる説明が含まれている可能性があります、これは英語話者にとって理解しやすくするための配慮によるものです。ご容赦いただき、本稿が英語圏の読者にも理解できるよう配慮されているとご理解ください。この序論のみ、両言語版で内容が異なります。

私は現在、明治以前の小判・一分金などの長方形金銀貨についてのより長い著作に取り組んでおり、本書はその研究の一部を、書籍完成前にフィードバックを得る目的で公開するものです。ご意見は歓迎いたします。ご連絡は liannaspurrier@yahoo.com までメール、または <https://rectanglecoins.com/contact-me> から、あるいは下記住所宛にお送りください。

Lianna Spurrier
PO Box 22534
Louisville, KY 40252
USA

(この私書箱は2026年5月まで有効です。それ以降は受取保証ができませんので、期日を過ぎた場合は別の連絡手段をご利用ください。)

フィードバックは日本語でも英語でも歓迎いたします。可能な限り、ご希望の言語で対応いたします。

本稿の更新情報は <https://rectanglecoins.com/keicho-ichibu-die-study> でご覧いただけます。日本語版は5ページから始まります。画像クレジットについては35ページをご参照ください。

本研究をご検討いただき、ありがとうございます。

Introduction

Keicho ichibu are a rectangular gold coin minted in Japan between 1601 and 1695. There's incredible variety in the style and quality of these pieces, and after significant study of available photos, I believe I've separated them into more consistent subtypes than previous literature proposes.

I am working on a longer book about rectangular pre-Meiji gold and silver coinage and am releasing this research now in hopes of receiving feedback before completing the full book. The eventual book will focus significantly more on historical context and will refrain from going into this much detail for any one type. However, if this research is accepted within Japan, it will determine how Keicho ichibu need to be divided and discussed within that book.

Any feedback is welcome and can be emailed to liannaspurrier@yahoo.com, submitted via <https://rectanglecoins.com/contact-me>, or mailed to:

Lianna Spurrier
PO Box 22534
Louisville, KY 40252
USA

(This PO Box will remain active through May 2026; I cannot guarantee it will be accessible after then. Please choose a different contact method if that date has passed.)

Feedback is welcome in Japanese or English, and I will do my best to communicate in your preferred language.

This paper was originally written in English and has been translated to Japanese by a third party to be released in both languages simultaneously. This introduction is the only portion that varies between the two versions. Any updates to this paper can be found at <https://rectanglecoins.com/keicho-ichibu-die-study>.

The English version begins on page 39. Please see page 69 for complete image credits.

要旨

本書は研究論文であると同時に、さらなる協力と洞察を求める公開書簡でもあります。十分な分析と研究を経て、私は慶長一分判の分類において、より包括的な方法を見いだしたと考えています。本稿に示した理論についてのご意見を歓迎します。もし既に同様の研究が発表されている場合は、その資料を確認できていません。

私は慶長一分判を鑄造時期に基づいて前期・中期・後期の三期に区分することを提案します。上部の桐紋の上にある点の数と「分」の位置が、主要な分類における年代判定の主要な特徴となります。

さらにその中で、存在が確認できた追加の種類を提示します。混乱を避けるため、従来は京座・駿河座・江戸座に対応していた書体分類を、それぞれ K・S・E と再命名しました。また、非常に稀ではあるものの、明確に異なる三つの書体(H・U・Y、8ページ参照)を確認しました。私は以下の特徴の組み合わせを見いだしました。

前期	中期	後期	不確定
無本 K	無本 K	無本 E	無本 Y
	片本 K	片本 E	
	無本 S	無本 H	
主要分類は黒字。	片本 S	無本 U	
副分類は灰字。	両本 S		

これは306枚の標本を調査した結果であり、2024年末までにオンラインで確認できたすべての競売記録に加え、より稀少なタイプについては、公的機関の所蔵品や参考サイトに掲載された画像などを含みます。K・S・E の書体は主要分類とみなされ、大多数の例を占めています。一方、H・U・Y の書体は副分類として本稿で扱います。

また私は、両本慶長一分判が献上用として鑄造された可能性を提唱します。その根拠として、他のタイプに比べて縁が完全に打刻されている割合が高いこと(より丁寧に制作されたことを示唆)、打刻痕が少ないこと、そして他のタイプと同じ金型を共有し、かつその別タイプでは貨幣軸で合わせられた例が存在することなどが挙げられます。

表面と裏面についての注記

一般的に「表」と呼ばれる面は、日米で異なります。アメリカの文献や鑑定機関では「光常」の銘がある面を表とする傾向がありますが、日本の資料ではほぼ例外なくこれを裏とみなしています。本稿では、光常の銘がある面をA面、桐紋のある面をB面と呼称します。



図1

現行分類体系

慶長一分判は1601年から1695年にかけて鑄造され、一般的に前期・標準・片本・両本に分類されています。さらに、歴史的には京都・駿河・江戸の三つの座に対応するとされる三種類の書体が知られていますが、これらの関連性を裏付ける資料は存在しません。そのため、「座」(鑄造地)は販売時にもほとんど言及されず、価値への影響もほとんどありません。

前期慶長一分判は、従来、B面上部左右の点の数と「一」の位置によって識別されてきました。具体的な年代範囲は不明ですが、これが最初に鑄造されたタイプであると広く認識されています。

片本慶長一分判には、A面右上に追加の文字が入ります。この文字は草書体の「本」を崩したもので、「本直し」から取られています。¹これは、貨幣が座へ戻され、損傷が激しく完全に打ち直しが必要となった際に、この新しい文字が加えられたことを示しています。



図2
片本 S 慶長一分判、A面。○で囲まれているのは「本」。

1 『日本史小百科・貨幣』澤瀧雄武・脇西康、242-243ページ



図3
両本 S 慶長一分判、A面。○
で囲まれているのは「本」。

両本慶長一分判は、A面の左右上角に同じ文字が入ります。これらが異なる印を持つ理由について明確な説明を示す資料は私が確認した範囲では存在せず、通常は片本と合わせて論じられます。

一般的な貨幣はメダル回転で打刻されていますが、他の多くの金一分金と同様、まれに貨幣回転のものも存在します。貨幣回転のものは非常に珍重され、高い価値があります。現時点での理解では、貨幣回転のものはより丁寧に打たれ、献上品（高位の人物に与えられたもの）として使用されたと考えられます。

草書

草書体の文字は通常丸みを帯びていますが、慶長一分判の片本および両本に用いられた草書体の「本」は、直線的な筆致へと再解釈されているようです。



鑄造数と鑄造地

慶長一分判の正確な鑄造数は不明ですが、一分金および小判を合わせると、総計14,727,055両¹が鑄造されたとされています。一般的には三つの座が知られていますが、慶長一分判は四か所で鑄造されています。

江戸座は慶長一分判の主要な鑄造地でした。慶長一分判の前身である額一分判は1599年に江戸で鑄造されており、この場所は1695年まで全期間にわたり慶長一分判の鑄造を継続しました。

京座は江戸の直後、あるいは1608年頃までには慶長一分判の鑄造を開始したと考えられています。『慶長小判・慶長一分判金の研究』（熊本昌樹）は、1657年までに新たな鑄造を停止した可能性を示唆していますが、他の資料では慶長期の終わりまで鑄造を続けていたとする説もあります。

駿河座は1606年または1607年から、1612年または1616年までのみ鑄造を行っていました。²両方の年代に異説があり、さらなる調査が必要です。いずれにせよ、閉鎖時には江戸座に吸収されました。

さらに、佐渡座は1621年に慶長一分判の鑄造を開始し、1695年まで続けました。佐渡での鑄造数は非常に少なく、わずか280,000枚です。³

書体

前述のとおり、歴史的には三つの座に対応するとされる三種類の主要書体があります。この分類は現在ではあまり用いられなくなりましたが、本研究による分析では、書体によって分類することには有効性があると判断しています。ただし、鑄造地を特定する目的というより、発行順序を判断する上でより重要であると考えます。同一書体内では複数タイプ間で金型の共通性が確認されましたが、複数の主要書体をまたぐB面金型の共有は確認されませんでした。

座との関連性が重視されなくなったため、本稿では議論を明確にする目的で各書体の名称を改めます。以下の表では、太字の項目が書体識別において最も一貫性があり、有益な特徴です。

なお、ほとんどの標本はこれら三つのタイプのいずれかに分類できますが、さらに小規模ではあるものの明確に異なる三種類の副書体が存在します。B面もこれらのタイプで独自性がみられ、「無本 H/U」（20ページ）および「無本 Y」（22ページ）でより詳しく扱います。



1 1両は4一分に相当する。
2 1612年は『駿河小判座と日本銀行』に記され、1616年は『日本史小百科・貨幣』に記載されている。
3 『日本史小百科・貨幣』澤瀧雄武・脇西康、242ページ

主要書体



K

(以前は京座に帰属)

S

(以前は駿河座に帰属)

E

(以前は江戸座に帰属)

タイプ間に顕著な違いなし

丸い、または右へ湾曲

無本では左へ湾曲(片本・両本では右へ湾曲する場合あり)

丸い、右または横へ湾曲; ③より明確に短い

多くは直接 ④へ流れる(図示なし)

ほぼ常に ④へ直接流れる

④から離れている; 長い

やや傾斜; 多くは ⑤へ直接流れる

やや傾斜; 多くは ⑤と平行

通常は傾斜せず; 多くは ⑤と離れる; 左端が太く右端が細い

広くない; 縁との間に隙間あり

広い; 縁に近い

幅は様々

通常 ⑤の左端と ⑧の左端の間、または ⑤より少し下; 通常丸い

⑤の下(左端は ⑤と揃うか、より右); 通常楕円形

様々

左に鉤; 花押に触れる場合と触れない場合あり

左に鉤; 花押に触れる場合と触れない場合あり

左に鉤なし; 花押に触れる

⑥と接続

⑥と接続

しばしば ⑥と離れる

時に ⑥と離れるが、時に ⑥と接続; まれに正徳一分判の形¹

時に ⑥と離れるが、時に ⑥と接続; 正徳一分判 になる場合あり

⑥と離れる

全タイプで大きな変動あり; 判定に用いるべきでない

黒字で示されている特徴(花押の上部、点の縁飾りなど)は参照用であり、分類判断には使用しないでください。表で明示的に扱われていない特徴については、同一書体内でも変化する可能性がある点にご注意ください。

¹ <https://rectanglecoins.com/shotoku-ichibu> の特徴3を参照。筆画10は、9と接続せず10から直接分岐する。これは歴史的に正徳一分判を識別する唯一の判断基準とされてきたが、慶長一分判にも見られることがある。

副書体



H

(筆画5と6の下部が「へ」に似ることから命名／ローマ字化しH／3例確認)

U

(筆画4と5が「う」に似ることから命名／ローマ字化しU／5例確認)

Y

(筆画1～3が「山」に似ることから命名／ローマ字化しY／8例確認)

1	タイプ間に顕著な違いなし		
2	顕著な違いなし	丸い、または左へ湾曲	筆画 ① ② ③ がすべて縦で平行； ③ は直接 ④ へ流れる
3	④ から離れる	ほぼ必ず ④ へ直接流れる	
4	直線；⑤ より短い；⑤ への接続角度が鋭い	⑤ より短い；直接 ⑤ へ流れる	平行で非常に近い；ほぼ水平に近い
5	⑥ が ⑤ より縁に近い	⑥ が ⑤ より縁に近い	
6			顕著な違いなし
7	⑤ の下で、⑤ 左端に近い	通常 ⑤ の下(⑤ 左端と揃うか、さらに右)；丸い	⑤ の下；楕円で、⑧ の左端の続きのような配置
8	左にほとんど鉤なし；花押に触れる場合と触れない場合	左に鉤；花押に触れる場合と触れない場合；右端は短め	左に鉤；花押に触れる
9	⑥ と接続	⑥ と接続	⑥ と接続
10	⑥ と離れるか、正徳一分判のようになる	⑥ と離れるか、正徳一分判のようになる	⑥ と離れる、または触れる程度
11	全タイプで大きな変動あり；分類に用いるべきでない		
12			

観察例が非常に少ないため、これらの副タイプは全体の議論から除外し、20ページ以降で個別に扱います。

新しい年代区分：前期・中期・後期

熊本は、分が点枠の中に完全に入り込んでいる慶長一分判は、1657年の明暦の大火以降に製造されたものであると述べています（以下「後期」慶長一分判）。私は熊本氏本人に連絡を取り、この主張が歴史資料に基づくものではなく、自身の観察に基づくものであることを確認しました。私の分析も、主要タイプに関する限りこの理論を支持します。

一般に、前期慶長一分判が最初に製造されたことは広く認められており、前期の貨幣は分の位置が枠線にかすかに触れるか、完全に離れた位置にあります。分の最初の筆画のみが枠線付近に見られます。

その他の判定基準で前期に分類されないすべての貨幣では、分が枠線に明確に近くなっています。筆画1は必ず枠線を超え、筆画4は通常触れるか交差し、筆画3は時折触れます。熊本氏が後期と分類した貨幣では、筆画1、3、4のすべてが点枠を完全に越えています。



これらの特徴は連続的な変化として理解できます。すなわち、前期の貨幣では分が中央付近に位置し、中期では枠線に触れる位置へ移動し、後期ではさらに移動して枠線内に完全に入り込むようになったと考えられます。

	前期	中期	後期
1	点枠から離れている、またはかすかに触れる	点枠を越える	点枠を越える
2	通常 ① から離れる	様々	通常 ① および ④ と接続
3	点枠に触れない	触れる場合ありだが越えない	点枠を越える
4	点枠に触れない	触れるか越える場合あり	点枠を越える
上部の点	通常ひとつの点群として連続；7～10個	3～5個	1～3個
下部の点		2～4個	1～4個

筆画1のみが点枠に触れる／越える貨幣は、やや曖昧な場合があり、「無本 K 慶長一分判」の項で説明したように、他の判定基準も併せて鑄造時期を確認する必要があります。

さらに、前期の貨幣は一般的に非常に丁寧に作られています。枠線の点は小さく、大きさや間隔が均一で、他の意匠要素も非常に整っており、金型間でもよく似ています。これに対し、分が枠線に入り込んだ後期の貨幣は、より粗雑に作られています。枠線の点は大きく、間隔も不揃いで、他の意匠要素にも大きなばらつきが見られます。中期の貨幣はその中間に位置します。点の大きさは前期よりやや大きく、後期より小さく、前期ほど均一ではありませんが、後期よりは安定しています。

全体として、当時公表されなかった可能性のある小さな変更を座が加えていった結果、タイプ間に明確な連続性が見られます。¹

1657年の明暦の大火では、江戸の約60%が²焼失し、金座も含まれていました。歴史資料では分の位置がこの時に変化したという記録は確認できませんが、熊本氏はこの出来事を中期と後期を分ける契機としています。座が焼失した際、金型はすべて失われたと推測されます。他に金型全てを失わせるような出来事は確認されていません。

ここで残る疑問は、前期から中期への移行は何が契機となったのか、という点です。熊本氏が示した書体帰属(24ページ、図31参照)に基づけば、この変化は1607年以降、駿河座が閉鎖される1612年または1616年以前に起こったと推測されます。現時点で、この年代を裏付けたり反証したりする追加の証拠はありません。

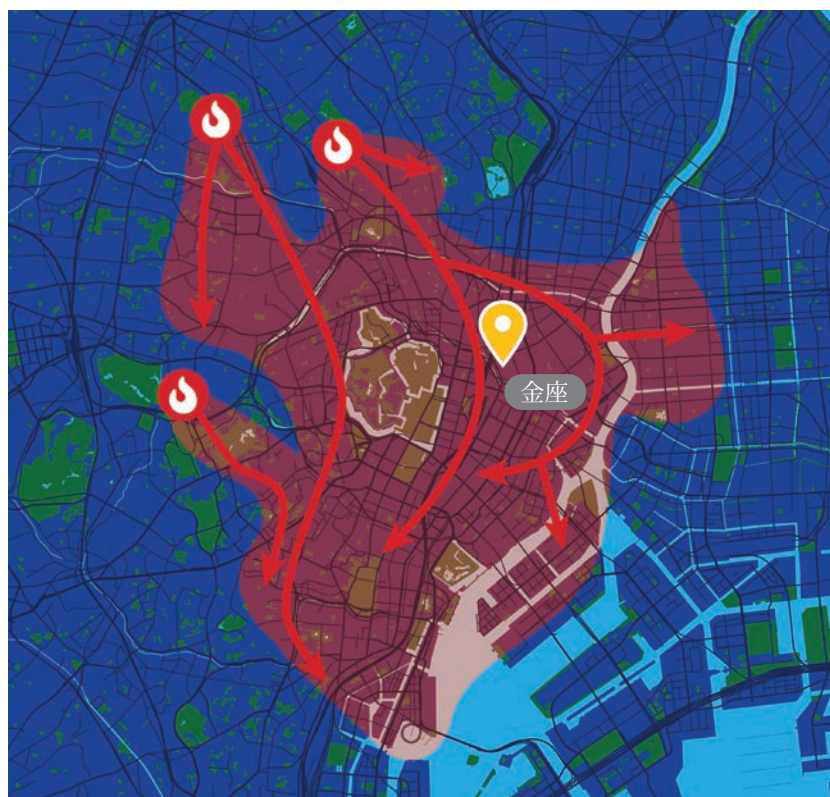


図4
明暦の大火(1657年)における江戸での延焼範囲

1 副タイプはこの規則に当てはまらない。

2 https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_library/english/machi/page2-1.html

別の年代理論

より大きな政治状況から離れ、金座内部の出来事に注目すると、後藤家の新しい当主が座の長となった際に書体が変わった可能性はないだろうか。原資料『御金改役後藤庄三郎由緒書』以外では情報が乏しく、同書は私が翻訳できていないものの、¹金座頭の継承について私が理解する範囲では次のとおりである。

1595-1625

後藤光次

1625-1641

後藤広世

1641-1677

後藤良重

1677-1705

後藤光世/後藤光重
(名前不詳)

たとえこれらの日付に多少のずれがあったとしても、慶長一分判の鋳造期間中には4人の人物が存在しており、本研究で示された4つの主要タイプと一致します。誰が座内で金型を製作していたのかを示す資料は見つかっていませんが、仮に鋳造責任者ではなく別の職人であったとしても、指導者交代に伴い意匠基準が変更された可能性は検討に値すると思われます。この仮説の検証または否定には、原資料の分析が必要であり、これは私の専門外です。より深い文献アクセスと日本語に精通した日本の研究者が、今後この点を検討してくださることを望みます。

この仮説を支持する先行研究が存在しないため、本稿の残りの部分では、熊本氏が提示した明暦の大火前後での分類に焦点を当てます。私自身、こちらの方がより可能性が高い説明であると考えています。

1 正確な刊行年は不明ですが、これは1900年代初頭の日本語標準化以前に書かれたものです。私が確認できた唯一の写本は手書きです。この文献の活字版をお持ちの方、または英訳作業が可能の方がいれば、ぜひご連絡いただくと幸いです。原文は以下で閲覧できます：

https://www.wul.waseda.ac.jp/kotensearch/html/i14/i14_a4677/index.html

金型地図キー

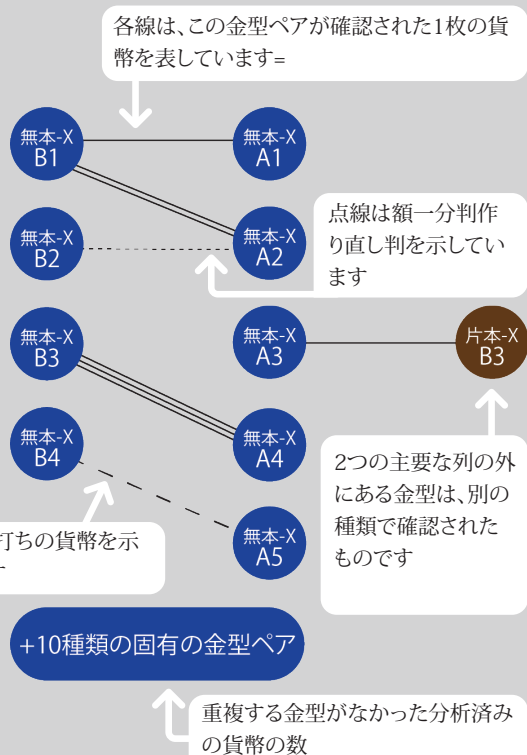
各主要な分類には金型地図が含まれています。個々の金型は次のように命名されます：

無本 - K - A1

本の数	前期作品の場合、O ¹	貨幣の面(A または B)	任意に割り当てられた一意の番号
無本、片本、または両本	中期および後期作品の場合、書体(K、S、E、H、U、またはY)		

各分類に見つかったすべての例が金型地図に含まれているわけではありません。多くは低解像度の写真しかなく、金型の照合が困難または不可能な場合があります。また、一方の面のみの写真しかないものもあります。高解像度画像が25枚以上利用可能な場合、これらの低品質の例は除外されています。特に重要な作品(例：逆打ちのもの、額一分判作り直し判、または他の種類と金型を共有するもの)は、画像品質に関係なく可能な限り含めています。

1 前期(「Early」)と古鏡(「Old」)は、この種類について日本国内では互換的に使用されています。同じ文字を重複して使用するため、金型上では O を使用することになりました。「Early」は英語では中期および後期の命名規則との整合性が取れるため、このような違いが生じています。後ほど見るように、このグループでは中期または後期の作品と重複がないため、金型名はそれほど重要ではありません。



前期 無本 K 慶長一分判

前期慶長一分判は、間違いなく本稿で扱うすべての種類の中で最も複雑な金型地図を形成しています。これは、無本A金型(無本-O-A3)が3つ以上のB金型と組み合わされている唯一の例です。比較的多くの重複した金型の存在は、前期慶長一分判の当初の鋳造数が他の無本型よりも少なかったことを示しているようです。これは価格動向とも一致しています。完全に固有な貨幣の割合が少ないことから、この地図は大部分の金型を表していると考えられます。

さらに、前期慶長一分判が額一分判の上に明確に打ち直された10種類の例が確認されていることに注目すべきです。他のすべての慶長一分判の種類を合わせても額打ち直しはわずか4例しか確認されておらず、このグループではそれが著しく多いことを示しています。これらの貨幣の存

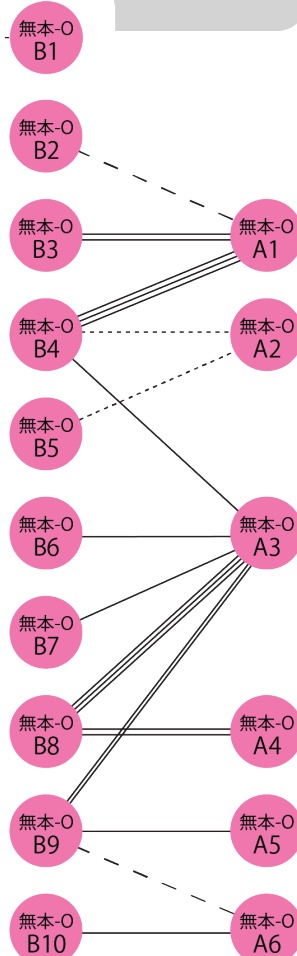


図5

額一分判は最初の長方形の金貨であり、1599年に非常に特徴的なB面をもって鋳造された。この例では額-A8が使用されている。

図6

前期慶長一分判が額一分判の上に打ち直されたもの。額一分判のB面にある三重棒の一部は、右図に示すように打ち直し後も一般的に確認できる。



地図は次のページに続く。

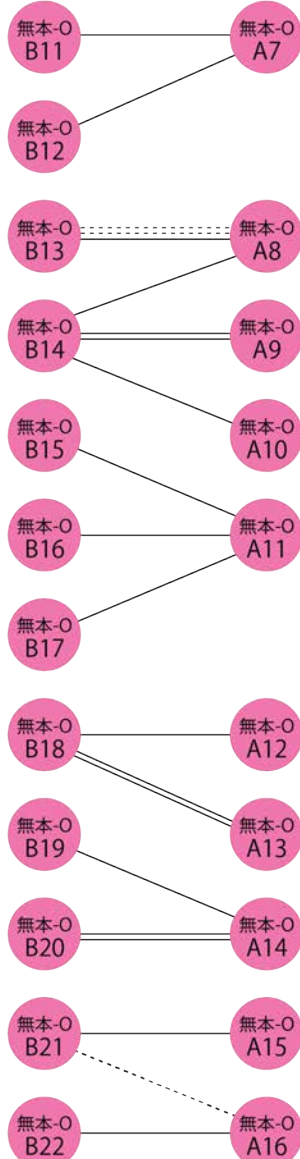


図7
前期慶長一分判 額-A8と無本-O-B1の組み合わせ。

在は、かつては額一分判が慶長一分判よりも先に鑄造された証拠として言及されてきましたが、同時に、歴史的に「前期慶長一分判」として識別される貨幣が実際に最初に製造されたことも示唆しています。慶長一分判の鑄造期間の初期には、より多くの額一分判が流通していたと考えられ、それらが金座に戻され再鑄造された結果であると推測されます。

この金型地図で最も注目すべき個体は、無本-O-B1と額-A8の組み合わせの作品です。額-A8は額一分判に見られるA金型を参照しており、¹この2つの関連性をさらに強固なものとしています。この作品のB面は、最初に明確に額一分判として打たれており、三重枠が容易に確認できます。A面の明瞭さから、この打ち直しには額A金型が使用されたことが示唆されます。片面のみが打ち直されたのではなく、両面に再鑄造が行われた可能性があります。さらなる分析にはより鮮明な写真や現物の確認が必要です。一般的に、額一分判のA面の書体は慶長一分判のK書体と最も類似しています。

額一分判に関しては、以前は京都での豊臣秀吉の時代に鑄造されたとされてきましたが、現在では徳川家康のもと江戸で地方貨幣として鑄造されたことが広く知られています。私の知る限りでは、これらは主に江戸で流通し、全国には広まらなかったと考えられます。そのため、ほとんどの打ち直しは江戸で行われたと見られ、前期K型の貨幣も江戸で鑄造されたことを示しています。京都が江戸の直後に慶長一分判の鑄造を開始したことを踏まえると、この種類は両方の場所で製造された可能性があります。

前期慶長一分判において、A面は常にK書体である一方、光次の筆画7の位置は、中期K型の例よりも前期のものの方が一貫しています。筆画7はほとんどの場合、筆画5の左端にあり、直角を形成しています。診断的特徴として用いるには十分な一貫性はありませんが、中期の作品ではほとんど見られないため、注目に値します。

9ページで述べたように、「分」は完全に離れているか、点線枠にわずかに接しているかのいずれかです。このため、後期の発行物よりも貨幣の中心に近い位置に配置されています。さらに、筆画2は後期のものよりも短いのが一般的で、筆画1から分離している可能性が高いです。



図8
筆画5と7の間の直角。これは前期慶長一分判で非常に一般的だが、診断的特徴として使用すべきではない。例外も存在する。

1 本稿の範囲外ではあるが、35枚の額一分判に関する金型研究によって、8種類のA金型、8種類のB金型、そして完全に固有な貨幣が存在しないことが明らかになった。額-A8は最も一般的なA金型であり、11種類の異なる例で確認されている。この金型研究の詳細および更新情報は以下で確認できる：<https://rectanglecoins.com/gaku-ichibu-die-study>

4つの点

5つの点

完全な列

12%

70%

18%



図9

前期慶長一分判に見られる上部枠のさまざまな構成。左の例は左上の隅に5つの点、右上の隅に4つの点を持つ。この金型(無本-O-B20)は4点の例に分類された。

前期慶長一分判を識別するための歴史的な基準の一つとして、B面の upper 隅にある点の数が挙げられます。後期の貨幣(いくつかの小分類を除く)では各隅に3つの点がありますが、前期の例では各側に4つ以上の点が見られます。観察した作品のうち、少なくとも1つの上隅の角が確認できたものでは、12%が各隅に4つの点、70%が5つの点、18%が両端をつなぐ完全な点列を持っていました。このうち、完全な点列を持つすべての作品は無本-O-B4または無本-O-B8の金型を共有しています。これらの金型はいずれも無本-O-A3で確認されており、比較的近い時期に使用された可能性が示唆されます。

完全な点列を持つ貨幣は最初期に打たれたものと考えられることもあります。現状の写真では判別が難しいものの、額-A8と組み合わされたB金型には各上隅に4つの点があると考えられます。これが最初に打たれた慶長一分判の一つであり、最後の額金型が廃止される前に鑄造されたものと推測できます。ただし、点の数が必ずしも最初期の貨幣を示す指標であるとは限りません。



図10

左/上: 前期慶長一分判における典型的な「一」の配置。右/下: 中期片本K型のB面で、「一」が枠にわずかに接しており、他の診断的特徴を考慮しない場合、前期と誤認される可能性がある。

りません。

もう一つの伝統的な識別基準は、B面の「一」の位置です。前期の貨幣では通常、点線枠から離れています。後期の貨幣では点線枠の中に埋め込まれています。ただし、この特徴だけに頼るのは難しく、中期の例でも「一」が枠から離れて見えるものが複数存在します。他の特徴が明らかに中期のものであっても、このずれた位置の「一」を持つ金型で打たれた貨幣は、誤って前期と判断されることが時折あります。

その結果として、前期慶長一分判の識別基準を拡張し、「分」の位置を「点の数」と「一」の位置に加えて考慮することを提案します。これらの貨幣はしばしば中心

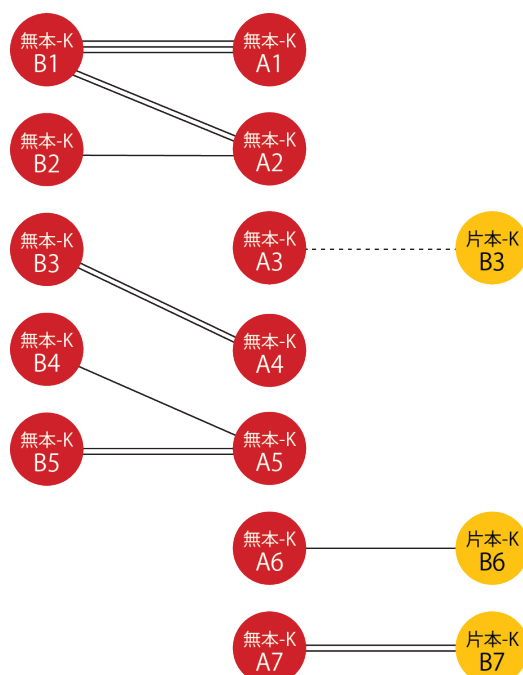
がずれていたり、打刻跡(チョップマーク)があるため、追加の基準を設けることで、これまで曖昧だった貨幣の識別が容易になります。

中期 無本 K 慶長一分判

評価対象となった32枚の中期無本K慶長一分判のうち、17枚は完全に固有の金型で打たれていました。これは鑄造数が大幅に多かったことを示し、より包括的な金型地図を作成するためには、はるかに多くの貨幣が必要であることを意味します。

このグループの中で特に注目されるのは、片本K型(黄色で示す)でも確認されたB金型を持つ貨幣です。これについては次の節で詳しく説明しますが、これは大きな傾向の始まりを示しています。

さらに注目すべきは、逆打ちの貨幣が存在しない点です。前期慶長一分判では2枚の逆打ち貨幣が確認されましたが、中期では見られません。最後に、前期ではない4例のうちの1つである額一分判作り直し判が、このK書体の中で確認されています。



+17種類の固有の金型ペア

中期 片本 K 慶長一分判

これまで特に希少とはされていませんでしたが、この種類は主要な分類の中で最も例が少なく、すべての資料を通してわずか11例しか確認されていません。これらは2種類のA金型のみを共有しています。片本-K-A2の「本」はやや薄く、まれに視認が難しい場合があります。



図11
両方のA金型。左:片本-K-A1、右:片本-K-A2。



図12
非常に薄い「本」を示す片本-K-A2の例。

このうち2つのB金型(片本-K-B6および片本-K-B7)では、「一」が点線枠にほとんど接しています。これらはいずれも他の識別基準を考慮しない場合、または上部の点線枠が欠けている・不鮮明な場合、前期慶長一分判と容易に混同される可能性があります。完全に打たれた両金型の貨幣からは、各隅に3つの点しかなく、「分」が点線枠内に部分的に埋め込まれていることが明確に確認できます。



図13
両方のB金型で「一」が点線枠にわずかに接している。
(左/上:片本-K-B6 右/下:片本-K-B7)

このグループには、明確な額一分判作り直し判が2例確認されており、どちらも異なるA金型に由来します。これにより、両方の金型が江戸で使用されたことが示され、すべての例が江戸で鑄造された可能性が高いと考えられます。金型が鑄造所の間で交換されたり、額一分判が他の鑄造所に持ち込まれた可能性もありますが、どちらの説明も可能性は低いです。

このグループにおける額一分判作り直し判の出現頻度は、慶長一分判の95年間にわたる鑄造期間の中でも比較的初期の段階に位置していることを示唆しています。一般的に、「本」の刻印がある貨幣は、流通中に損傷を受け、再打刻(再鑄造)が必要になった慶長一分判を示すものとして知られています。したがって、慶長一分判は「本」金型が作られるかなり前から生産されていたと考えられます。このため、これらの貨幣は前期

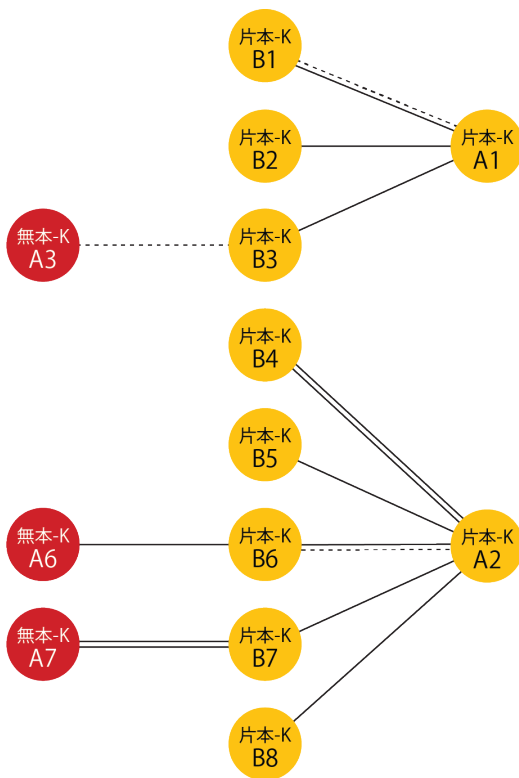
慶長一分判よりもわずかに後の時期に位置づけられますが、額一分判作り直し判の比率から見て、江戸で打たれた最初期の「本」刻印を持つ貨幣群であると考えられます。また、前期および中期K型の間で共有される書体スタイルが、この順序をさらに裏付けています。

中期 無本 S 慶長一分判

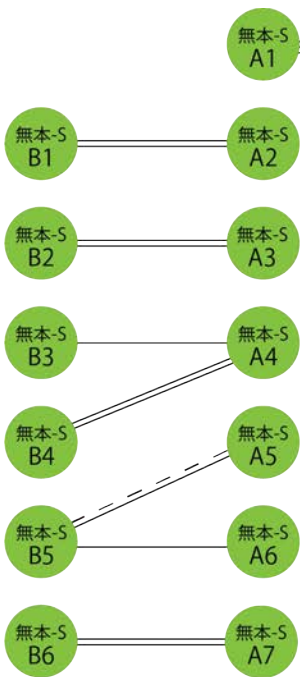
金型地図は次のページに続く。

中期無本S慶長一分判では、無本Kグループに比べて明らかに多くの重複した金型が確認されました。しかし、これらの多くは両本B金型との併用によるものであり、この点については両本の節で詳しく述べます。全体で37枚を評価したうち、15枚が完全に固有の金型でした。

ここで特に注目すべき点は、種類間で共有されている金型はすべて他のS書体に属するものであるということです。無本および片本K型の貨幣の間には大きな重複が見られ、さらにここでも無本・片本・両本S型の間に重複が確認されました。一方で、書体間(金型スタイル間)での重複が全く見られないことから、KとSを分けて扱うべき理由が、場所的または時期的な違いに基づくものであることが示唆されます。



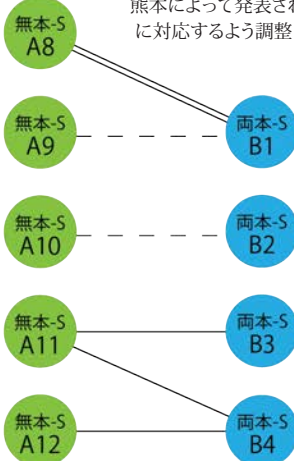
すべての片本および両本の金型地図において、B金型を共有する無本の貨幣は参考として含まれていますが、貨幣上に「本」があるのは、A金型がSHまたはDHで始まるもののみです。



1596 - 1601	額一分判
1601 - 1607	前期慶長一分判
1607 - ?	中期慶長一分判(おそらくK)
? - ?	鑄造中止
? - ?	中期慶長一分判(おそらくS)
? - 1657	鑄造中止
1657 - 1695	後期慶長一分判

図14

熊本によって発表された年表(小判花押の書体に基づく)をもとに、一分判の書体区分に対応するよう調整したもの。図31では、熊本の研究における小判書体のより完全な概要が示されている。



さらに熊本は、同時期に京都で鑄造されたとされる小判のうち、K書体に最も近いものとして4種類を挙げています。しかし、現時点ではK書体の一分判がこの時期に京都でも鑄造されていたかどうかを確認する資料は得られていません。当時の各鑄造所からの図版や、より詳細な鑄造数の記録があれば、この点を明確にできる可能性があります。

最後に、このグループには逆打ちの貨幣が3枚確認されています。そのうち2枚は両本B金型との組み合わせによるものであり、これらは前期慶長一分判以来、初めて確認された逆打ち貨幣です。

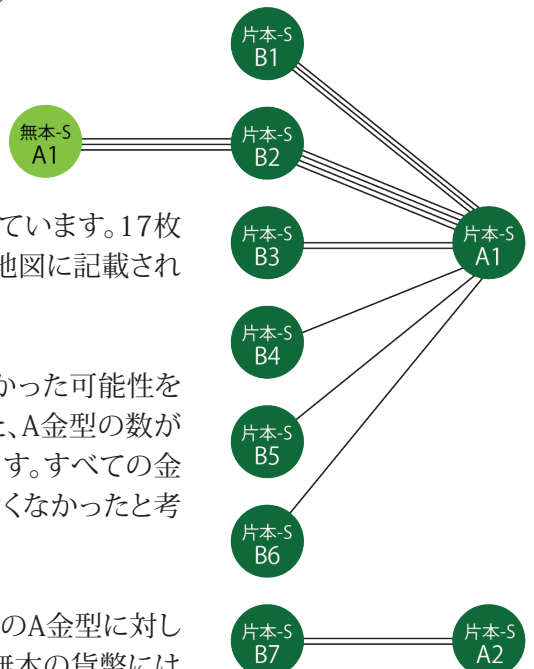
+15種類の固有の金型ペア

中期 片本 S 慶長一分判

片本の分類の中では、S型は他のどの書体よりも金型の数が著しく多く確認されています。17枚のうち、5種類のA金型と10種類のB金型が見つかっており(そのうち各3種類は地図に記載されていない完全な固有金型の貨幣です)。

固有金型の数の多さは、片本S慶長一分判の当初の鑄造数が片本K型よりも多かった可能性を示唆しています。ただし、これを確認するにはより大きな標本数が必要です。また、A金型の数が多いのは、より多くの場所で鑄造が行われたことを反映している可能性もあります。すべての金型が摩耗するまで使用されたわけではない場合、鑄造枚数自体への影響は大きくなかったと考えられます。

片本の貨幣全体を見ると、一定の傾向が見えてきます。A金型の数が少なく、1つのA金型に対して多くのB金型が組み合わせられているという特徴が一貫して見られます。これは無本の貨幣には見られない特徴です。また、種類間でB金型が重複していることから、片本金型の使用方法に関する手がかりを与えていると考えられます。



+3種類の固有の金型ペア

片本の貨幣は、損傷した貨幣が金座に戻され、完全に再鑄造されたことを示しています。A金型はこの目的のために作られたものであり、以前に使用された無本の金型に「本」を追加して片本貨幣を作ったという証拠は見つかっていません。一方で、B金型は片本と無本の貨幣の間に頻繁に共有されており、B金型が特別に作られたものではなかったことを示唆しています。私は、片本A金型は多くの修復が必要な貨幣が一定数蓄積された段階で取り出され、手元にある任意のB金型と組み合わせて打たれ、その後、A金型は再び保管され、必要に応じて再利用されたと考えています。これが種類間でA金型が共有されている理由であり、少数のA金型に対して多くのB金型が組み合わせられている理由でもあります。また、同じB金型に複数の片本A金型が使用されていないことも説明できます。

最後に、逆打ちの貨幣が存在しない点に注目してください。どの書体にも逆打ちされた片本貨幣の例は確認されていません。

中期 両本 S 慶長一分判

この金型地図は、確認されたすべての両本慶長一分判を示しています。他のどの種類よりも詳しく調査を行い、研究機関の収藏品、文献に掲載された貨幣、そして商人のウェブサイトを網羅的に調べました。すべての確認例において、同じA金型が使用されており、B金型はわずか4種類のみが確認されています。

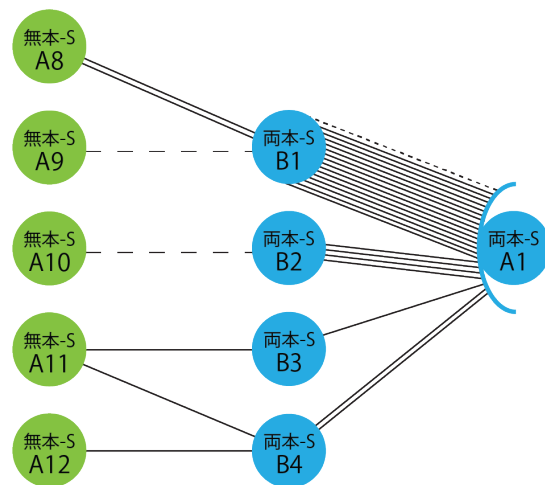


図15(左)
すべてのB金型。左から右へ、1～4の順。

金型「両本-S-B4」には、複数の進行的な金型亀裂が確認されており、それによって4枚の貨幣が打たれた順序を特定することができます。無本-S-A11を使用した貨幣が最初に打たれ、下部の点の部分に小さな亀裂が見られます。

その後、2枚の両本貨幣が続き、この点を通るより大きな亀裂が現れました。最後に、無本金型を使用した無本-S-A12の貨幣が打たれ、このとき下部の亀裂はさらに大きくなり、「分」の下部を貫く大きな亀裂となっています。これは、B金型が修復された貨幣の再打刻に使用され、その後無本貨幣の製造に戻されたという前述の仮説を裏付けています。

また、いくつかの両本貨幣の例では、光次の筆画6と9の間に明確な金型亀裂が確認されています。これは現存する貨幣が打たれた順序を判断する有用な手がかりとなる可能性があります。この部分が明確に見える例は非常に限られています。多くの貨幣には桐紋の刻印や打刻印(チョップマーク)があり、この部分を覆い隠しているほか、販売時の画像の解像度が不十分で、金型の状態を判断できない場合もあります。ある例では、オークション出品時の元の写真には亀裂が見られなかったものの、PCGS TrueViewの

図16(下)

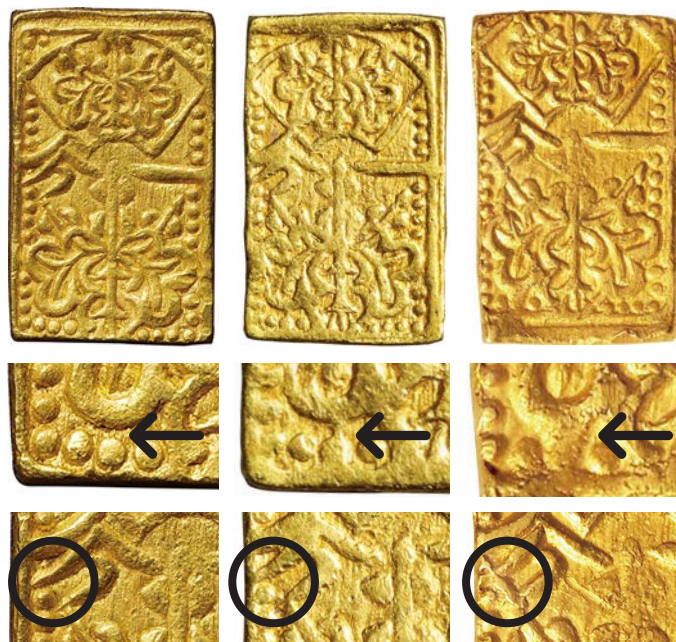
DH-S-B4における金型亀裂の進行。

この金型をDH-S-A1と組み合わせて使用した両方の例は同じ金型状態を示しており、そのうち1つのみがここに示されている。

無本-S-A11
両本-S-B4

DH-S-A1
両本-S-B4

無本-S-A12
両本-S-B4



画像では亀裂がはっきり確認されています(図17参照)。より一貫した高品質の画像、または現物の精査機会が得られない限り、この情報をもとに鑄造順序をさらに推定することはできません。



図18
額一分判の上に打ち直された両本貨幣。

両本S-B1金型を使用した両本額一分判作り直し判が1例確認されています(左図参照)。額一分判に見られる三重の枠がB面の上部にはっきりと確認でき、これは前述の通り、両本の打刻が江戸で行われた可能性を示しています。

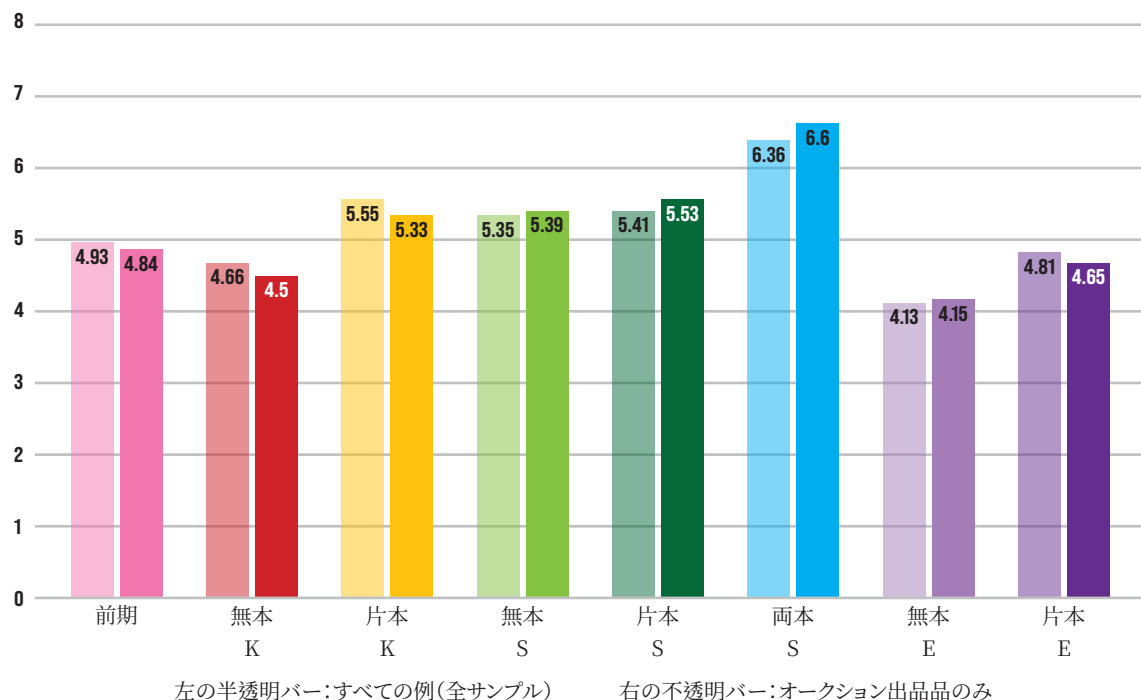
この例の左側の「本」はほとんど完全に不鮮明です。これは確認された中でも特に流通損傷の激しい貨幣のひとつであり、この不明瞭な「本」は金型の破損

ではなく、流通摩耗によるものと考えられます。

片本と両本の違いや、「本」の数の違いについては、これまでほとんど研究がなされていません。詳細な分析の結果、両本金型の慶長一分判は贈答用(儀礼的用途)として製造された可能性を提案します。

すべての記録済みの貨幣について、私は貨幣上で完全に打たれた枠線の数記録しました。「完全に打たれた枠線」とは、片面上のすべての点が完全に打たれ、最大で8本の完全な枠線が形成された場合を指します。これはやや主観的な判断を含みますが、可能な限り一貫性を保つよう努めました。完全に打たれた枠線の平均数は、両本貨幣で最も多く確認されています。

完全に打たれた枠線の平均数



オークションデータのみを対象¹に一元配置分散分析(ANOVA)が実施された。これは、3つ以上のグループ間で平均値に統計的に有意な差があるかどうかを判断するための検定である。結果が0.05未満であれば統計的に有意な差があるとされるが、このデータでは0.00000028という結果が得られた。この結果は、平均値の差が小標本の偶然によるものではないことを裏付けている。



図17
同じ貨幣(DH-S-A1/DH-S-B3)の2枚の写真。上:オークション掲載時の写真/下:PCGS TrueViewの写真。

1 「競売例に基づく相対的希少性」(25ページ)でさらに詳しく述べられているように、「オークション限定データ」は、2008年から2024年の間に行われた3つのオークションハウスでの出品を指す。このデータ制限は、希少タイプをより徹底的に探したことによる偏りの可能性を排除する目的で設定されたものである。

Task	前期 (Previous)	無本 K (No book K)	片本 K (Partial book K)	無本 S (No book S)	片本 S (Partial book S)	両本 S (Both books S)	無本 E (No book E)	片本 E (Partial book E)
前期	62% [24 点]							
無本 K		22% [6]						
片本 K			33% [3]					
無本 S				16% [6]				
片本 S					40% [6]			
両本 S						67% [10]		
無本 E							31% [15]	
片本 E								45% [9]

0% 25% 50% 75% 100%

半透明(左) - チョップマークあり
ハッシュ状(中央) - 写真では判別不能
塗りつぶし(右) - チョップマークなし

対照的に、両本の例ではチョップマークが確認されたのはわずか27%であった。これは、両本が慶長一分判の他のタイプほど流通しなかったことを示唆している。これは提示用貨幣であると考えられる理由でもある。(もし提示用でなかったとすれば、この差異はむしろ評判が悪かったことを示している可能性がある。)

ことができた逆打の慶長一分判は非常に少なく、逆打個体における金型の重複がどの程度生じているかについて結論を出すのは難しいが、中期の逆打個体3例のうち2例で両本 B 金型が使われているというのは、両者の特徴に関連性がある場合を除き、統計的に考えにくい。

逆打の片本は確認されていないため、この時期、金座が提示用貨幣を異なる方法で打つことを決め、金型を反転させる代わりに余分な文字を追加した可能性がある。

なお、これらは依然として作り直し判であると思われる点には注意が必要である。多くの例—約30%—は明確に既存の貨幣の上から打ち直されている。片本の全タイプでも、同様の割合で上打ちの痕跡が確認される。

後期 無本 E 慶長一分判は、金型地図としては最も単純な部類に入り、類型間に重複がない。調査した49例のうち、完全にユニークな金型の組み合わせは34～35組であった。

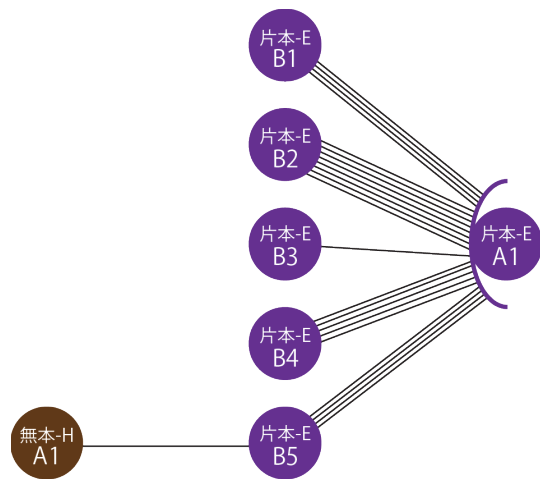
このグループのうち2例はA面のみの写真しか存在しない。通常であれば片面のみの個体は分析から除外するが、これらはどちらも逆打の個体であり、十分に重要と判断して含めた。1例は金型 無本-E-A1 を使用しており、金型から出て中央で終わる一本の線によって示される。もう1例はユニークなA金型を持っており、おそらく完全にユニークな個体である。

全体として、この類型には逆打の個体が7例確認されており、他のどの類型よりも多い。このうち2例または3例は同じ金型の組を共有しており、別の例では同じA金型に異なるB金型が組み合わされている。これは、両本 慶長一分判の項で述べた「提示用貨幣が金型を共有した」という考えをある程度裏付けるものとなっている。興味深いことに、このA金型には光次の周囲に大きな金型欠けがあり、特別に打たれた提示用貨幣としては奇妙な選択に見える。

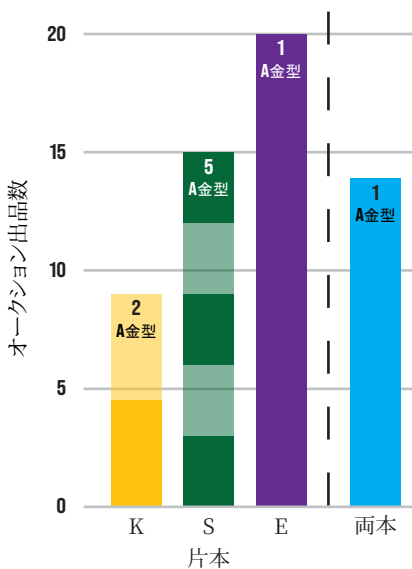
後期慶長一分判は、シリーズ全体の中でも最も雑な金型の一部を示す。特にB面の縁点は、初期の例よりも大きく、この特徴に加えて「分」の位置にも独特の印象を与える。書体は一般的に識別しやすく、無本の中でも最も判別が容易な類型となっている。



図 19
無本-E-A1。光の筆画4・5・6
の周囲に大きな金型欠け
が見られる。



ユニークな A 金型
と出品例の比較



後期 片本 E 慶長一分判

後期 片本 E 慶長一分判には、いくつかの奇妙な点が見られるが、その中でも特に顕著なのは A 金型が1種類しか使われていないことである。この金型には2つの明確な金型状態が存在し、後者の状態は私が確認した限り片本-E-B5(これについては後で詳述する)と組み合わせられているのみである。後期の金型状態では、光次の左側の地に欠け

があるが、前期の状態にはそれが見られない。他の診断点からも、右に示されているように、これらが同じ金型であることが明確である。また、書体の異なる類型の中で唯一金型の重複が見られる例でもあり、片本 E と 無本 H(非常に稀な小類型)の間でB金型が共有されている。

ここで最も不可解な点の一つは、現在の稀少性と比較した金型数の多さである。左のグラフは、この乖離を一目で示している。棒全体の高さは、2008年から2024年の間にオークションで確認されたユニークな個体数を示しており、おそらく各タイプの相対的な稀少性を表している(例:片本 E は20例が出品されており、このグループで最も一般的なタイプであることを示している)。各棒はさらに区分され、発見されたユニークな A 金型の数を示している(例:片本 S は A 金型が5種類あるため、棒は5つの区分に分けられている)。

前期の金型状態

後期の金型状態



図 20

片本-E-A1 の金型状態の比較。

上部と中央の拡大:同一の金型であることを示す容易な識別点。上段の潰れた点、および片本の右上にある損傷。

下部の拡大:後期の金型状態にのみ見られる金型欠け。

各セクションが示す A 金型は、すべての片本の類型で同じくらいの高さになると予想される。これは、生存数の多い個体は元々の発行枚数も金型数も多かったことを示唆している。この傾向は、片本 K と S の個体だけを見ても当てはまり、すべての A 金型区分の高さが互いにほぼ同じである。片本 E と 両本 S も互いに比較的近いが、他の2つの類型と比べると、見た目の稀少性に対して明らかに金型数が少ない。

両本 慶長一分判も比較のために含めているが、その生存率が高く見える理由は単純である。別の類型として容易に識別でき、そのため保存されやすかったためである。しかし、本来であればすべての片本類型は元々の発行枚数に比例して同じ割合で保存されていると考えられる。私の知る限り、ある片本類型だけが他よりも価値があるとされた例はこれまで存在しない。これは、片本 E の個体が他の片本類型よりも高い割合で生き残ったか、あるいは使用された A 金型が同類型の他の A 金型よりもはるかに多くの枚数を打ったことを示しているように見える。

また、書体 E が唯一、無本と片本の間で B 金型のクロスオーバーが確認されていない類型である点も注目に値する。同じ書体の無本と片本の間でこれらのクロスオーバーが存在したが、最近まで確認されていなかった可能性や、単に生き残っていない可能性もあるが、確かなことは言えない。金型の特徴に基づくと、片本-E-B1 から B3 までは無本 E の個体と同時期に製作されたと考えており、今後クロスオーバー個体が見つかる可能性が高い。片本-E-B4 はやや曖昧であり、後(23ページ)で詳述するが、片本-E-B5 は無本 H の A 金型と組み合わせられた例が確認できる。

この金型は、右側の「一」のすぐ上にある大きな金型欠けによって非常に容易に識別できる。この欠けが生じる以前に、この B 金型を使用したいかなる種類の慶長一分判も私は確認できていない。この金型を使用した片本 E の個体は、A 面に欠けがある唯一の例であり、片本 E の中でも最後期に製作されたことを示している。また、書体 H の個体が E より後に作られたことも裏付けている。



図 21

片本 E-B5 を使用した片本 E の例を2点示す。

金座がこれらの個体を実際に流通させたという事実は驚くべきことである。軽微な二度

打ちや小さな金型欠けであれば時折見られるが、このように重大な欠陥がある金型はほとんど例がない。他の金一分で、これほど顕著な問題を抱えた個体が大量に発行された例は私は見たことがない。他の明白な欠陥、たとえば二度打ちなどは単発的な事例であり、大量の個体に共通して現れるものではないため、過去の品質管理をすり抜けたとしてもまだ理解しやすい。

後期 無本 H/U 慶長一分判

H と U は二つの独立した書体であるが、まとめて評価するほうが合理的であると私は考えている。A 面だけを見ると、書体 H を E と、書体 U を K と同じグループにまとめることもできるほど、両者には多くの共通点がある。しかし、B 面が両書体を明確に区別しており、そのため私はこれらを鑄造時期の末尾に独立した分類として配置した。書体の類似性によって、これらがこれまで一つの独立した類型として認識されずにきたのではないと思われる。

書体 H の例はこれまでに3例しか確認していないが、そのうちの1例は片本 E-B5 と組み合わせられている。この個体の所有者と話したところ、この B 金型は過去にも記録されていることがわかった。図22の個体は、同じ B 金型を用いた片本 E の個体と並べて、『知命泉譚 ひびき：江戸幕末までの日本の金貨・銀貨選集』小森蒼治（1990年6月30日刊）に掲載されていたという。しかし私はこの書籍を入手できておらず、現在該当ページのコピーもしくはスキャンを探している最中である。

B面の縁にある点に注目してほしい。これら3例すべてに共通しており、後期の個体で一般的に見られる点よりもかなり小さい。また、「一」の上に4つの点が3例すべてに見られ（片本 E-B5 が欠ける前に均等に打たれていたと仮定した場合）、E の個体で確認できたものよりも多い。

書体 U の B 面の書体は非常によく似ている。U のサンプル数が多いため変異も多く見られるが、両グループに共通する重要な特徴がいくつかある。多くの例では、点の縁の側面が下部の桐紋によってほとんど中断されない。主要な類型では、桐紋が貨幣の縁まで伸びるため縁に大きな切れ目が生じるが、これらの例ではほとんど隙間がない。さらに、両書体の例のうち一つを除き、下部の桐紋の蕾には通常見られる茎が存在しない。

無本-H
A1

片本-E
B5

+2種類の固有のH金型ペア

5種類の固有のU金型ペア



図 22

無本-H-A1 と片本-E-B5 の組み合わせ。



図 23

書体 H のユニークな2例。



図24

無本-H-A1 と 片本-E-B5 の金型の組み合わせから、書体 H が書体 E より後に作られたことがわかっている。そして私は、書体の変化に基づき、U は H の後に続いたと考えている。これらの個体は、時期判定に用いられてきた従来のほぼすべての基準に反している。「一」および「分」の位置は全例で中期を示しているが、上部の点の縁が確認できる5例のうち、2例は各角に3つ以上の点を持つ。1例は5つの点、もう1例は7つの点を持っている。

熊本は、1657年から1695年の最後の鑄造期において、書体 U を E と同じグループに分類している。私はこの書体の小判の例を9点確認することができたが、いずれも粗目打の莫莖目であり、鑄造期の後半に作られたことを示唆している。熊本は書体 H を掲載しておらず、私もこの書体の小判を確認することができていない。



図 25
書体 U の3例。

小判の粗目打と細目打

小判に見られる水平の細い線は「莫薩目」と呼ばれる。慶長小判では、この莫薩目の間隔によって年代を判別する。線と線の間隔が狭いもの(細目打)は早い時期に鑄造され、線の間隔が広いもの(粗目打)は後期に鑄造された。



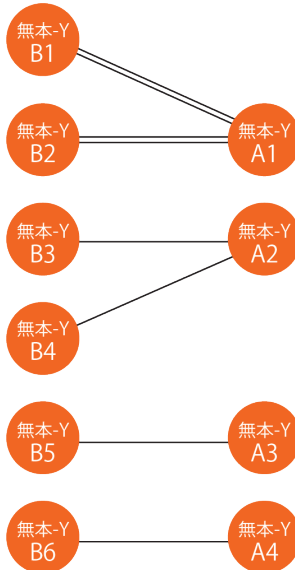
図 26
左/上:細目打の初期 慶長小判。
右/下:粗目打の後期 慶長小判。



図 28
書体 Y で確認された小判2例。いずれも初期または後期として容易に分類できない。

無本 Y 慶長一分判

この書体に属する個体を8例確認しており、A 金型が4種類、B 金型が6種類存在する。これらの多くは「分」が縁点の中に完全に収まり、「一」の上に3つの点、下に3つまたは4つの点があり、後期を示している。しかし、点の大きさおよび全体の書体は中期に近いように見える。さらに複雑なのは、金型 無本-Y-B2 が右上の角に4つの点を持ち、無本-Y-B6 が左上の角に4つの点を持つ点である。



熊本は、この書体を1657年から1695年の最後の鑄造期に書体 E と同じグループに分類している。私が確認した Y の小判2例のうち、いずれも莫薩目の様式から初期または後期¹と明確に区別できない。私はこれらが K と S または S と E の間の移行的な個体であると考えている。

Sの小判は、私が確認した限りではどれもこれら2例より粗い莫薩目を持っており、この書体が K と S の間の移行段階であった可能性が高いことを示している。しかし、一分における「分」の位置を見ると、S と E の間に置くほうが自然であるように思われる。確実にこの書体を鑄造順に位置付けるには、さらに多くの例が必要である。

1 慶長小判を初期・中期・後期に分類する方法は、本稿における慶長一分判の初期・中期・後期の区分とは一致しない。私は、初期の慶長小判は初期および中期の一分と重なり、後期の小判は中期および後期の一分と重なると考えている。



図 27
上:無本-Y-B2。
下:無本-Y-B6。



図 29
書体 Y の3例。



図 30
片本 E の後期例。SH-E-B4 を使用。

外れ値

306点を分析した結果、これまでに述べた類型のいずれにも当てはまらない例外個体はわずか3点であった。1点目はチョップマークが多すぎて識別が不可能であり、写真も掲載していない。



図 31
2つ目の例外個体

鑄造場所の判別

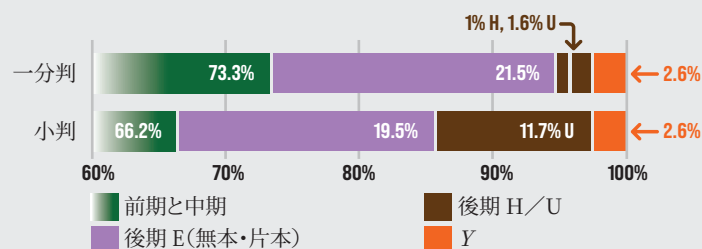
もし鑄造場所ではなく書体によって時期を示すのであれば、個々の貨幣がどの鑄造所に属するのかを判断するためには、どのような情報が残されているのだろうか。

さらなる示唆を得るには、小判を見る必要があるかもしれない。熊本は多くの異なる書体の図を提示しており、それぞれが鑄造時期と鑄造場所に分類されている。彼の見解は次のページに要約されている。私の理解では、熊本の鑄造時期の分類は、裏面の花押の書体を中心としているように思われる。鑄造場所がどのように決定されたのかについてはよくわからない。

これで再び片本-E-B4 に話が戻る。この金型は、E の個体に典型的に見られるよりも小さい点を持ち、書体 H、U、Y と組み合わせられる他の B 金型の中に置かれても違和感がない。私は、これが書体 H で確認される B 金型への移行の始まりである可能性が高いと考えているが、この金型を共有する無本の例が存在しないため、確実なことは言えない。

いずれにせよ、これら三つの小類型は、慶長一分判の中でも最も稀少なタイプである。

書体別の比率



77点の小判サンプルに基づく、書体 U は一分判より小判で著しく多く見られるようである。このデータには確認された全306点の一分判が含まれている。

2点目は後期で書体 S に属するよう見えるが、Outlier Group 2 の書体とは一致しない。この金型を使用しているように見える他の個体もこれまでに確認されていない。類似の個体や金型一致が見つからない限り、私はこの個体が意図せず生じたミュール、または当時の偽造貨幣である可能性が高いと考えている。

3点目(最後の例外個体)は、A 面の書体が E に最も近く、「分」の位置から後期であることがわかる。しかし、B 面の右上の角には4つの点がある。このことから、私はこの個体が E と H の間に位置する移行的な個体である可能性が高いと考えている。



図 32
3つ目の例外個体

小判についてはそれほど詳しく研究していないが、簡単な調査から、初期の慶長小判の多くは細目打であり、その書体が額一分判、または主に書体 K と一致していることがわかった。粗目打の小判は主に書体 E で、時折 S の例も見られる。これは熊本の分類とも一致している。

熊本の鑄造場所分類に従うのであれば、京座と駿河座は前期と中期慶長一分判のみを製造していたように見える。しかし、これらの分類がどのようにして決定されたのかに関するさらなる情報がないため、追加の診断的特徴についてのコメントはできない。駿河座の操業期間中に前期 K から中期 K へ移行している点は、その変化が1606/1607年から1612/1616年の間に起きたことを示唆している。

	江戸座	京座	駿河座
1596 - 1601	額		
1601 - 1607	額	額 前期 K	前期 K
1607 - ?	前期 K 中期 K	前期 K 中期 K	前期 K 中期 K
? - ?		鑄造中止	
? - ?	中期 S	中期 K	
? - 1657		鑄造中止	
1657 - 1695	Y 後期 E 後期 U		

図 33

これは図14で示されたよりも複雑な書体の重なりを示唆している。書体 H は熊本の著作に掲載されていないため、ここには含まれていない。

特定の鑄造所に帰属された個体を示す最古の文献として私が確認できたのは、1810年(第2巻)に刊行された『金銀図録』で、そこには駿河座に帰属する2点が描かれている。どちらの図もやや曖昧で、この図がどのように作成されたのか、またどのように識別されたのかは不明である。私が翻訳できた範囲では、これらの個体に関するさらなる解説は示されていない。

最後に、英語文献で一般的に省略されている鑄造所がある。それが佐渡座である。佐渡座で打たれた一分を識別する既知の方法はないが、小判については、刻印された極印から識別できる。私は佐渡座の慶長小判を3例¹確認することができたが、「光次」と花押はすべて別の金型を使用しています。



図 34

慶長一分判を製造した各鑄造所の地図。



図 35

『金銀図録』第2巻17ページ(図版を拡大)。右上には「同上[慶長一分判を指す] 駿河座一分判金」と記されている。下部のキャプションは重量について説明している。このページに関するその他の文章は見当たらない。

1 写真が掲載されていない2例目と3例目は、西脇康『佐渡小判+切額の研究』の42ページおよび44ページに掲載されている。

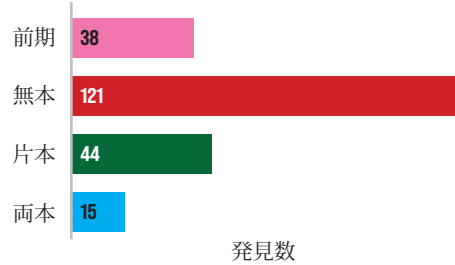


すべての例は明らかに書体 S であり、筆画①と②は垂直で互いに平行し、筆画②と筆画④の左端との間には比較的広い間隔がある。筆画③はそのまま筆画④へと流れ込むように続く。佐渡で鑄造された慶長一分判も同様の書体を使用していたと推測できるが、この書体は個々の貨幣を確実に識別できるほど明瞭ではない。より多くの佐渡座の慶長小判を調査することで、より具体的な基準が確立できるかもしれない。

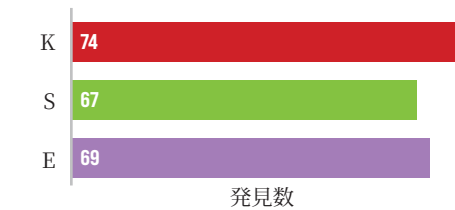
図 36
佐渡小判と書体の拡大。

オークション出品例に基づく比較的稀少性

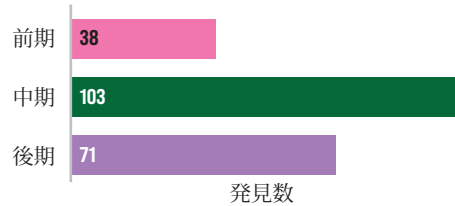
特に断りがない限り、ここから先の統計はすべて、2008年から2024年末までに銀座コイン、日本コインオークション、泰星オークションで出品された個体のみを対象としている。以前の分析では、PCGS 鑑定品や直接取引で確認された個体も含めていたが、特定のグループに限定することで、ここで提示する数字が現存個体全体の傾向をより正確に反映することを期待している。書体 H、U、Y は、オークション出品例から傾向を判断できるだけのデータがある場合に含めている。全体調査では小類型が3～8例確認されているが、オークションデータのみに絞ると、HとUはそれぞれ1例ずつ、Yは6例のみである。



このサンプルに見られる例の数を、典型的な慶長一分判の分類で区分すると、概ね期待どおりの結果となる。無本が最も多く、前期と片本はほぼ同程度の稀少性であり、両本が最も稀少である。



書体の大分類のみで区分すると、3つの書体の間で例の数はほぼ同数となる。これは過去の評価とも一致しており、現在はいずれの書体にも特別な価格上昇は見られない。

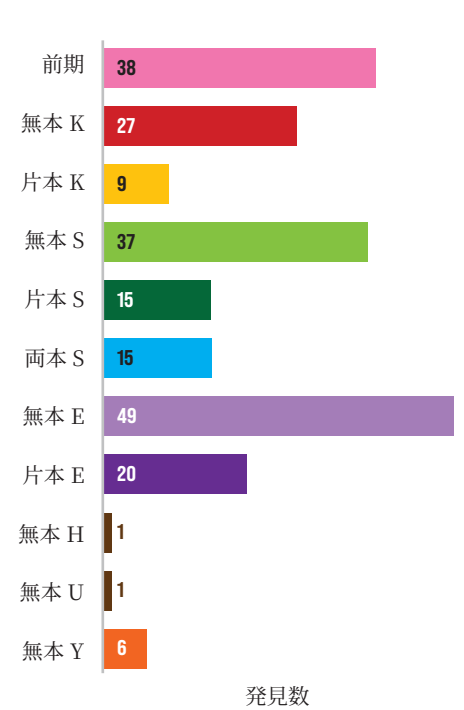


鑄造時期のみで区分すると、中期が最も多く、前期が最も稀少である。

しかし、本稿で示したすべての基準(右側)に基づいて例を分類すると、慶長一分判は3段階の稀少性に分類できることがわかる。

片本 K が主要類型の中で最も稀少であるという事実は、現在の市場価格の傾向とは大きく異なる結果である。現状、これらの個体は他の片本類型に対して特別な価格上昇を示しておらず、小類型のいずれも無本の他の書体に対してプレミアムを持っていない。

ここに示された各データセットは、慶長一分判をどのように収集するかという異なる方法を表している。どの方法が今後最も一般的になるかによって、価格傾向が左右される可能性がある。執筆時点では、左上のグラフが最も一般的な収集方法に基づく慶長一分判の分類を示しており、価格もこの稀少性の傾向を反映している。



最も一般的(30回以上の出品)



比較的多い(15～30回の出品)



最も稀少(15回未満の出品)



金型個体数に基づく相対的希少性

本節では、他の統計に使用した特定のオークションに限定せず、金型から得られたすべてのデータを使用します。

平均的に考えれば、各金型が同程度の枚数を打刻したと仮定することができます。個々の金型ごとにばらつきがあるものの、この前提は各種別の元々の希少性の大きな像を示してくれるかもしれません。多くの金型が確認された種類は、少数しか金型が見つかっていない種類に比べて、はるかに多い鑄造数を持っていたと推測されます。多くの慶長一分判が溶解されてしまったため、これは現存数だけでは見えない、元々の鑄造数のより正確なイメージを描く助けとなる可能性があります。より具体的な当時の鑄造記録がない以上、確実なことは言えませんが、検討する価値は十分にあると考えています。

右図は、他の種類と比較した推定の元鑄造枚数を示しています。正確な枚数や理論値は不明ですが、無本系統の比率は、現存例と非常に似た傾向を示しており、サンプル全体の観察と整合しています。一方で、本系統を見ると不一致が見られます。

すべての本系統の金型が失敗で使用されなかった、あるいは何らかの未知の理由で特に高い割合で現存したという可能性もあります。両本は明らかに異なっており、他の種類より多く残された可能性があります。後期片本Eが他の片本種別より高い割合で残存した理由については、私には思い当たるものがありません。

打ち込み桐紋印

いずれの種類でも、本が付かないタイプは、大多数が打ち込みの「小桐」印を一つ持っています。後期ではやや一貫性が弱くなりますが、それでも大半の個体には確認されます。ごく少数の例では印がまったくなく、さらに二つ印がある例はきわめて少数です。

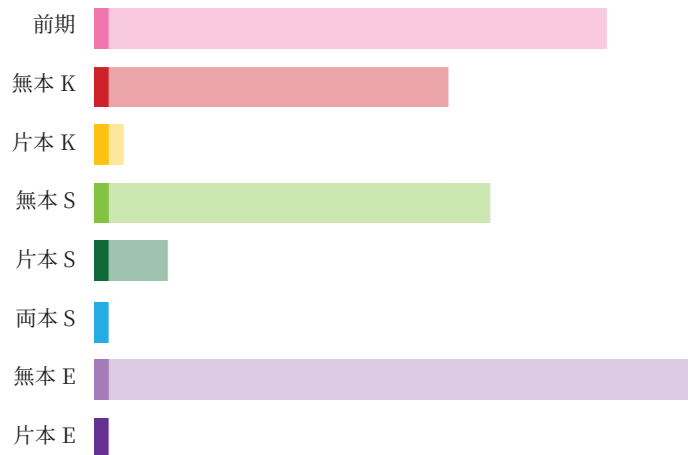
この傾向は本系統になると変化し、結果はまちまちです。印が存在する例でのその外観から考えるに、私はこの印が、その他の部分と同時に再打刻されたとは思っていません。印が残っている場合、それは元の小判からそのまま見える状態です。一方で印がない場合は、修復過程で隠れてしまったか、あるいは元の小判自体に印が存在しなかったかのどちらかだと考えられます。



図37

「小桐」印は、額一分判とともに導入された打ち込み印で、1736年までの金一分判の多くに使用されました。

A 金型に基づく推定相対鑄造数

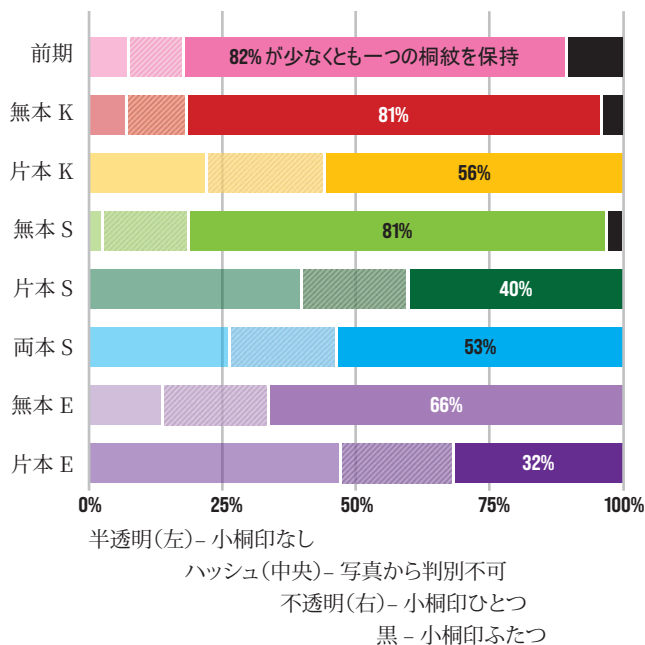


A金型がそれぞれ同じ枚数の貨幣を打刻したという仮定に基づいています。現在判明しているA金型の数に基づき、各タイプの鑄造数のうち、1つの金型が担当していたと想定される割合を計算することができます(例:片本SのA金型が5つある場合、それぞれが全鑄造数の20%を担当していたと推定されます)。最初の棒グラフは、1つの金型が担当する割合の高さで不透明の棒を作成し、残りを透明の棒で100%まで埋めています(片本Sの棒は20%が不透明、80%が透明で、両本の棒は完全に不透明になります)。その後、各不透明部分(各金型)が同じ枚数を表すように正規化されています。まだ未発見の金型、とくに鑄造数の多いタイプには存在する可能性があります。現時点のデータに基づく最も近い推定値となります。

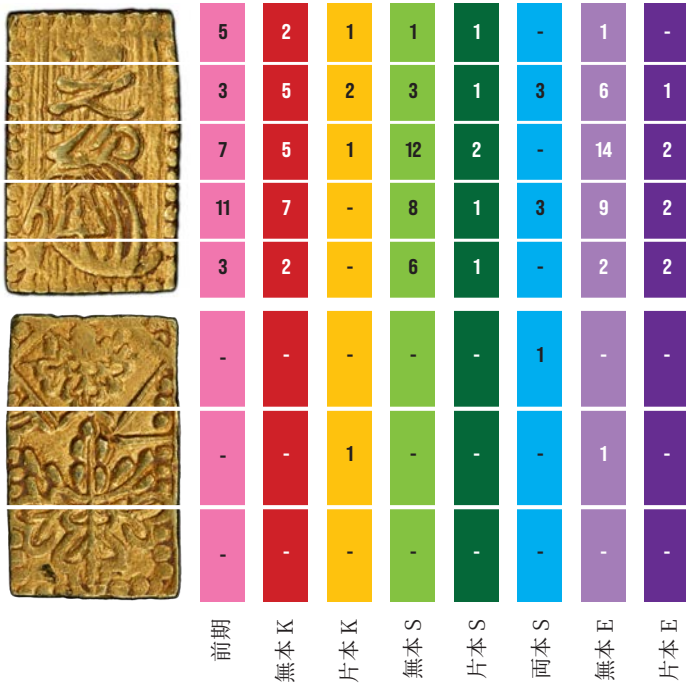
最も一般的な本タイプから最も稀なタイプまで



打ち込み桐紋



桐紋印の位置



印がある場合、小桐印はほとんど常にA面にあり、その面での位置は一定ではありません。本サンプルでは、B面に小桐印がある例は三点しかありません。

塚本豊次による『日本貨幣史(増訂)』では、小桐印の有無およびその位置を用いて鑄造場所を特定することが示されています。

慶長壹分判金にも、京座、江戸座及び駿河座の三種あり。各其異なる点は、京座は片本字及び兩本字の二種あるも、背の小桐なし。江戸座は片本字にして背の花押中に小桐を打記し、駿河座は兩本字にして背の花押下に小桐を打記せり。

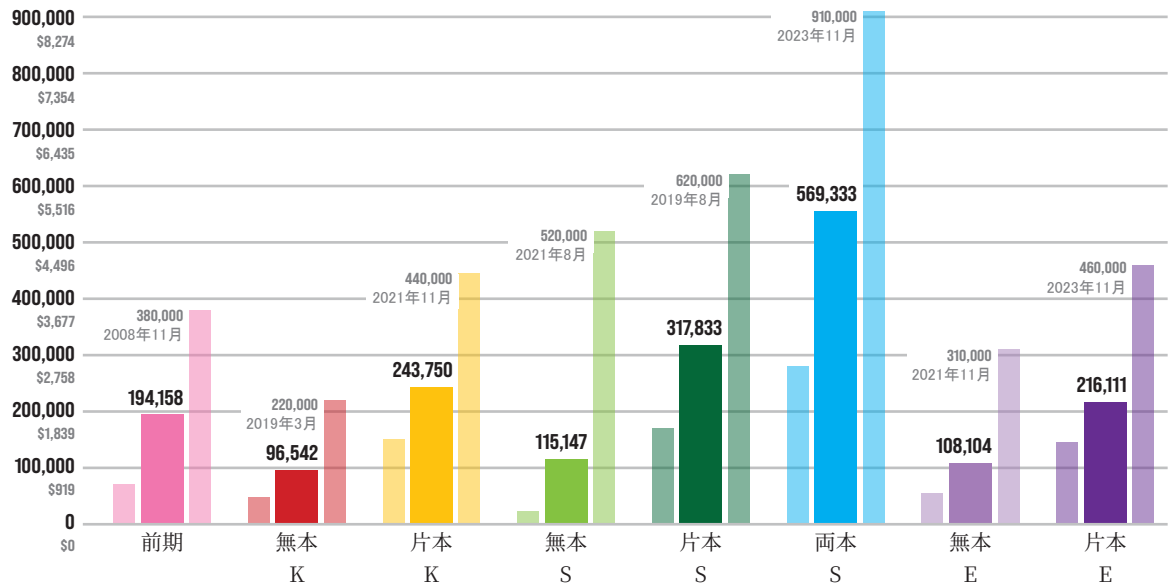
本系統の帰属は、この金型(金型)研究の結果と一致しません(特に兩本が二箇所で鑄造されていた点)。したがって、塚本が示したかったのは、無本が三つすべての鑄造地で鑄造されていた、という意味だと考えざるを得ません。

無本の小桐印の位置だけに着目すると、この帰属方法では、10.4% が京都で鑄造、51% が江戸で鑄造(中央またはそれ以上に小桐印があるすべての個体を含む場合)、そして 38.4% が駿河で鑄造されたことになります。(これは、小桐印がB面にある三点の個体を完全に除外しています。)上の図表でも分かるように、小桐印の位置と書風との間に明確な傾向は見られません。94年間の鑄造期間のうち、わずか5~10年で駿河がこれほど大きな割合を鑄造していたとは考えにくいです。

価格動向

2008~2024年の最低・最高・平均オークション落札価格(円)

価格動向は、慶長一分判を前期、標準、片本、両本に分類してきた過去の区分を反映しており、書風の違いによる特別なプレミアムは付けられていません。参考として、右側のグラフのY軸には、2008年から2024年までの円と米ドルの平均為替レート(1ドル=108.78円)が示されていますが、近年は大きく変動しています。



前期慶長一分判を除き、調査対象とした三つのオークションハウスにお

ける各タイプの最高落札記録は、2019年から2023年の間に発生しています。グラフには表示されていませんが、最低落札価格の多くは2014年から2016年の間に見られ、さらに一つ前(両本の2011年10月)と、二つ後(前期の2019年3月、無本 K の2018年4月)があります。

今後の展望

一つのまとまりとして見ると、慶長一分判は書風や打ち方において非常に多様性があります。本稿で示した区分は、金型や既に判別されている書風に基づき、その大きなグループをより一貫したタイプに分けることを目的としています。これらの明確な区分によって、この種類の収集がより広まること、そしてその背後にある歴史への関心が高まることを期待しています。

本稿で提案した区分を支持する、あるいは反対する追加証拠について、貨幣学コミュニティからの意見を求めています。

また、慶長小判と一分判の関係については、今後さらなる研究が必要だと考えています。私が確認できた参考文献の多くは小判に焦点を当てており、本稿がこの二つの額面をより包括的に扱う研究の出発点となること、または既にそのような研究が存在する場合はそれを私に知らせるきっかけとなることを願っています。

特に、細分類されたタイプには追加研究が必要です。確認されている個体が非常に少ないため、未発見の新たな個体が金型の意外な交差を示す可能性や、その放出順序への位置付けをより確実に裏付ける余地が大いにあります。これは、タイミングが曖昧な style Y の理解に特に役立つでしょう。

さらに、両本の目的についての研究が進むことも期待しています。現存する同時代の資料を見つけることはできませんでしたが、日本の研究者であればより良いアクセスがあるはずです。目的を示す記録は何か残っているのでしょうか。

まだ多くの疑問が残っていますが、慶長一分判をより明確なグループに分けることで、これらの疑問の内容を以前より明確に把握できたと考えています。将来の貨幣学者たちが本研究を基盤として、慶長一分判の94年間の鑄造の中に残された謎のいくつかを解明してくれることを願っています。

この研究の最新情報については <https://rectanglecoins.com/keicho-ichibu-die-study> をご覧ください。

利益相反に関する声明

本稿の公開時点において、私はいかなる慶長一分判も所有しておらず、また積極的に入札もしていません。今後もし私が慶長一分判を所有することがあれば、それは本情報が自由に公開された後に購入したものです。

AI に関する声明

本稿のいかなる部分においても、研究、執筆、図版を含むがこれらに限定されない範囲で、AIは使用されていません。私の知る限りでは、日本語への翻訳にも AI は使用されていません。

付録1: 典型例

各タイプには個体ごとの大きなばらつきがありますが、この付録では、それぞれについて三つの例を示し、他の個体の属性判定を補助することを目的としています。これらは各タイプのすべての例を代表するものではなく、私の知る限り特筆すべき点のない、小さなサンプルとして提示しています。

前期 無本 K 慶長一分判



中期 無本 K 慶長一分判



中期 片本 K 慶長一分判



中期 無本 S 慶長一分判



中期 片本 S 慶長一分判



中期 両本 S 慶長一分判



後期 無本 E 慶長一分判



後期 片本 E 慶長一分判



後期 無本 H 慶長一分判



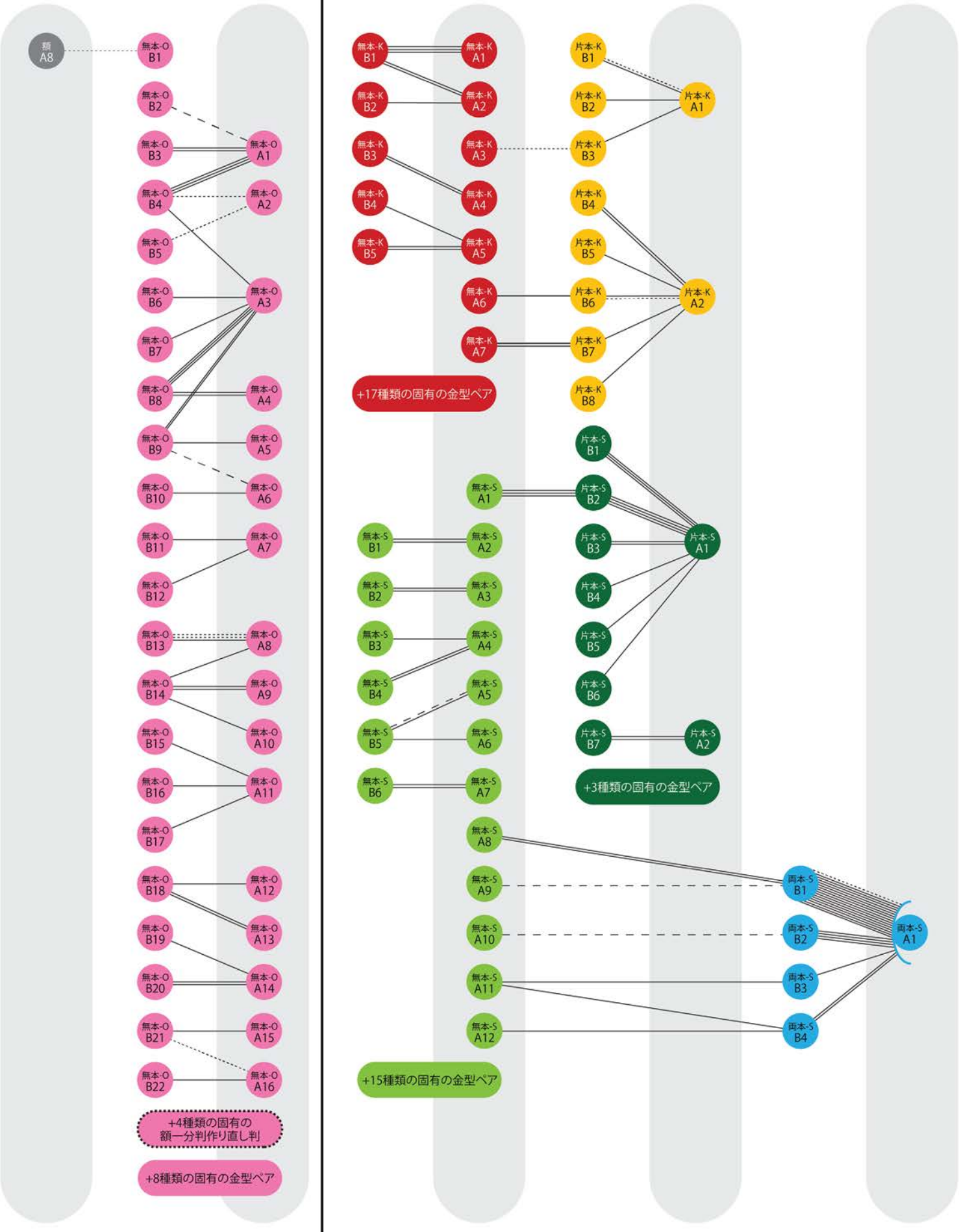
後期 無本 U 慶長一分判

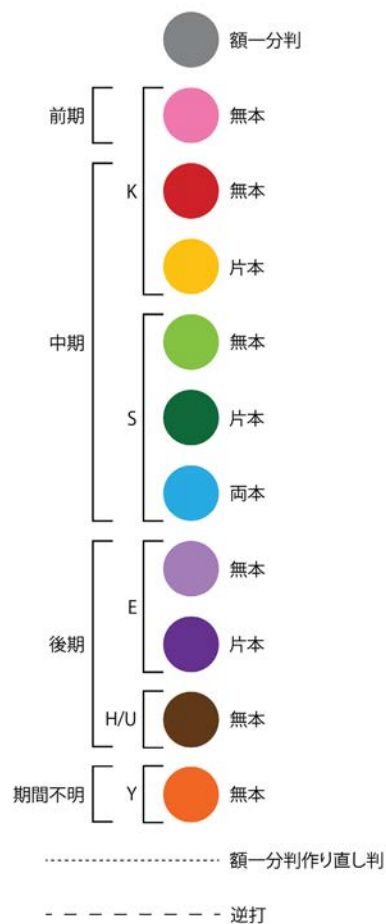
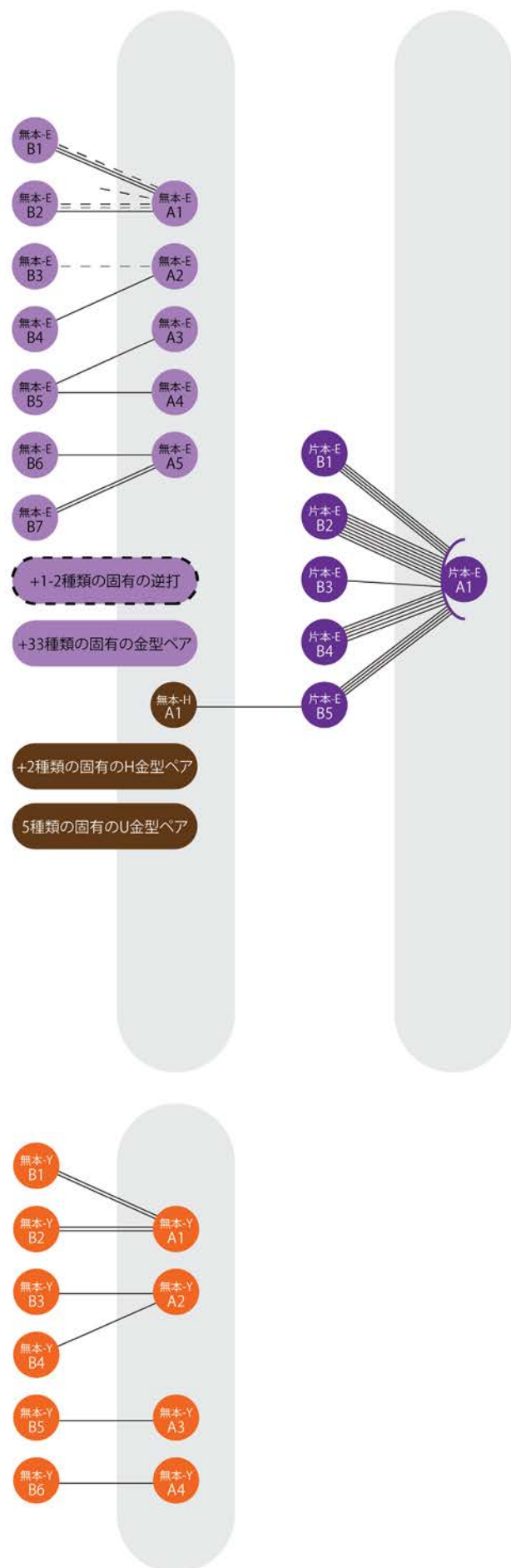


無本 Y 慶長一分判



付録2: 金型配置図(完全版)





付録3: 両本に関する別理論のコメント

両本慶長一分判の目的については、ほとんど、あるいはまったく議論が見られませんが、私はいくつか異なる説明に遭遇し、考察してきました。データはこれらが贈答用として使用されたことを示していると考えていますが、ここではいくつかの別の可能性について述べておきたいと思います。

最も一般的に見られる提案は、両本の個体は二度修復され、片本は一度だけ修復されたというものです。これはもっともらしい説明のように思えますが、その証拠となるものを私は既存のどの個体にも見たことがありません。具体的には：

- ・ 額一分判の上から打ち直された両本(たとえば図18、17ページ参照)の存在は、この説に反しているように見えます。この個体が再修復されたものであれば、額縁の輪郭は依然として見えるはずです。
- ・ 仮にこの説が正しいなら、両本は鑄造の後期に導入されたはずで、二度の修復が行われるまでにはある程度循環していたはずで、しかし、書風のスタイル、金型の組み合わせ、既存の文献、および額一分の上書きの比率に基づくと、両本はむしろ慶長一分判の全体の鑄造期の中頃に位置しています。
- ・ 片本および両本のすべての例において、打ち込み桐紋が修復時に再打刻されていなかったことが確認されています。つまり、目に見える桐紋は元の個体から残ったものです。この桐紋は、全本系統の類似した割合で確認されます(26ページ右下の図表参照)。もし両本が二度修復されていたなら、桐紋が見られることは稀であるか、あるいは二度目の修復で追加されているはずで、それが大多数の個体に見られるはずで、しかし、そのようなことはありません。

この説を裏付ける信頼できる歴史資料が見つからない限り、私はこの説は現存する貨幣自体によって否定されていると考えています。

A金型が一つしかないため、この金型はもともと片本として作られたもので、本の刻印が誤って左上隅に彫られた後に「修正」され、上部に追加された可能性もあります。技術的には可能ですが、同じような重大な彫刻ミスをもつ他の金型を私は確認しておらず、金座がそのような誤りを使用したとは考えにくいです。

初期の仮説として、両本 A 金型は最初の本金型であり、左側の縁に弱点が生じるまで、片本と両本すべての修復個体に使用された可能性を考えました。しかし、額一分の上書きの比率と熊本の研究の年代順を踏まえると、私は片本 K の個体が S の例すべてを凌駕し、片本 K が両本 S よりも前に位置するべきであり、この説は成立しないと判断しています。

他の提案に遭遇したことはなく、現存する貨幣によって唯一強く支持されているのは、これらが贈答用として打たれたという説だと考えています。ほかの意見や歴史資料があれば、ぜひ伺いたいと思います。

画像提供クレジット

図

1	PCGS MS62, スラブ番号不明
2	PCGS AU55, スラブ番号38332884
3	PCGS MS62, スラブ番号40318912
4	Gerald Groemer『Portraits of Edo and Early Modern Japan, The Shogun's Capital in Zuihitsu Writing』図2.1の図版に基づく。Adobe Stock 画像を使用。
5	PCGS AU58, スラブ番号50676381
6	PCGS MS62, スラブ番号不明
7	PCGS MS62, スラブ番号80792366
8	PCGS AU58, スラブ番号35398644
9	4つの点: 銀座コイン、2021年11月20日; 第33回 銀座コインオークション, lot 233 5つの点: 図5と同じ 完全な列: PCGS MS62、スタブ番号35398645
10	左: 図1と同じ 右: PCGS XF45, スラブ番号38332883
11	左: 銀座コイン, 2024年11月16日; 第36回 銀座コインオークション, lot 238 右: 図10右と同じ
12	銀座コイン, 2015年6月10日; 第73回 入札誌「銀座」, lot 62
13	左: 図10右と同じ 右: 銀座コイン, 2018年2月10日; 第86回 入札誌「銀座」, lot 58
14	熊本昌樹『慶長小判・慶長一分判金の研究』29ページの図版に基づく 左から右: 1. 図3と同じ
15	2. 銀座コインからの直接販売 3. PCGS AU55, スラブ番号51070294 4. 銀座コイン, 2023年11月18日; 第35回 銀座コインオークション, lot 236 左: 銀座コインからの直接販売
16	中央: 図15右と同じ 右: 泰星オークション, 2021年5月2日; 泰星オークション2021, lot 61
17	上: 銀座コイン, 2024年11月16日; 第36回 銀座コインオークション, lot 235 下: 図15、左から3番目と同じ
18	銀座コインからの直接販売
19	PCGS AU Details (Damage), スラブ番号28034638
20	左: PCGS AU58, スラブ番号47034745 右: 銀座コイン, 2021年11月20日; 第33回 銀座コインオークション, lot 238
21	左: エリック・リン (Eric Lin) 提供 右: PCGS XF45, スラブ番号52624245
22	PCGS AU Details (Damage), スラブ番号 57268980
23	左: 銀座コイン, 2022年2月11日; 第106回 入札誌「銀座」, lot 86 右: 銀座コインからの直接販売 左から右: 1. 図9と同じ、完全な列
24	2. PCGS MS66, スラブ番号39856035 3. PCGS MS62, スラブ番号39749049 4. 図20右と同じ 5. 銀座コイン, 2019年4月10日; 第92回 入札誌「銀座」, lot 64

	左: 銀座コインからの直接販売
25	中央: 銀座コイン, 2025年2月9日; 第121回 入札誌「銀座」, lot 114 Right: 銀座コイン, 2025年2月9日; 第121回 入札誌「銀座」, lot 116
26	左: 銀座コイン, 2018年11月3日; 第30回 銀座コインオークション, lot 88 右: 銀座コイン, 2017年11月18日; 第29回 銀座コインオークション, lot 266
27	上: 銀座コイン, 2025年2月9日; 第121回 入札誌「銀座」, lot 111 下: 銀座コイン, 2010年2月10日; 第46回 入札誌「銀座」, lot 84
28	左: 銀座コイン, 2019年2月10日; 第91回 入札誌「銀座」, lot 132 右: 銀座コイン, 2012年2月10日; 第56回 入札誌「銀座」, lot 71
29	左: 図27上と同じ 中央: PCGS MS62, スラブ番号不明 右: 銀座コイン, 2024年8月10日; 第119回 入札誌「銀座」, lot 170
30	銀座コイン, 2010年4月10日; 第47回 入札誌「銀座」, lot 50
31	銀座コインからの直接販売
32	日本コインオークション, 2023年12月9日; 第58回 日本コインオークション, lot 1156
33	熊本昌樹『慶長小判・慶長一分判金の研究』の図版に基づく
34	Adobe Stock 画像を使用
35	『金銀図録』第2巻、17ページ
36	銀座コイン, 2016年11月20日; 第28回 銀座コインオークション, lot 447
37	図19と同じ

付録1

前期	左: 図9 左と同じ 中央: PCGS MS63, スラブ番号不明 右: 銀座コイン, 2023年11月18日; 第35回 銀座コインオークション, lot 232
無本 K	左: 銀座コイン, 2021年11月20日; 第33回 銀座コインオークション, lot 239 中央: 銀座コイン, 2024年11月16日; 第36回 銀座コインオークション, lot 244 右: 銀座コイン, 2019年3月10日; 第1回 入札誌「銀座」, lot 120
片本 K	左: 図11左と同じ 中央: 銀座コイン, 2021年11月20日; 第33回 銀座コインオークション, lot 242 右: 銀座コインからの直接販売
無本 S	左: 銀座コイン, 2023年11月18日; 第35回 銀座コインオークション, lot 241 中央: 銀座コイン, 2023年8月11日; 第114回 入札誌「銀座」, lot 134 右: 銀座コイン, 2022年8月11日; 第109回 入札誌「銀座」, lot 119
片本 S	左: 図2と同じ 中央: 銀座コイン, 2023年11月18日; 第35回 銀座コインオークション, lot 238 右: 銀座コイン, 2016年11月20日; 第28回 銀座コインオークション, lot 408
両本 S	左: 図15、#4 と同じ 中央: 銀座コイン, 2023年10月9日; 第115回 入札誌「銀座」, lot 120 右: 銀座コイン, 2017年11月18日; 第29回 銀座コインオークション, lot 238
無本 E	左: 銀座コイン, 2024年2月10日; 第116回 入札誌「銀座」, lot 139 中央: 銀座コイン, 2021年2月10日; 第101回 入札誌「銀座」, lot 81 右: 銀座コイン, 2024年6月8日; 第118回 入札誌「銀座」, lot 97
片本 E	左: 銀座コイン, 2020年2月10日; 第96回 入札誌「銀座」, lot 104 中央: 銀座コインからの直接販売 右: 図20 右と同じ
無本 H	左: 図23 左と同じ 中央: 図23 右と同じ 右: 図22 と同じ

無本 U	左:図25 左と同じ 中央:図25 中央と同じ 右:図25 右と同じ
無本 Y	左:図27 上と同じ 中央:図29 中央と同じ 右:図29 右と同じ

表紙画像

1行目	左:図9 左と同じ 右:付録1 の無本 K 左と同じ
2行目	左:付録1 の片本 K 中央と同じ 右:付録1 の無本 S 右と同じ
3行目	左:付録1 の片本 S 中央と同じ 右:付録1 の両本 S 右と同じ
4行目	左:付録1 の無本 E 左と同じ 右:付録1 の片本 E 中央と同じ
5行目	左:図22 と同じ 右:図25 中央と同じ

金型研究のための全画像出典

文化遺産オンライン。「慶長両本一分金。」 <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/536150>

銀座コイン。「Past Auctions.」 https://shop.ginzacoins.co.jp/en/auction/past_events/

ヘリテージオークション Heritage Auctions. <https://www.ha.com/>

時遊屋。「慶長一分金 両本 鑑定書付。」 <https://jiyuya.co.jp/?pid=175804919>

ミントモンオークション。「過去のオークション。」 <https://mma-livesystem.com/past-bid-products>

ミスターコイン。「慶長一分判延宝 極美品 慶長6年・元禄8年 古金銀 古銀コイン 日本 金銀。」 <https://mr-coins.com/japan-coin/15338/>

日本コインオークション。「Past Auctions.」 NCA Live. <https://auctions.ncacnet.co.jp/auctions/past>

PCGS. <https://www.pcg.com/>

泰星オークション。「Past Auctions.」 <https://auctions.taiseicoins.com/auctions/past>

ワタナベコイン。「古金銀。」ワタナベコインショップ。 <https://watanabecoin.shop-pro.jp/?mode=cate&cbid=2011553&csid=0&sort=n>

ウィキペディア。「慶長小判」2024年9月参照。 <https://ja.wikipedia.org/wiki/慶長小判>

1点の画像は2024年に <https://urutokka.com>から取得したが、このサイトは現在は稼働していないようである。

参考文献

日本銀行静岡支店。『駿河小判座と日本銀行』。静岡、2015年。

<https://www3.boj.or.jp/shizuoka/01gaiyou/img/kobanshiryou.pdf>

ジェラルド・グレーマー Groemer, Gerald。『*Portraits of Edo and Early Modern Japan: The Shogun's Capital in Zuihitsu Writings, 1657-1855* [江戸と近世日本の肖像—随筆に見る将軍の都(1657-1855)]』。初版。パルグレイヴ・マクミラン Palgrave Macmillan, 2019 年。

<https://play.google.com/books/reader?id=H6KaDwAAQBAJ&pg=GBS.PR2.w.0.0.13>

デイヴィッド・ハーティル Hartill, David。『Early Japanese Coins [初期日本貨幣]』。Bedfordshire ベッドフォードシャー: Bright Pen ブライト・ペン社、2011年。

久光重平。『日本貨幣物語』。日本:毎日新聞社、1976年。

日本貨幣商協同組合。『日本貨幣カタログ2020』。東京、2020年。

日本貨幣商協同組合。『日本貨幣収集の手引き』。東京、2010年。

熊本昌樹。『慶長小判・慶長一分判の研究』。2023年。

近藤守重。『金銀図録／金銀録』。第1巻・第2巻、日本、1810年。

西脇成。『佐渡小判＋切廻の研究』。東京:東洋堂出版、2011年。

脇西康・澤瀧雄武。『日本史小判 - 貨幣』。東京:東洋堂出版、1999年。

塚本豊次。『日本貨幣史(増訂)』。日本:新文館、1972年。

ウィキペディア。「後藤庄三郎」。2025年5月30日参照。 <https://ja.wikipedia.org/wiki/後藤庄三郎>

Abstract

This document is partially a research paper, and partially an open letter to the numismatic community in hopes of collaboration and further insights. After significant die analysis and research, I believe I’ve uncovered a more comprehensive way to classify subtypes of Keicho ichibu. I enthusiastically welcome all feedback on the theories presented here. If they have been previously published, I have been unable to locate those sources.

I propose a division of Keicho ichibu into three time periods based on the time of minting: Early, Intermediate, and Late. The position of 分 and number of dots above the top kirimon are the primary characteristics used to determine the date on major types.

Within these types, I present which further varieties I’ve found to exist. I’ve renamed calligraphy styles historically attributed to different mints (previously Kyoto Mint, Suruga Mint, and Edo Mint, now styles K, S, and E, respectively) to reduce confusion, and have identified three additional very rare but distinct calligraphy styles (named H, U, and Y, explained on page 42). I’ve found the following combinations of characteristics:

Early	Intermediate	Late	Uncertain
No Hon K	No Hon K	No Hon E	No Hon Y
	Single Hon K	Single Hon E	
	No Hon S	No Hon H	
Major types in black.	Single Hon S	No Hon U	
Minor types in gray.	Double Hon S		

These are the results of studying 306 pieces, comprised of all auction records I was able to find online through the end of 2024, and in the case of rarer types, pieces found in institutional collections, imaged on reference websites, etc. Pieces in styles K, S, and E are considered major types and make up the vast majority of examples, and styles H, U, and Y are referred to as minor types throughout this paper.

I also propose that Double Hon Keicho ichibu were struck as presentation pieces based on, among other things, a higher proportion of fully struck borders than is found on other types (indicating more care in their preparation), fewer chopmarks, and shared dies with coin-aligned examples of another type.

A Note on Obverse and Reverse

The side typically called the obverse is different in the US and Japan; US books and grading companies tend to designate the side bearing Mitsutsugu’s name the obverse, while Japanese sources almost universally consider this the reverse. For this paper, I will be referring to the side with Mitsutsugu’s name as side A, and the side with kirimon as side B.



Figure 1

Current Classification System

Keicho ichibu were minted from 1601-1695 and have typically been divided into Early, standard, Single Hon, and Double Hon. In addition, there are three different calligraphy styles that have been historically attributed to three different mints (Kyoto, Suruga, and Edo), but there’s no documentation to support this connection. As a result, the “mint” is rarely mentioned on pieces for sale, and it has little impact on value.

Early Keicho ichibu have historically been identified by the number of dots in the top corners of side B and the position of 一. They are widely agreed to be the first type minted, though no specific date range is known.

Single Hon Keicho ichibu have an additional character on the top right corner of side A. This character is a stylized version of 本 (read “hon,” pronounced like “hone”) in grass script, taken from 本直し, meaning “repaired.”¹ This indicates a piece that was returned to the mint so damaged that it needed to be fully



Figure 2
Single Hon S Keicho ichibu, side A. 本 is circled.

1 Japanese History: Small Encyclopedia of Money (日本史小百科 - 貨幣) by Takeo Takizawa and Yasushi Nishiwaki, page 242-243



Figure 3
Double Hon S Keicho
ichibu, side A. 本 are
circled.

restruck, at which point the new character was added.

Double Hon Keicho ichibu have the same character added to both top corners of side A. No sources that I've found offer any concrete explanation for why these are marked differently, and they're usually discussed in conjunction with Single Hon.

Typical pieces are struck in medal alignment, but like most gold ichibu, they can occasionally be found in coin alignment. Coin-aligned pieces are highly prized and very valuable. My current understanding

is that coin-aligned pieces were generally struck more carefully and used as presentation pieces (given to high ranking officials).

Mintage and Locations

The full mintage of Keicho ichibu is unknown, but between ichibu and koban, a total of 14,727,055 ryo¹ were minted. Three mint locations are widely known, but Keicho ichibu were minted in four locations.

Edo was the primary mint producing Keicho ichibu. Gaku ichibu, the predecessor to Keicho ichibu, were minted in Edo in 1599. This location continued minting Keicho ichibu for the entire run through 1695.

Kyoto is believed to have begun minting Keicho ichibu very shortly after Edo, though possibly as late as 1608. In *Research on Keicho Koban and Keicho Ichibuban*, Masaki Kumamoto suggests that it was no longer minting new pieces by 1657, though other sources claim that it continued operations through the end of the Keicho mintage.

Suruga only minted coins from 1606 or 1607 until either 1612 or 1616;² both dates are disputed and warrant further research. Regardless of the exact date, it was absorbed into the Edo mint when it shut down.

Additionally, Sado began producing Keicho ichibu in 1621 and continued through 1695. The Sado mintage was very small – just 280,000³ pieces.

Calligraphy Styles

As mentioned above, there are three different major calligraphy styles that have historically been attributed to three different mints. This classification has fallen out of favor and isn't used widely today, but die analysis supports that separating pieces by calligraphy style is valid, though I believe it's more relevant for determining emission sequence than minting location. While die overlap was found between multiple types of the same calligraphy style, no shared B dies were found connecting multiple major calligraphy styles.

Because the connections with certain mints are no longer in favor, I will be renaming each to make further discussion clearer. In the following table, the items in bold are the most consistent and useful in distinguishing between styles.

While the majority of pieces fit into one of these three types, three additional small but distinct minor calligraphy styles exist. Side B is also distinct on these types and is discussed more thoroughly under Ho Hon H/U (page 54) and No Hon Y (page 56).

Grass Script

Grass script (also known as sousho, 草書) is the Japanese equivalent of cursive. While characters are typically rounded, the grass script version of 本 seems to have been reimagined with straight lines for Single and Double Hon Keicho ichibu.



¹ One ryo is equal to four ichibu.

² 1612 is stated in *Suruga Kobanza and the Bank of Japan* (駿河小判座と日本銀行) and 1616 is given in *Japanese History: Small Encyclopedia of Money* (日本史小百科 - 貨幣)

³ *Japanese History: Small Encyclopedia of Money* (日本史小百科 - 貨幣) by Takeo Takizawa and Yasushi Nishiwaki, page 242

Major Calligraphy Styles



	K <i>(previously attributed to Kyoto)</i>	S <i>(previously attributed to Suruga)</i>	E <i>(previously attributed to Edo)</i>
1	No notable differences between types		
2	Either rounded or curved to the right	Either rounded or curved to the left on No Hon pieces (can curve right on Single or Double Hon pieces)	Rounded, curved to the right, or sideways; significantly shorter than 3
3	Often swoops directly into 4 (not shown)	Almost always swoops directly into 4	Separate from 4 ; long
4	Usually slightly slanted; often swoops directly into 5 , as seen here	Usually slightly slanted; usually parallel to 5	Usually not slanted; usually separate from 5 ; usually thick on the left end and narrow on the right end
5	Not wide; space before borders	Wide; close to borders	Width varies
6	Usually between the left end of 5 and the left end of 8 , sometimes slightly below 5 ; usually rounded	Below 5 (left side even with the left end of 5 or farther right); usually oblong	Varies
7	Has a hook on the left; may or may not touch kao	Has a hook on the left; may or may not touch kao	Has no hook on the left ; touches kao
8	Connected to 6	Connected to 6	Often separate from 6
9	Sometimes separate from 6 , sometimes connected to 6 , occasionally like Shotoku ichibu ¹	Sometimes separate from 6 , sometimes connected to 6 , sometimes like Shotoku ichibu	Separate from 6
10	Significant variation across all types; these should not be used as diagnostics		
11			
12			

The features depicted in black (top portion of the kao, dot border, etc.) are included as reference points and should not be used for attribution purposes. Please note that any features not explicitly discussed in the table likely vary between pieces of the same style.

¹ See <https://rectanglecoins.com/shotoku-ichibu>, characteristic three. Stroke 10 branches directly off of 6 with no connection to 9. This is historically the only diagnostic used to identify Shotoku ichibu but can also be found on Keicho ichibu.

Minor Calligraphy Styles



H

(Named for the resemblance of the bottom of strokes 5 and 6 to へ, pronounced “he,” shortened to H; three found.)



U

(Named for the resemblance of strokes 4 and 5 to う, pronounced “U”; five found.)



Y

(Named for the resemblance of strokes 1-3 to 山, pronounced “Yama,” shortened to Y; eight found.)

1	No notable differences between types		
2	No notable differences	Either rounded or curved to the left	Strokes 1 2 and 3 are all vertical and parallel to each other; 3 swoops directly into 4
3	Separate from 4	Swoops directly into 4	
4	Straight; short compared to 5; sharp angle at connection to 5	Short compared to 5; swoops directly into 5	Parallel and very close together; close to fully horizontal
5	6 is closer to the borders than 5	6 is closer to the borders than 5	
6			No notable differences
7	Below 5 and close to the left end of 5	Usually below 5 (left side even with the left end of 5 or farther right); rounded	Below 5; oblong and positioned as though it's a continuation of the left end of 8
8	Little to no hook on left; may or may not touch kao	Has a hook on the left; may or may not touch kao; right end fairly short	Has a hook on the left; touches kao
9	Connected to 6	Connected to 6	Connected to 6
10	Either separate from 6 (shown) or like Shotoku ichibu	Either separate from 6 (shown) or like Shotoku ichibu	Either separate from 6 or barely touching
11	Significant variation across all types; these should not be used as diagnostics		
12			

Due to the very small number of observed examples, these minor types are omitted from the general discussion and are covered separately beginning on page 54.

A New Dating System: Early, Intermediate, and Late

Kumamoto posits that Keicho ichibu with 分 fully embedded in the dot border were made after the Great Fire of Meireki in 1657 (hereafter referred to as “Late” Keicho ichibu). I was able to contact Kumamoto and confirm that this claim was based on his own observations of coins and didn’t come from a historical reference. My analysis supports this theory as it applies to major types.

It’s widely accepted that Early Keicho ichibu were the first made, and those pieces consistently have 分 positioned such that it either barely touches or is entirely separate from the dot border. Only the first stroke of 分 is anywhere near the border.

On all pieces that aren’t classified as Early based on other diagnostics, 分 is significantly closer to the border. Stroke 1 always crosses the border, stroke 4 usually touches or crosses, and stroke 3 sometimes touches. On the pieces Kumamoto identified as Late, strokes 1, 3, and 4 all fully cross the dot border.



These can be separated to create a straight line of movement; 分 began near the center of the coin on Early pieces, was moved to touch the border on Intermediate pieces, and was moved further to be fully embedded in the border on Late pieces.

	Early	Intermediate	Late
1	Separate or barely touching dot border	Crosses dot border	Crosses dot border
2	Usually separate from 1	Varies	Usually connected to 1 and 4
3	Does not touch dot border	May touch, but does not cross dot border	Crosses dot border
4	Does not touch dot border	May touch or cross dot border	Crosses dot border
Top Dots	Usually connected for a single group of dots; range from 7 to 10	3 to 5	1 to 3
Bottom Dots		2 to 4	1 to 4

Pieces with only stroke 1 touching/crossing the dot border can sometimes be a bit ambiguous and other criteria should be checked to determine the minting period, as described under “Early No Hon K Keicho Ichibu.”

Additionally, Early pieces are typically very carefully made. The dots in the border are small, the size and spacing are consistent, and the other design elements are very balanced and similar across different dies. Late pieces with 分 embedded in the border are much more sloppily made. The dots in the border are large and inconsistently spaced, and other design elements have much more variation. Intermediate pieces fall right in the middle. The dots are slightly larger than on Early pieces but smaller than Late, and they’re less consistent than Early pieces but more consistent than Late.

Altogether, there's a clear progression between types as the mint made minor changes that may not have been announced at the time.¹

The Great Fire of Meireki in 1657 burnt down approximately 60% of Edo,² including kinza (the gold mint). While I haven't been able to locate any historical documentation that this is when the 分 position changed, Kumamoto identified this as the event that separates Intermediate and Late pieces. When the mint burned down, all of the dies would have presumably been lost. I'm not aware of any other individual events that would have destroyed all the dies.

This leaves the question: what prompted the switch from Early to Intermediate? Based on calligraphy attributions given by Kumamoto (see page 58, figure 33), this change occurred after 1607 and before the closing of the Suruga Mint (1612 or 1616). I have no additional evidence to confirm or dispute this date.

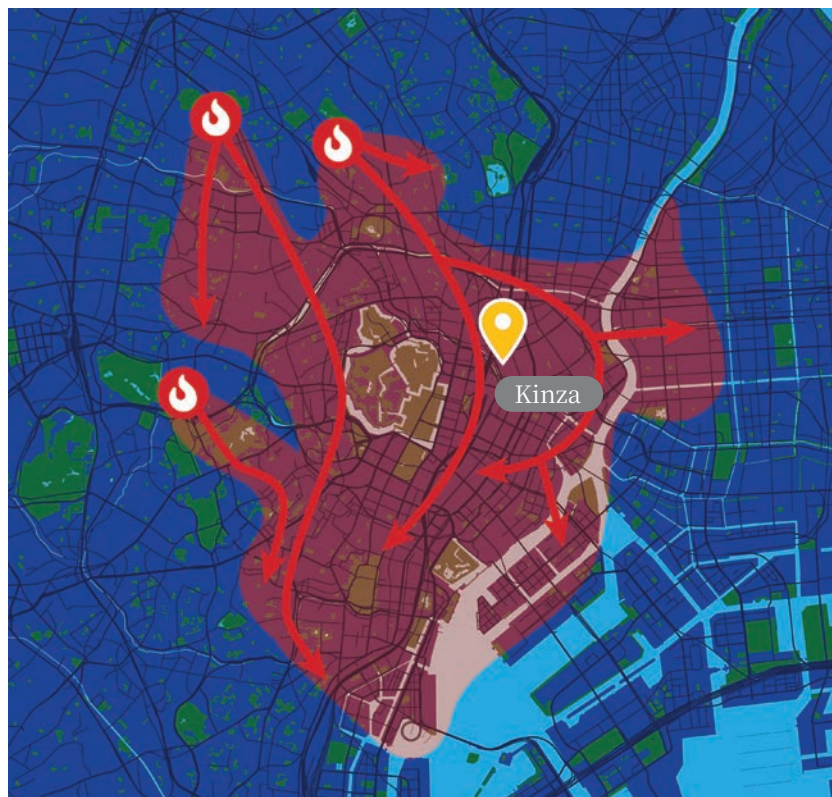


Figure 4
Spread of the Great Fire of Meireki (1657) in Edo.

1 Minor types break these rules.

2 https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_library/english/machi/page2-1.html

An Alternate Theory for Dating

If we move away from the larger political landscape and focus on events within kinza, is it possible that styles changed when a new member of the Goto family became head of the mint? While information is scarce outside the original *History of Shozaburo Goto, the Minister of Finance* (御金改役後藤庄三郎由緒書), which I have been unable to translate,¹ my best understanding is that the succession of the head of kinza was as follows:

1595-1625	1625-1641	1641-1677	1677-1705
Goto Mitsutsugu 後藤光次	Goto Hiroyo 後藤広世	Goto Yoshishige 後藤良重	Goto Mitsuyo/Mitsushige 後藤光世/後藤光重 (name uncertain)

Even if these dates are slightly off, we have four different people during the minting period of Keicho ichibu, which lines up with the four different major types identified in this research. I have not come across any documentation of who was producing dies within the mint, but even if it was a separate craftsman and not the head of the mint, it seems to warrant consideration if the design standards may have been changed to reflect a change in leadership. I suspect any confirmation or refutation of this theory would require analysis of original documents, which is outside my skillset. I hope Japanese researchers with better access to documents and a thorough knowledge of the language will consider looking into this more deeply.

Since no previous research has been conducted to support this theory, the rest of this paper will focus on the pre- and post-Great Fire of Meireki classification put forward by Kumamoto, which I believe to be the more likely explanation.

1 While the exact publication date is unknown, this was written prior to the standardization of Japanese in the early 1900s. The only copy I've been able to find is handwritten. If anyone has modernized this text or is able to work on a translation to English, I'd love to hear from you. The original is available at https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i14/i14_a4677/index.html.

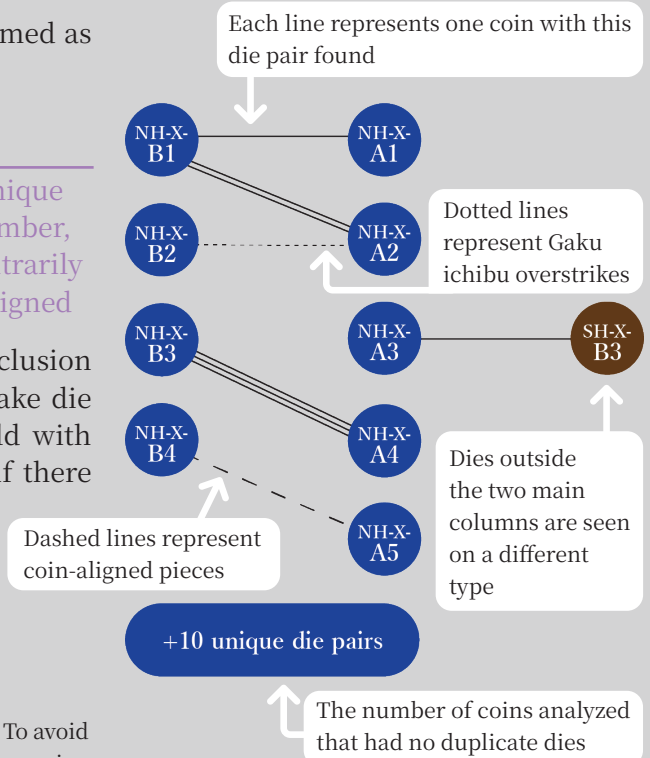
Die Map Key

Each major type includes a die map. Individual dies are named as follows:

NH-K-A1			
Number of Hon	For Early pieces, O ¹	Side of	Unique
NH - No Hon	For Intermediate and	coin (A	number,
SH - Single Hon	Late pieces, calligraphy	or B)	arbitrarily
DH - Double Hon	style (K, S, E, H, U, or Y)		assigned

Not all examples found of each type were analyzed for inclusion in the die maps; many have low resolution photos that make die matching difficult, if not impossible, and others were sold with only photos of one side. These pieces have been omitted if there were 25 or more high resolution images available. Any particularly significant pieces (ex. coin-aligned pieces, Gaku overstrikes, or pieces sharing dies with another type) have been included whenever possible regardless of image quality.

1 Early and Old are used interchangeably within Japan for this type. To avoid duplicating a letter, I've opted to use O on the dies. Early fits better with the naming convention of Intermediate and Late, hence the discrepancy. As we'll soon see, the die names won't be overly important for this group as there's no overlap with Intermediate or Late pieces.



Early No Hon K Keicho Ichibu

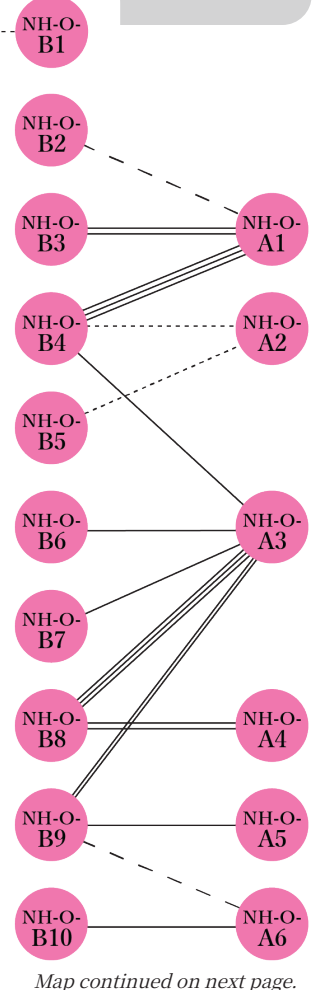
Early Keicho ichibu undoubtedly form the most complex die map of all types we'll be examining. This is the only instance where a No Hon A die (NH-O-A3) is paired with more than three B dies that I've been able to locate. The comparatively large number of duplicated dies seems to indicate that the original mintage of Early Keicho ichibu is smaller than any other No Hon type, which is in line with pricing trends. Based on the small proportion of fully unique pieces, I suspect this map represents a majority of dies.

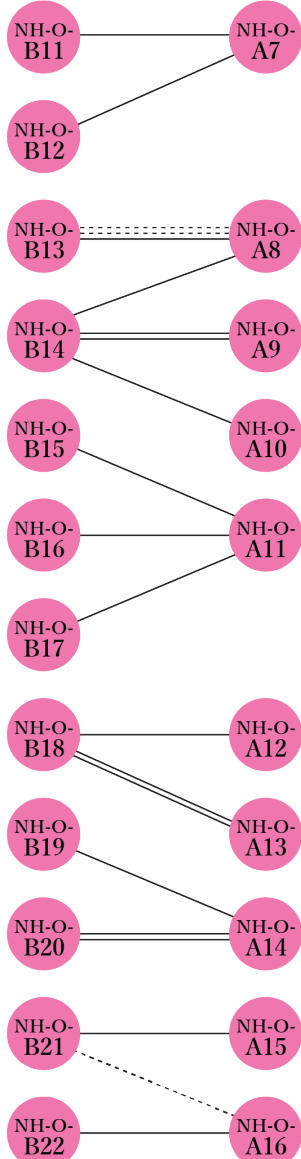
Additionally, note that ten different examples were found of an Early Keicho ichibu visibly overstruck on top of a Gaku ichibu. I've only found four Gaku overstrikes on all other Keicho ichibu types combined, making them significantly more common in this



Figure 5
Gaku ichibu, the first rectangular gold coin, minted in 1599 with a very distinctive side B. This example uses Gaku-A8.

Figure 6
Early Keicho ichibu overstruck on top of Gaku ichibu. Parts of the three layer border on side B of Gaku ichibu are commonly still visible on overstrikes, as shown on the right.





+4 unique Gaku overstrikes

+8 unique die pairs



Figure 7
Early Keicho ichibu pairing Gaku-A8 with NH-O-B1.

group. While the existence of these pieces has previously been referenced as proof that Gaku ichibu predate Keicho ichibu, they also seem to support that pieces historically identified as Early Keicho ichibu were indeed made first. More Gaku ichibu would have been in circulation earlier in the minting period of Keicho ichibu, resulting in more returning to kinza to be restruck.

The most noteworthy individual piece from this die map is the piece pairing NH-O-B1 with Gaku-A8. Gaku-A8 references an A die seen on Gaku ichibu,¹ further solidifying the link between the two. Side B on this piece was clearly struck as a Gaku ichibu first; the three-layer border is easily visible. The clarity of side A suggests that the Gaku A die was used for the restrike, as opposed to only one side being restruck, but any further analysis would require clearer photos or examination of the piece in-hand. In general, the style of side A on Gaku ichibu is most similar to style K on Keicho ichibu.

While on the subject of Gaku ichibu, it's been widely published that, while previously attributed to Hideyoshi in Kyoto, we now know that they were struck in Edo under Tokugawa Ieyasu as a regional coin. To my knowledge, they primarily circulated within Edo and didn't spread throughout the country, meaning most, if not all, overstrikes were likely done in Edo, indicating that Early K pieces were struck in Edo. Given that Kyoto began minting Keicho ichibu shortly after Edo, this type was likely produced in both locations.

While side A is always style K on Early Keicho ichibu, the position of stroke 7 in Mitsutsugu is more consistent across Early pieces than Intermediate K examples. Stroke 7 is almost always at the left end of stroke 5, forming a right angle. While not consistent enough to use as a diagnostic, this is rarely seen on Intermediate pieces and is worth noting.

As described on page 43, 分 is either completely separate or just barely touching the dot border. This places it much closer to the center of the coin than on later issues. In addition, stroke 2 is usually shorter than its later counterparts, and is most likely to be separate from stroke 1.



Figure 8
Right angle between strokes 5 and 7. This is very common on Early Keicho ichibu but should not be used as a diagnostic; there are exceptions.

1 While outside the scope of this paper, a die study of 35 Gaku ichibu revealed eight A dies, eight B dies, and no fully unique pieces. Gaku-A8 was the most common A die, seen on eleven different examples. The details of and any updates to this die study can be found at <https://rectanglecoins.com/gaku-ichibu-die-study>.

4 Dots	5 Dots	Full Row
12%	70%	18%



Figure 9

Different top border configurations seen on Early Keicho ichibu. The example on the left has five dots in the top left corner and four on the top right. This die (NH-O-B20) was counted among 4 dot examples.



Figure 10

Left/Top: Typical — placement on Early Keicho ichibu. Right/Bottom: Intermediate Single Hon K side B where — is barely touching the border and could be misattributed as Early if other diagnostics are not considered.

As a result, I propose expanding the attribution criteria for Early Keicho ichibu to include the position of 分, in addition to the number of dots and position of —. Because these coins are so often off-center or chopmarked, additional criteria will make previously ambiguous pieces easier to attribute.

Intermediate No Hon K Keicho Ichibu

Of 32 Intermediate No Hon K Keicho ichibu evaluated, 17 were struck from fully unique dies. This suggests a much higher mintage, and therefore a significantly larger number of pieces needed to create a comprehensive die map.

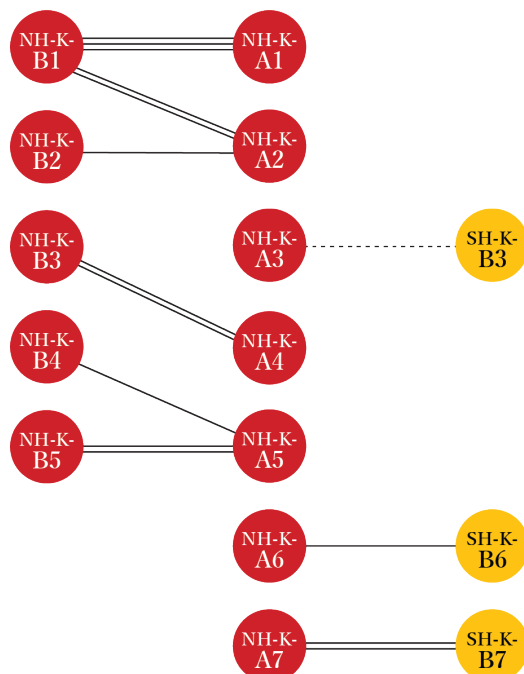
Of particular interest among this group are the pieces that have a B die seen on Single Hon K pieces (in yellow). This will be discussed more thoroughly in the next section, but this is the beginning of a larger trend.

Additionally, note the lack of coin-aligned pieces. We saw two coin-aligned pieces among Early Keicho ichibu, and there are none here. Finally, we have one of the four Gaku overstrikes that's not Early, again in style K.

One of the criteria historically used to attribute Early Keicho ichibu has been the number of dots in the top corners of side B. All later pieces (except some minor types) should have three dots in each corner, but Early examples have four or more on each side. Of the pieces I examined where at least one top corner was visible, 12% had four dots in each corner, 70% had five dots in each corner, and 18% had a full row of dots connecting both corners. Of these, all pieces with a full row across share dies NH-O-B4 or NH-O-B8. Note that these dies are both seen with NH-O-A3, suggesting they may have been used relatively close together.

I've seen it suggested that pieces with a full row of dots are believed to be among the earliest struck. While hard to make out with the current photos, I believe the B die paired with Gaku-A8 has four dots in each top corner. We can assume this was one of the first Keicho ichibu struck, before the last Gaku die had been retired, suggesting that the number of dots may not be a direct indicator of which pieces are earliest.

The second criterion traditionally used for attribution is the position of — on side B; it's typically separate from the dot border on Early pieces, and typically embedded in the border on later examples. However, relying on this criterion alone can be difficult. We'll see multiple B dies later on Intermediate pieces where — appears to be separate from the border, even though all other elements of the die indicate that it's Intermediate. Pieces struck with these dies off-center have occasionally been misattributed as Early.



+17 unique die pairs

Intermediate Single Hon K Keicho Ichibu

While not previously identified as particularly rare, I've found the fewest examples of this type among major types: only eleven examples across all sources, sharing just two A dies. The Hon on SH-K-A2 is somewhat weak and can, on rare occasions, be difficult to see.



Figure 11

Both A dies. SH-K-A1 on left; SH-K-A2 on right.

Figure 12

Example of SH-K-A2 with extremely faint Hon.

On two of these B dies, SH-K-B6 and SH-K-B7, 一 is barely touching the dot border. Both of these could easily be confused for Early Keicho ichibu if no other diagnostics are considered, or if the upper dot border is cut off or unclear. Fully struck pieces from both dies make it clear that there are only three dots in each corner and 分 is partially embedded in the dot border.



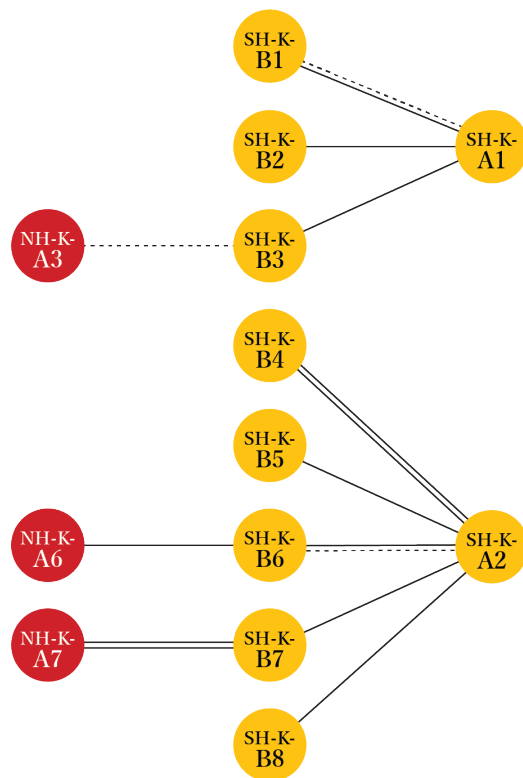
Figure 13

Both B dies with 一 barely touching the dot border.
(Left/Top: SH-K-B6; Right/Bottom: SH-K-B7)

There are two clear Gaku overstrikes in this group, one from each A die, which places both dies in Edo and suggests that all examples are most likely to have been struck in Edo. While it's certainly possible that dies were traded between mints or that Gaku ichibu made their way to another mint, both of these explanations are less likely.

The relative frequency of Gaku overstrikes in this group suggests they were also fairly early in the 95 year mintage of Keicho ichibu. It's widely accepted that Hon pieces were made to indicate Keicho ichibu that had received enough damage in circulation to require a full restrike, so Keicho ichibu would have been in production for quite a few years before the first Hon dies were made. This places them distinctly later than Early Keicho ichibu, but the proportion of Gaku overstrikes positions these as the earliest group of Hon pieces struck in Edo. The shared calligraphy style between Early and Intermediate K pieces reinforces this order.

quite a few years before the first Hon dies were made. This places them distinctly later than Early Keicho ichibu, but the proportion of Gaku overstrikes positions these as the earliest group of Hon pieces struck in Edo. The shared calligraphy style between Early and Intermediate K pieces reinforces this order.



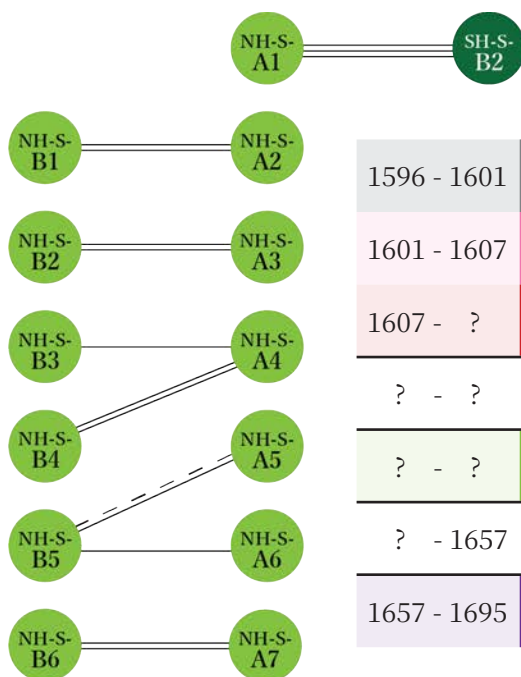
For all Single and Double Hon die maps, No Hon pieces sharing B dies have been included for reference, but only pieces using an A die starting with SH or DH have any Hon on the coin.

Intermediate No Hon S Keicho Ichibu

Die map on next page.

While we see significantly more duplicated dies among Intermediate No Hon S Keicho ichibu than we did among the No Hon K group, many of these dies are included due to their use with Double Hon B dies, which will be discussed in the Double Hon section. In total, of 37 pieces evaluated, 15 had fully unique dies.

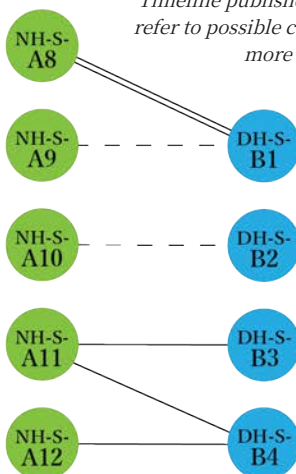
One of the most noteworthy takeaways here is that any shared dies between types are all from other style S types. There's significant overlap between No and Single Hon K pieces, and here we again see overlap between No, Single, and Double Hon S pieces. The complete lack of overlap in dies between styles indicates that there is a reason to separate K and S, whether it be due to location or time period.



1596 - 1601	Gaku ichibu
1601 - 1607	Early Keicho ichibu
1607 - ?	Intermediate Keicho ichibu (likely K)
? - ?	Minting suspended
? - ?	Intermediate Keicho ichibu (likely S)
? - 1657	Minting suspended
1657 - 1695	Late Keicho ichibu

Figure 14
Timeline published by Kumamoto based on koban kao styles, adjusted to refer to possible correlating ichibu calligraphy styles. Figure 31 provides a more complete summary of koban styles found in Kumamoto's work.

In *Research on Keicho Koban and Keicho Ichibuban*, Kumamoto proposes a total of four different minting periods for Keicho ichibu: 1601-1607 (Early Keicho ichibu) and 1657-1695 (Late Keicho ichibu), with two separate periods between them, the first starting in 1607 and the second ending sometime before 1657. No further information is given about possible dates or historical references, but if we stick with this timeline, S Keicho ichibu seem to have been minted during the second undated Intermediate period. The only koban styles illustrated in *Research on Keicho Koban and Keicho Ichibuban* that resemble style S are attributed to Edo during this period. There's one Double Hon S Gaku overstrike we'll see later that supports Edo as the minting location.



It should be noted that Kumamoto also illustrates four styles of koban attributed to Kyoto during this period that most resemble ichibu style K. Without more information, I'm unable to say whether style K ichibu were produced during this period in Kyoto as well. Any illustrations from the different mints during this time or more specific mintage numbers may help clarify this point, but I've been unable to locate that information.

Finally, note that we have three coin-aligned pieces in this group, two of which are paired with Double Hon B dies. These are the first coin-aligned pieces we've seen since the single Early Keicho ichibu.

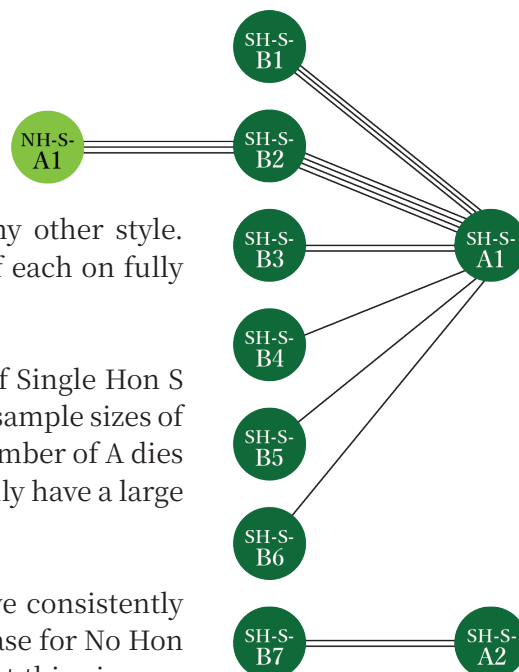
+15 unique die pairs

Intermediate Single Hon S Keicho Ichibu

Among the Single Hon varieties, S has significantly more dies than any other style. Between 17 pieces, I found five A dies and ten B dies (including three of each on fully unique pieces not named in the map).

The number of unique dies seems to suggest that the original mintage of Single Hon S Keicho ichibu may have been higher than Single Hon K pieces, but larger sample sizes of both would be needed to confirm this. It's also possible that the larger number of A dies reflects that they were struck in more locations, which wouldn't necessarily have a large impact on mintage numbers if not all dies were used until failure.

We can see now that a trend is developing among Single Hon pieces: we consistently see a small number of A dies paired with many B dies, which is not the case for No Hon pieces. Combined with the overlap in B dies between types, I suggest that this gives us some insight into how the Single Hon dies were used.



+3 unique die pairs

We know that Single Hon pieces indicate a coin that was damaged, returned to kinza, and fully restruck. It seems that the A dies were made for this sole purpose; I've found no evidence that a previously used No Hon die had the Hon added to create Single Hon pieces. However, B dies are shared between Single and No Hon pieces quite often, suggesting that the B dies were not specially made. I believe the Single Hon A dies were pulled out once a large number of pieces needing repair had accumulated, they were struck using whatever B die was at hand, and then the A die was returned to storage until it was needed again. This would explain the shared dies between types, the limited number of A dies seen paired with much larger numbers of B dies, and the complete lack of different Single Hon A dies paired with the same B die.

Finally, note the lack of any coin-aligned pieces. I haven't been able to locate any coin-aligned Single Hon examples across all styles.

Intermediate Double Hon S Keicho Ichibu

This die map represents every single Double Hon Keicho ichibu I've been able to locate. More so than for any other type, I've scoured institutional collections, pieces imaged in reference books, and smaller dealers' websites, searching for additional dies. Every single example I've found shares the same A die with only four B dies.

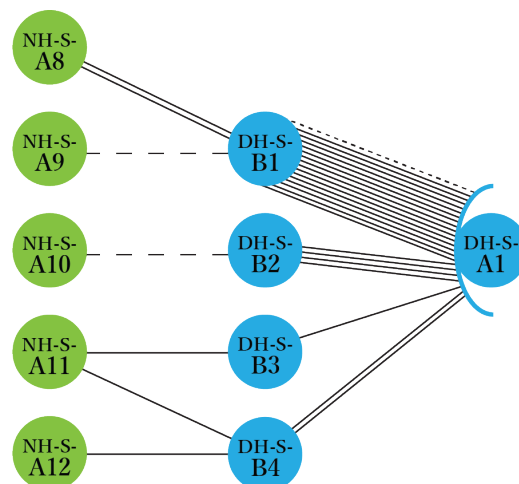


Figure 15 (left)
All four B dies, in order from left to right, 1-4.

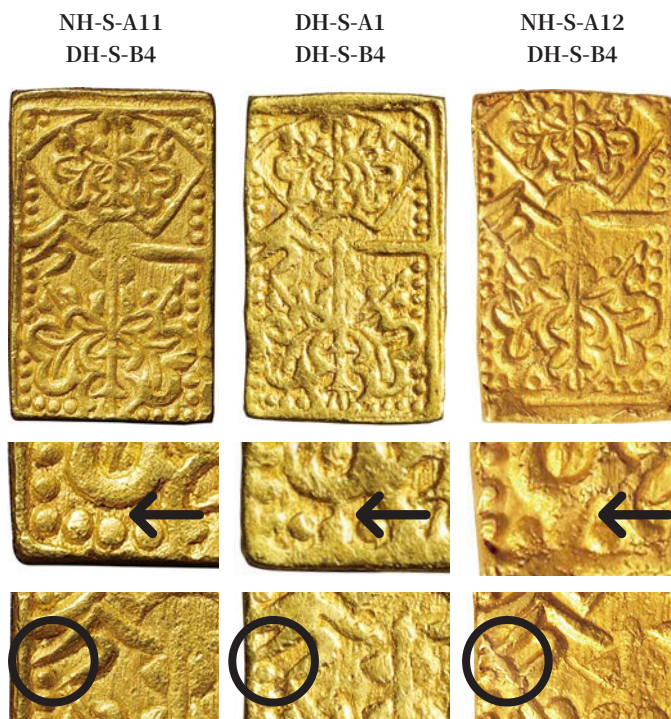
Die DH-S-B4 shows multiple progressing die breaks that enable us to determine the order in which the four pieces it's found on were struck. The piece with NH-S-A11 was first, showing only a small die crack in the bottom border, going through the third dot from the left.

The two Double Hon pieces were next, showing a larger die crack through this dot. Finally, the No Hon piece with die NH-S-A12 was struck; the bottom die crack has become larger, and there's now a large crack through the bottom of 分 as well. This supports the earlier theory that B dies were used on repaired pieces as needed and then returned to use on No Hon pieces.

It's also worth noting that some Double Hon examples show a clear die crack between strokes 6 and 9 of 光次. This may be a useful diagnostic to determine the order in which surviving pieces were struck, but this area is rarely visible in the images I've been able to examine. Many pieces have the incuse Kirimon stamp or chopmarks that obscure this portion of the coin, while others were sold with images that aren't high enough resolution to determine the state of the

Figure 16 (below)

Evolution of die cracks in DH-S-B4. Both examples using this die paired with DH-S-A1 feature the same die state and only one is pictured here.



die crack. In one case, the original auction photos of a piece showed no crack, while the PCGS TrueView shows the crack quite clearly (see figure 17). Without more consistent, high-quality images or the opportunity to examine more pieces in-hand, this can't be used to further extrapolate the order of minting.



Figure 18
Double Hon overstruck on Gaku ichibu.

I've found one Double Hon Gaku overstrike, using DH-S-B1, pictured to the left. The triple border seen on Gaku ichibu is clearly visible at the top of side B. As discussed previously, this points to Edo as the most likely place of Double Hon striking.

The left Hon on this example is almost fully obscured. It's also one of the most heavily circulated examples I've seen, and I suspect the obscured Hon is a result of circulation wear and not a die break.

Little has been published about the difference between Single and Double Hon and why they have a different number of Hon. After significant analysis, I propose that Double Hon Keicho ichibu were made as presentation pieces.

For every piece catalogued, I recorded the number of borders fully struck on the coin. A "fully struck" border in this case means that the majority of every dot on a side was fully on the planchet, giving each coin a maximum of eight complete borders possible. This is somewhat subjective, but every effort was made to be as consistent as possible. The average number of fully struck borders is highest for Double Hon.

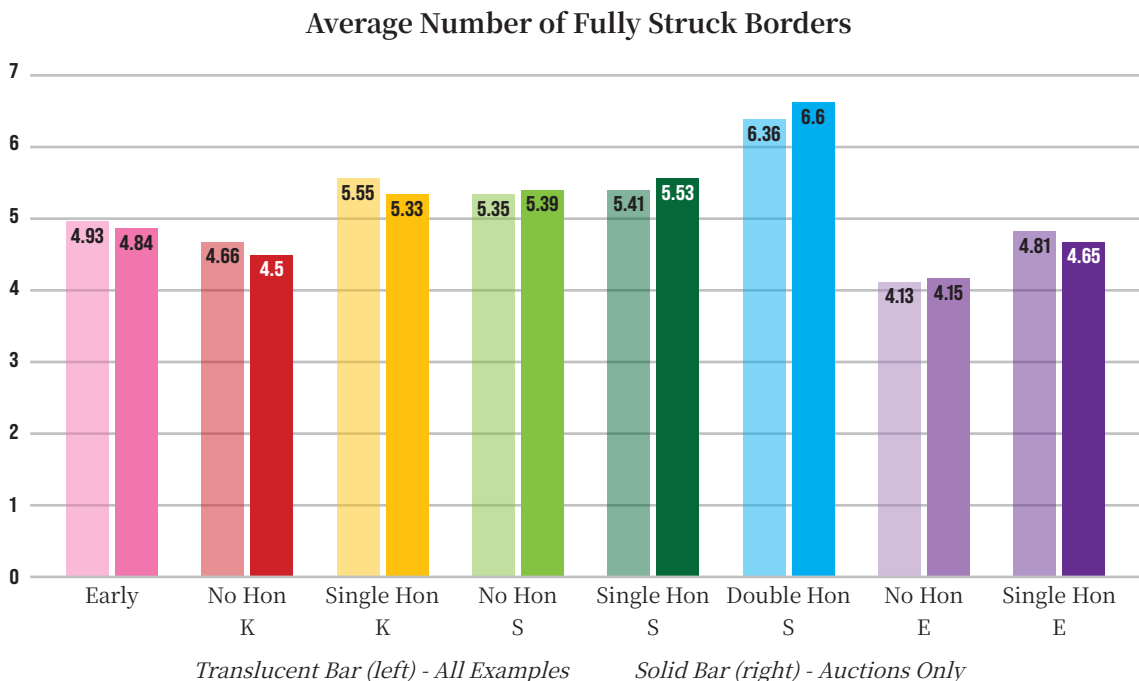
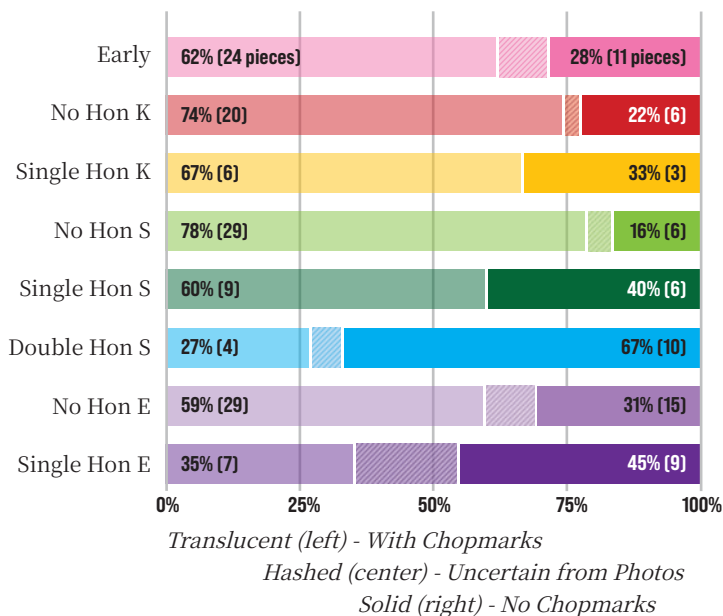


Figure 17
Two photos of the same coin (DH-S-A1/DH-S-B3); original auction photo on top and PCGS TrueView on bottom.

A one-way analysis of variance (ANOVA) was conducted on the auction only data.¹ This is a test used to determine if there's a statistically significant difference between the averages of three or more groups. A result of less than 0.05 indicates a statistically significant difference; this data returned 0.00000028. This supports that the difference in averages is not likely to be an accident caused by a small sample size.

¹ As discussed further under "Comparative Rarity Based on Auctioned Examples" (page 59), "auction only data" refers to auctions from three auction houses between 2008 and 2024. This limitation of the data is intended to eliminate potential skew caused by a more thorough search for rare types.

Chopmarks on Auctioned Examples



Another aspect catalogued for each coin was whether it had any visible chopmarks or merchant stamps (referred to jointly as “chopmarks” going forward). Some pieces were unclear due to low resolution photos or only having one side of the coin imaged, but six of the eight major types had chopmarks on more than 55% of auctioned examples. One of the outliers was Single Hon E, which had the most uncertain pieces. Depending on the status of those examples, somewhere between 35% and 55% of examples had chopmarks.

In contrast, only 27% of Double Hon examples had chopmarks. This suggests that they didn’t circulate as widely as any other type of Keicho ichibu, which is what we would expect to see of presentation pieces. (If they were not presentation pieces, this disparity may instead be indicative of poor public reception.)

Looking at the Double Hon die map, you’ll notice that DH-S-B1 and DH-S-B2 were both used on No Hon coin-aligned pieces. There are very few coin-aligned Keicho ichibu that I’ve been able to study, making it difficult to draw any conclusions about how much die duplication is seen within coin-aligned pieces, but it seems statistically unlikely that two of the three total Intermediate coin-aligned pieces use Double Hon B dies unless there’s a tie between the two features.

Given that no coin-aligned Single Hon examples have been found, perhaps kinza decided to strike presentation pieces differently at this time, adding an extra character instead of inverting the dies.

It should be noted that these do still seem to be repaired pieces. Many examples – about 30% – are visibly overstruck on a pre-existing coin. Similar proportions of visible overstrikes are found among all Single Hon types.

Late No Hon E Keicho Ichibu

Late No Hon E Keicho ichibu form one of the simplest die maps, with no overlap between types. Of 49 pieces examined, there were 34-35 fully unique die pairs.

Two pieces in this group only had photos of side A. While I typically omitted coins with only one photo from analysis, these were both coin-aligned pieces and were significant enough to include. One uses die NH-E-A1, represented by a line coming from the die and ending in the middle. The other has a unique A die and is presumably fully unique.

Overall, I’ve found seven coin-aligned pieces of this type, significantly more than any other type. Of these, two or three share the same pair of dies, with another pairing the same A die with a different B die, lending some support to the idea discussed under Double Hon Keicho ichibu of presentation pieces sharing dies. Interestingly, this A die has large die breaks around 光次, which seems like a strange choice to use for specially struck presentation pieces.

Late Keicho ichibu display some of the sloppiest dies throughout the entire series. The dots in the border, especially on side B, are much larger than on earlier pieces, giving them a distinctive look in addition to the position of 分. The calligraphy is generally easy to distinguish as well, making these the easiest No Hon variety to attribute.

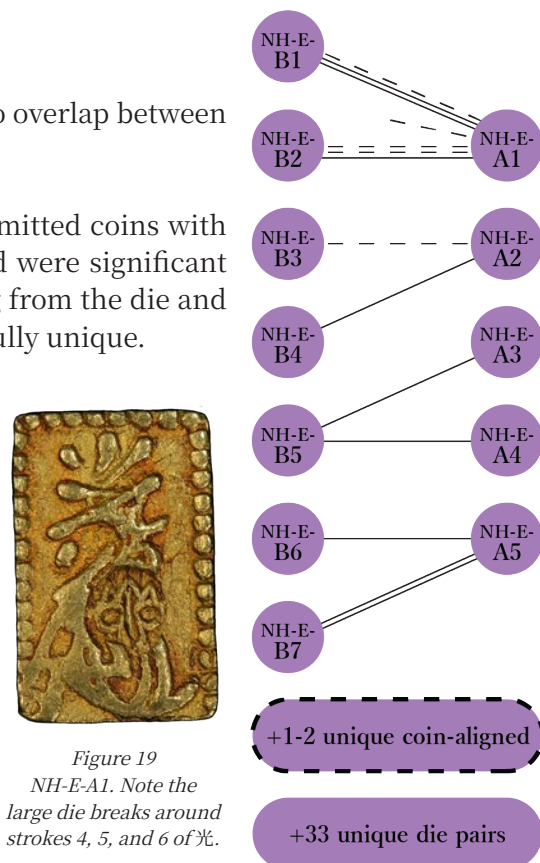
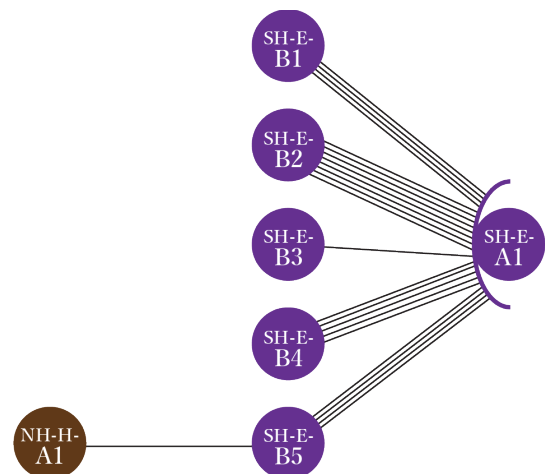


Figure 19
NH-E-A1. Note the large die breaks around strokes 4, 5, and 6 of 光.

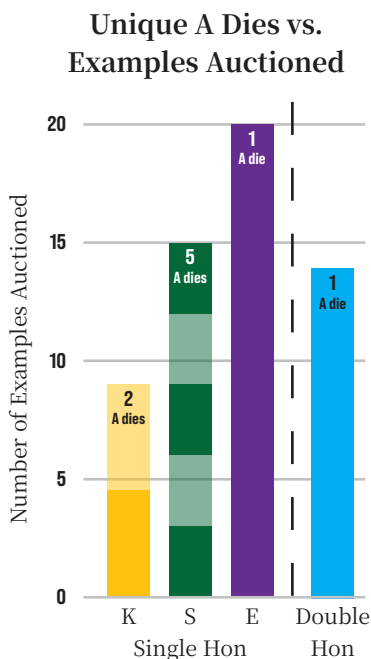


Late Single Hon E Keicho Ichibu

Late Single Hon E Keicho ichibu present multiple oddities, not the least of which is the use of just one A die. This die can be seen in two distinct die states, the latter of which I've only seen paired with SH-E-B5 (which will be discussed at length later). The later die state has a chip in the field to the left of 光次, while the earlier state doesn't. Other diagnostics make it clear that these are the same

die, as shown to the right. We also have the only die overlap between different calligraphy styles, where a B die is shared between Single Hon E and No Hon H (a very rare minor style).

One of the most confounding things here is the number of dies compared to the rarity today. The graph to the left lets us see this disparity at a glance. The total height of the bars shows the number of unique pieces found at auction between 2008 and 2024, which presumably represents the rarity relative of each type (ex. 20 examples of Single Hon E were auctioned, indicating they're the most common of this group). Each bar is then divided to show the number of unique A dies found (ex. Single Hon S have five different A dies, so the bar is divided into five segments).



Early Die State

Late Die State



Figure 20

Comparison of die states of SH-E-A1.

Top and center close-ups: Easy diagnostics that confirm this is the same die: a squished dot in the top row, and damage on the top right of the Hon. Bottom close-up: Die chip only present in late die state.

One would expect each section representing an A die to be a similar height across all Single Hon types, suggesting pieces with a higher surviving number also had a higher original mintage and higher number of dies. This is true if you look only at Single Hon K and S pieces – all of the A die segments are a fairly similar height to each other. Single Hon E and Double Hon S are also fairly similar to each other, but both have significantly fewer dies proportional to the apparent rarity than the other two types.

Double Hon Keicho ichibu have been included for comparison, but there is a simple explanation for the seemingly high survival rate; they would have been easy to identify as a different type and are more likely to have been saved. However, one would assume that all styles of Single Hon were saved in a similar proportion to the original mintage since, to my knowledge, none have previously been identified as more valuable than another. This then seems to indicate that either Single Hon E pieces survived in a much higher proportion than other Single Hon types, or the A die used on them struck significantly more coins than any other A dies of similar types.

It's also noteworthy that style E is the only group where no B die crossover has been found between No and Single Hon pieces of the same calligraphy style. It's certainly possible that pieces sharing these dies exist and just haven't been available recently, or that they haven't survived, but we can't say for sure. Based on die styles, I believe that dies SH-E-B1 through B3 were produced at the same time as No Hon E pieces and crossover pieces are likely to be found in the future. SH-E-B4 is a bit ambiguous and will be discussed later (page 57), but SH-E-B5 can be found paired with a No Hon H A die.

This die is very easily identified by a massive die break on the right side just above 一. I've been unable to find a Keicho ichibu of any type that used this B die before the break occurred. The Single Hon E pieces with this die are the only ones that have the die chip on side A, indicating that they were made last of all the Single Hon E pieces. This also confirms that style H pieces were made after E.



Figure 21
Two examples of SH-E-B5 on Single Hon E pieces.

The fact that kinza even put these pieces into circulation is surprising. While I've seen the occasional double strike or minor die break, an error this major is virtually unheard of. I haven't seen any other gold ichibu with such an egregious problem that were released en masse. Other obvious errors, such as double strikes, are one-off issues and wouldn't have been present on a large group of pieces, making it more understandable that they slipped past quality control measures.

Late No Hon H/U Keicho Ichibu

While H and U are two distinct calligraphy styles, I believe they make sense to evaluate together. Looking solely at side A, one could justify grouping style H with E and style U with K; both have many similarities. However, side B on both styles makes them distinct and leads me to group them separately, placed at the end of the mintage. I suspect the similarities in calligraphy have helped them escape identification as a unique type until now.

I've only seen three examples of style H, but one of these is paired with SH-E-B5. Upon speaking with the owner of this piece, I've learned that this B die has been documented in the past: the piece in figure 22 was illustrated side-by-side with a Single Hon E piece using the same B die in 知命泉譜 ひびき: 江戸幕末までの日本の金貨・銀貨選集 by 小森善治 (published June 30, 1990). I've been unable to locate this book and am actively seeking a copy or scans of the relevant page(s).

Note the dots in the border on side B across all three pieces. They're much smaller than is typically seen on Late pieces, with four dots above 一 on all three examples (if we assume they were evenly spaced on SH-E-B5 before the break occurred), more than I've found on any E examples.

The style of side B on style U pieces is very similar. With a larger sample size for U we have more variation, but a couple key features are shared between the groups. On many examples, the sides of the dot border are almost uninterrupted by the bottom kirimon. The major types have large breaks in the border where the kirimon extends to the edge of the coin, but on these examples, there's little to no gap. In addition, all but one example between both styles have no stems on the buds of the bottom kirimon, which are typically present.



Figure 22
NH-H-A1 paired with SH-E-B5.



Figure 23
Both unique examples of style H.



Figure 24

We know that style H came after E thanks to the NH-H-A1 and SH-E-B5 die pairing, and I believe that, based on stylistic changes, U followed H. These pieces break almost all previous rules used for establishing time period; the position of 一 and 分 on all examples would indicate Intermediate, but of the five examples with the top dot border visible, two have more than three dots in each corner. One has five dots, and the final piece has seven dots.

Kumamoto groups style U with E during the last minting period from 1657 to 1695. I was able to find nine examples of this style calligraphy on Koban, all of which appear to have coarse gozame, supporting that they were made later in the mintage. Kumamoto doesn't illustrate style H and I haven't been able to find any koban in that style.



Figure 25
Three examples of style U.

Coarse vs. Fine Gozame on Koban

The narrow horizontal lines on koban are referred to as “gozame.” On Keicho koban, the spacing of the gozame is used to date them; narrow spaces between lines (known as fine gozame) were minted earlier, while pieces with large gaps between lines (coarse gozame) were minted later.



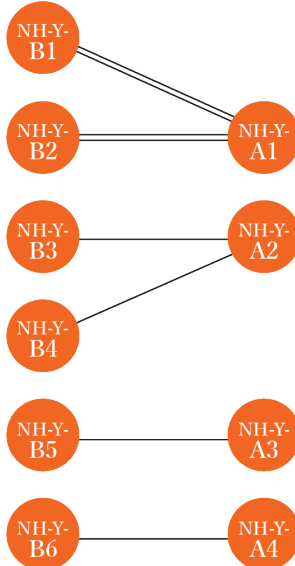
Figure 26
Left/Top: Early Keicho koban with fine gozame.
Right/Bottom: Late Keicho koban with coarse gozame.



Figure 28
Both koban found with style Y. Neither are easily classifiable as early or late.

No Hon Y Keicho Ichibu

I’ve found eight pieces that share this style with a total of four A dies and six B dies. Most of these have 分 fully embedded in the dot border with three dots above and three or four dots below, indicating Late. However, the size of the dots and overall style looks more similar to Intermediate. To complicate matters further, die NH-Y-B2 has four dots in the top right corner and NH-Y-B6 has four dots in the top left.



Kumamoto groups this style with E during the last minting period from 1657 to 1695. Of the two Y koban I’ve found, neither is easily classifiable as early or late¹ based on the style of gozame. I suspect these represent transitional pieces between K and S or S and E.

All S koban that I’ve found have coarser gozame than both of these examples, suggesting that this style was most likely a transition between K and S, but the position of 分 on ichibu makes more sense to place between S and E. I believe more examples are needed to be able to confidently place this style in the emission sequence.



Figure 27
Top: NH-Y-B2.
Bottom: NH-Y-B6.

¹ The division of Keicho koban into early and late does not correlate with the Early, Intermediate, and Late designations used in this paper for Keicho ichibu. I believe that early Keicho koban overlap with Early and Intermediate ichibu, while late koban overlap with Intermediate and Late ichibu.



Figure 29
Three examples of style Y.

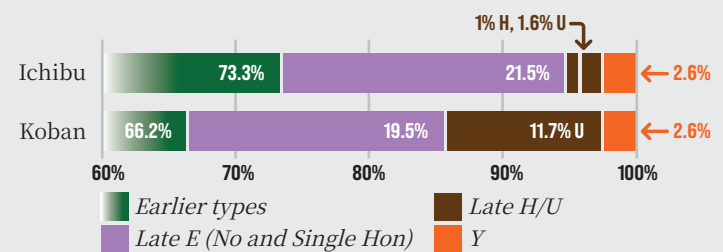


Figure 30
Late Single Hon E example using SH-E-B4.

This brings us back to SH-E-B4. This die has smaller dots than is typical on E examples and would not look out of place grouped with other B dies paired with H, U, or Y. I believe it's most likely the beginning of the shift toward B dies found with style H, but without any No Hon examples that share the die, we can't say for sure.

Regardless, these three minor styles are the rarest types of Keicho ichibu.

Calligraphy Style Proportions



Based on a sample of 77 koban, style U seems to be significantly more common on koban than on ichibu. This data includes all 306 ichibu found.

Outliers

After analyzing 306 pieces, I was left with just three outliers that didn't fit into one of the types already discussed. One was simply too covered in chopmarks to identify and isn't pictured.



Figure 31
Second outlier.

The second appears to be Late, style S, and doesn't match the calligraphy style in Outlier Group 2. No other such pieces have been found and I haven't found any other pieces that seem to use either of these dies. Unless similar pieces or die matches can be found, I suggest this piece represents an unintentional mule or a contemporary counterfeit.

The third and final outlier has calligraphy on Side A that most closely resembles E and the position of 分 indicates Late, but there are four dots in the top right corner of Side B. I believe this is most likely a transitional piece between E and H.



Figure 32
Third outlier.

Minting Location Identification

If we're using style to indicate time period instead of minting location, what information are we left with to determine which mint individual pieces are from?

For any further insights, we may need to look to koban. Kumamoto presents drawings of many different calligraphy styles, each attributed to a minting period and location. His findings are summarized on the following page. As I understand it, Kumamoto's classification of minting period centers around the style of the reverse kao. I'm unsure how the minting locations were determined.

I haven't studied koban in nearly as much detail, but a brief survey revealed that most early Keicho koban with fine gozame matched the general calligraphy style for Gaku ichibu or, predominantly, style K. Koban with coarse gozame seem to be primarily style E, with the occasional S. This lines up with Kumamoto's classifications.

If we go by Kumamoto's classifications of minting location, Kyoto and Suruga seem to have only produced Early and Intermediate K Keicho ichibu. Without further information about how these attributions were reached, I'm unable to offer any further commentary about potential diagnostics. The switch from Early to Intermediate K during the operation of the Suruga Mint does suggest that switch occurred somewhere between 1606/1607 and 1612/1616.

The oldest reference I've found that depicts individual pieces attributed to a specific mint is the *Kin Gin Zuroku* (金銀図録) from 1810 (volume 2), which shows two pieces attributed to Suruga. Both are somewhat ambiguous and I'm unsure how exact this drawing is or how they were identified. As far as I've been able to translate, no further commentary is offered on these pieces.

Finally, there's the mint generally omitted from English references: Sado. While there's no known way to identify ichibu struck in Sado, koban can be identified based on the mint master stamps. I've been able to locate photos of three¹ Keicho koban from Sado, all using a different die for "Mitsutsugu" and the kao.



Figure 34
Map of different mint locations that produced Keicho ichibu.

	Edo	Kyoto	Suruga
1596 - 1601	Gaku		
1601 - 1607	Gaku	Gaku Early K	Early K
1607 - ?	Early K Intermediate K	Early K Intermediate K	Early K Intermediate K
? - ?	Minting suspended		
? - ?	Intermediate S	Intermediate K	
? - 1657	Minting suspended		
1657 - 1695	Y Late E Late U		

Figure 33
This suggests a more complicated overlap of styles than proposed in figure 14. Style H isn't pictured in Kumamoto's work and therefore isn't included.



Figure 35
Kin Gin Zuroku (金銀図録), volume 2, page 17, with illustrations enlarged. Top right reads, "Same as above [referring to Keicho ichibu] Suruga Mint ichibu ban kin." Bottom caption describes the weight. No further text seems to relate to this page.

1 The second and third examples not pictured are found in *Sado Koban and Kirigin Research* (佐渡小判 + 切銀の研究) by Yasushi Nishiwaki, pages 42 and 44.

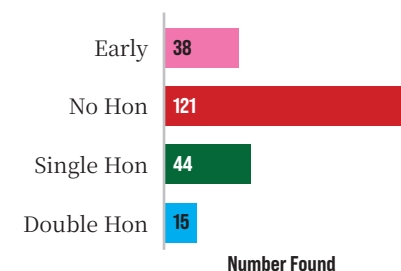


All examples are clearly style S; strokes ① and ② are vertical and parallel to each other, with a fairly wide gap between stroke ② and the left end of stroke ④. Stroke ③ swoops directly into stroke ④. We could assume that Keicho ichibu minted in Sado used a similar style, but this calligraphy isn't distinct enough to confidently identify any individual pieces. Examination of more Keicho Sado koban may help develop more specific criteria.

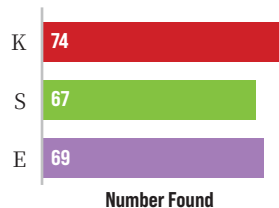
Figure 36
Sado koban and close-up of calligraphy.

Comparative Rarity Based on Auctioned Examples

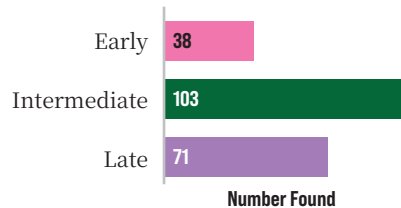
Unless noted otherwise, all statistics from here forward include only pieces auctioned by Ginza Coins (銀座コイン), Nihon Coin Auction (日本コインオークション), or Taisei Auction (泰星オークション) between 2008 and the end of 2024. Previous analyses included pieces found in direct sales, graded by PCGS, etc. By restricting the data to a specific group of pieces, the hope is that the numbers presented here are representative of the overall surviving populations. Styles H, U, and Y are included when there's enough data from auctioned pieces to identify trends. While the full survey found 3-8 examples of the minor types, the auction only data includes just one example each of H and U, plus six examples of Y.



Dividing the number of examples seen in this sample by the typical Keicho ichibu classifications, we find them generally on par with expectations. No Hon are the most common; Early and Single Hon are about equal in rarity; and Double Hon are the rarest.



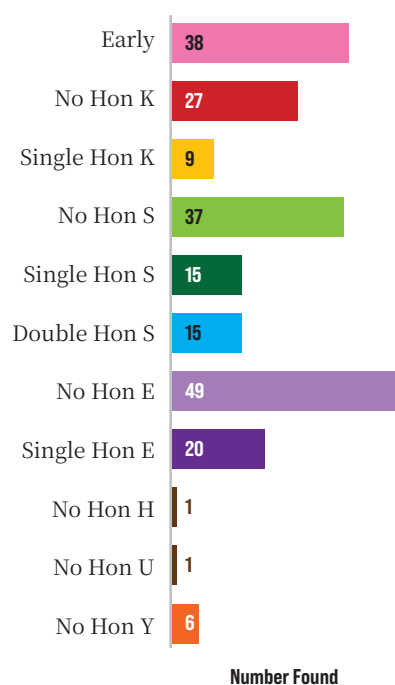
If we divide them solely based on the major calligraphy styles, we find that the number of examples is almost equal across all three styles. This also tracks with past valuation; no style currently holds a premium in pricing.



When dividing them solely based on time period, we find that Intermediate are the most common and Early are the rarest.

However, when we divide examples by all the criteria outlined in this paper (on the right), we find Keicho ichibu can be grouped into three levels of rarity. The identification of Single Hon K as the rarest major type is a significant departure from current pricing trends. Those pieces currently bring no significant premium over other styles of Single Hon, nor do any of the minor types bring a premium over other No Hon styles.

Each data set presented here represents a different way that Keicho ichibu could be collected. Which methods become the most popular will likely determine pricing trends going forward. At the time of publication, the top left graph represents the way Keicho ichibu are most often collected, and prices mirror the rarities seen there.



Most Common (30+ auctions)



Less Common (15-30 auctions)



Rarest (<15 auctions)



Comparative Rarity Based on Unique Dies

This section uses all data from die analysis and is not limited to the specific auctions used for other statistics.

We could make the assumption that, on average, each unique die struck a similar number of coins. While there's certainly variation between individual dies, this could give us a general picture of the original rarity of each type. Those with a large number of dies observed presumably had a much higher mintage than those with few dies found. Because so many Keicho ichibu have been melted down, this may help paint a better picture of the original mintage than surviving numbers do. Without more specific original documentation there's no way to know for sure, but I believe it's worth examining.

This graph to the right represents estimated original mintages as compared to other types. No exact numbers are known or theorized, but the rough proportions of No Hon types are very similar to the surviving examples as seen in the auction sample above. We find disparities when looking at the Hon examples.

It's possible that not all Hon dies were used to failure, or that certain types survived in higher proportions for reasons currently unknown. The Double Hon were noticeably different and may well have been saved in higher numbers than other types, but I'm unaware of any reason that Late Single Hon E would have survived in a higher proportion than any other Single Hon type.

Incuse Kirimon Stamp

All types without any Hon have an overwhelming majority with one incuse "little kiri" stamp. This is slightly less consistent on the Late pieces, but it's still present on the majority of pieces. A small handful of examples across all types have no stamp, and even fewer have two stamps.

This trend changes on the Hon pieces, which are quite hit or miss. Combined with the appearance of the stamp

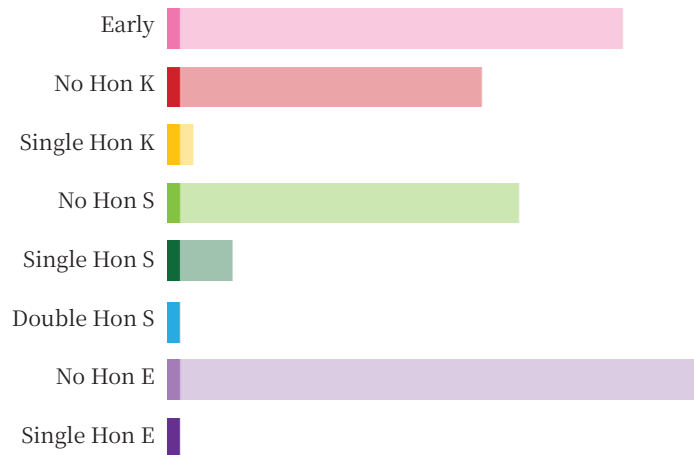


Figure 37

on examples where it's present, I don't believe the stamp was restruck along with the rest of the coin. When it's present, it's still visible from the original coin; when there's no stamp, it's either been obscured in the repair process or was missing from the original coin.

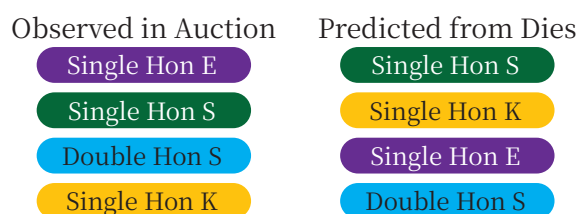
The "little kiri" stamp is an incuse stamp introduced with Gaku ichibu that was used on a large proportion of gold ichibu through 1736.

Estimated Relative Mintages Based on A Dies

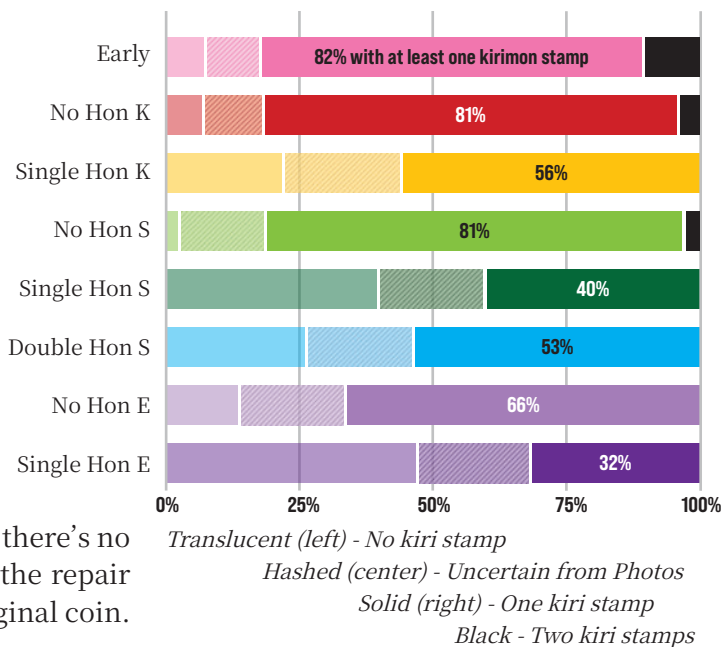


The assumption is made that each A die represents an equal number of coins struck. Based on the number of A dies currently known, we can calculate an assumed percentage of each type's mintage that a single die was responsible for (ex. each of the five Single Hon S A dies presumably produced 20% of the total mintage). The starting bar graph was made with a solid bar the height of one die's percentage, and the remainder filled with a transparent bar up to 100% (so the Single Hon S bar is 20% solid and 80% transparent, while the Double Hon bar is entirely solid). The bars were then normalized so each solid portion (each die) represents the same number of coins. While there are certainly dies not yet discovered, particularly among the high mintage types, this is the closest estimation based on current data.

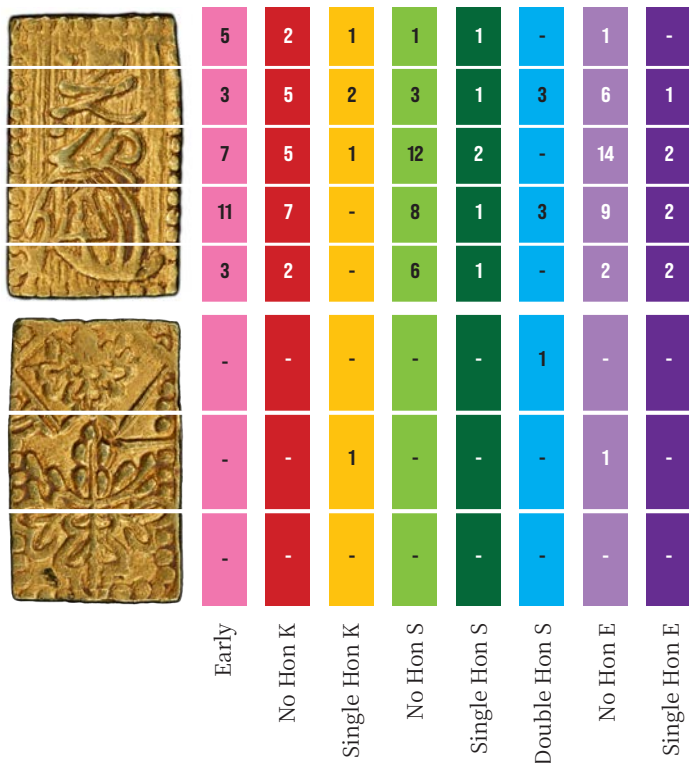
Most Common to Rarest Hon Types



Incuse Kirimon Stamps



Position of Kirimon Stamp



When present, the little kiri stamp is almost always on side A, though the position on that side varies. Only three examples in this sample have it on side B.

It's worth mentioning that *Japanese Monetary History (Revised)* (日本貨幣史(増訂)) by Toyojiro Tsukamoto suggests using the presence and location of the kiri stamp to identify the minting location:

There are three kinds of Keicho ichibuban: Kyoto Mint, Edo Mint, and Suruga Mint. Each type differs; the Kyoto Mint has two types, Single Hon and Double Hon, and there's no little kiri on the back [side A]. Edo Mint pieces only come with one hon and have the little kiri struck in the center; Suruga Mint pieces come with only two Hon and have the little kiri below on the back.

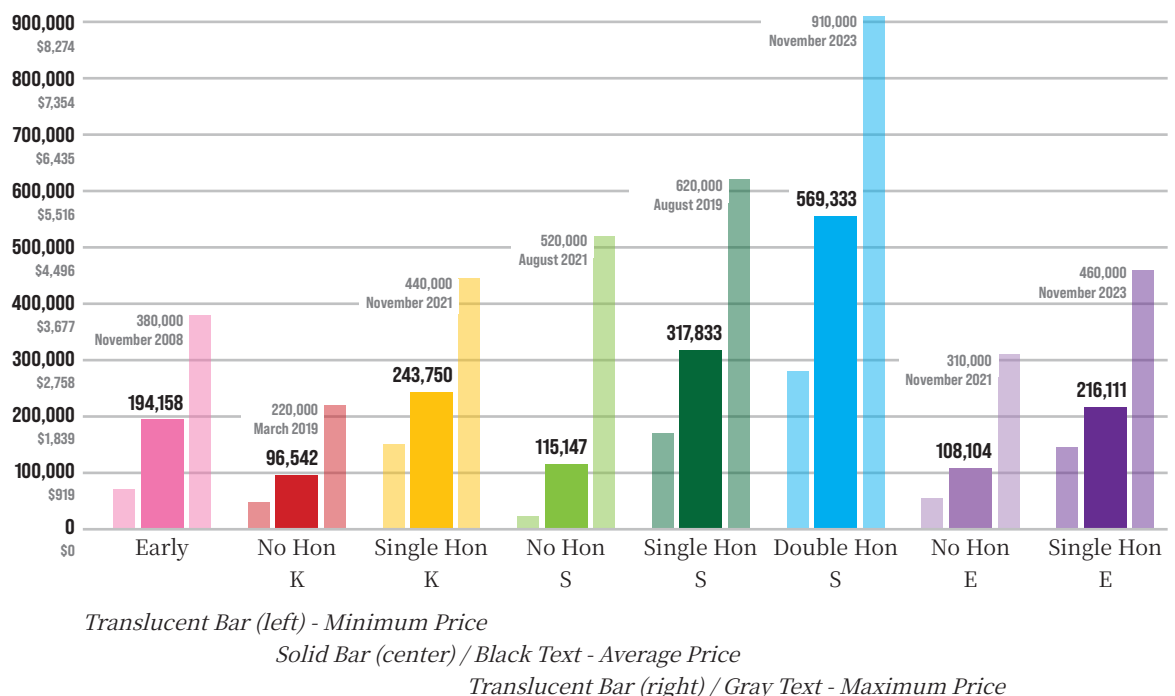
The attribution of Hon pieces doesn't align with the findings in this die study (specifically that Double Hon were minted in two locations), and we have to assume that Tsukamoto meant to imply that No Hon pieces were minted in all three locations.

If we focus solely on the kiri stamp location on No Hon pieces, this attribution method would result in 10.4% minted in Kyoto, 51% minted in Edo (if we include all pieces with the kiri stamp in the center or higher), and 38.4% minted in Suruga. (This fully omits the three pieces with the kiri stamp on side B.) As you can see in the chart above, there are no clear trends of the kiri stamp position relating to calligraphy style. I would be surprised if Suruga managed to mint such a large percentage of the 94 year mintage in just 5-10 years of production.

Pricing Trends

Pricing reflects the past divisions of Keicho ichibu into Early, standard, Single Hon, and Double Hon, with no particular premiums given for different styles. For reference, the Y-axis of the chart to the right also shows the average exchange rate between yen and USD from 2008 to 2024 (108.78 yen to \$1), but this has fluctuated significantly in recent years.

Minimum, Maximum, and Average Auction Sale Price in Yen, 2008-2024



With the exception of Early Keicho ichibu, the maximum auction record for each type across the three auction houses studied occurred between 2019 and 2023. While not labelled on the graph, most minimum auction prices occurred between 2014 and 2016, with one earlier (Double Hon in October 2011) and two later (Early in March 2019 and No Hon K in April 2018).

Next Steps

When viewed as a monolith, Keicho ichibu present a huge amount of variety in style and strike. The divisions outlined here aim to divide that group into more cohesive types, guided by die maps and previously identified styles. I hope that these clearer divisions will encourage more widespread collecting of the type and more interest in the history behind them.

I am seeking feedback from the numismatic community with any further evidence in support of or contrary to the divisions proposed in this paper.

I believe that future research is warranted into the connection between Keicho koban and ichibu. Most references I've been able to locate have been focused on koban, and I hope this paper will provide a starting point for bringing the two denominations together in a more comprehensive work, or will bring such a work to my attention if it already exists.

Specifically, the minor types warrant additional research. With so few pieces identified, there's a lot of room for new pieces to reveal unexpected die crossover or to more confidently cement their place in the emission sequence. This would be particularly helpful for style Y, whose timing remains ambiguous.

I also hope this paper will spur further research into the purpose of Double Hon pieces. I have been unable to locate any contemporary sources, but researchers in Japan are sure to have better access. Have any records survived that give an indication of their purpose?

There are plenty of questions remaining, but by separating Keicho ichibu into more distinct groups, I believe we now have a clearer view of what those questions are. I hope future numismatists will be able to build upon this research to solve some of the mysteries left in the 94 year run of Keicho ichibu.

Please visit <https://rectanglecoins.com/keicho-ichibu-die-study> to check for any updates to this research.

Conflict of Interest Statement

At the time of publication, I do not own nor am I actively bidding on any Keicho ichibu. Any Keicho ichibu I may come to own will have been purchased after this information was made freely available.

AI Statement

No AI was used for any portion of this paper, including but not limited to the research, writing, and graphics. To the best of my knowledge, no AI was used in the translation to Japanese.

Appendix 1: Typical Examples

While each type has significant variation among individual examples, this appendix depicts three examples of each intended for assistance in attributing other pieces. These should not be considered representative of every example of a type, but rather as a small sample of pieces that - as far as I'm aware - are not otherwise noteworthy.

Early No Hon K Keicho Ichibu



Intermediate No Hon K Keicho Ichibu



Intermediate Single Hon K Keicho Ichibu



Intermediate No Hon S Keicho Ichibu



Intermediate Single Hon S Keicho Ichibu



Intermediate Double Hon S Keicho Ichibu



Late No Hon E Keicho Ichibu



Late Single Hon E Keicho Ichibu



Late No Hon H Keicho Ichibu



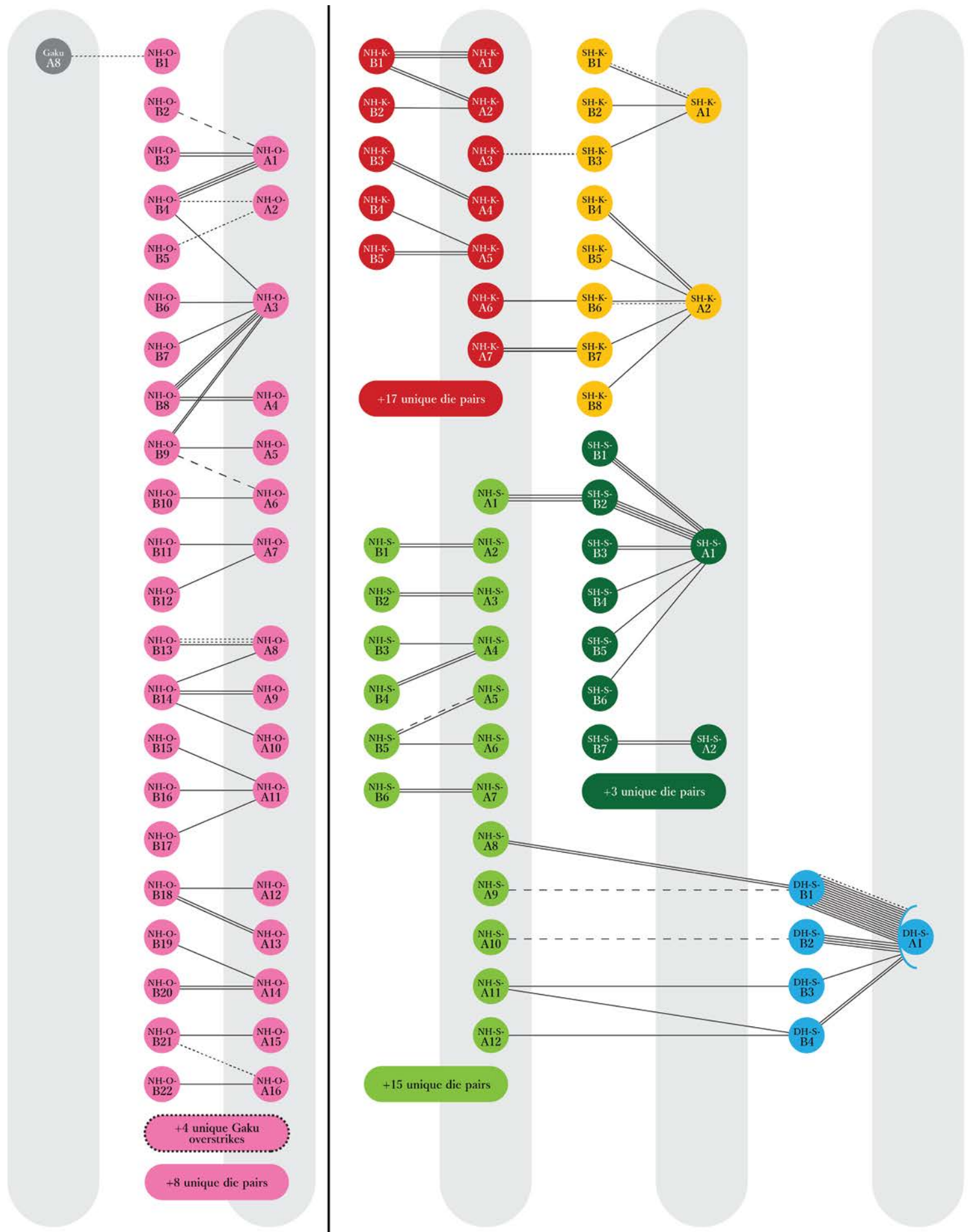
Late No Hon U Keicho Ichibu

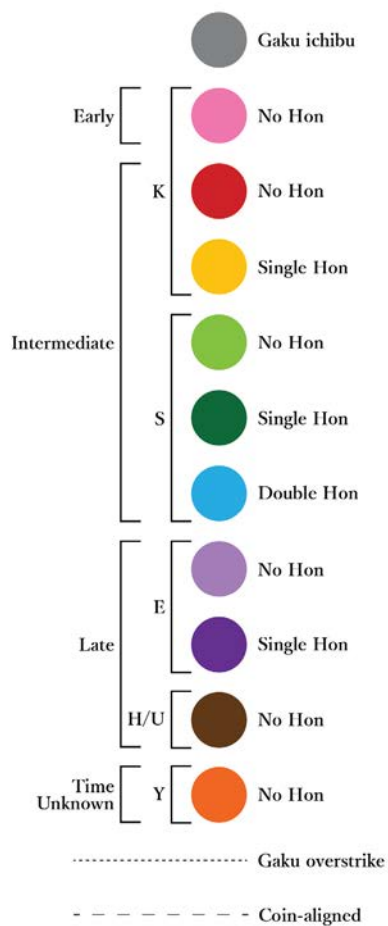
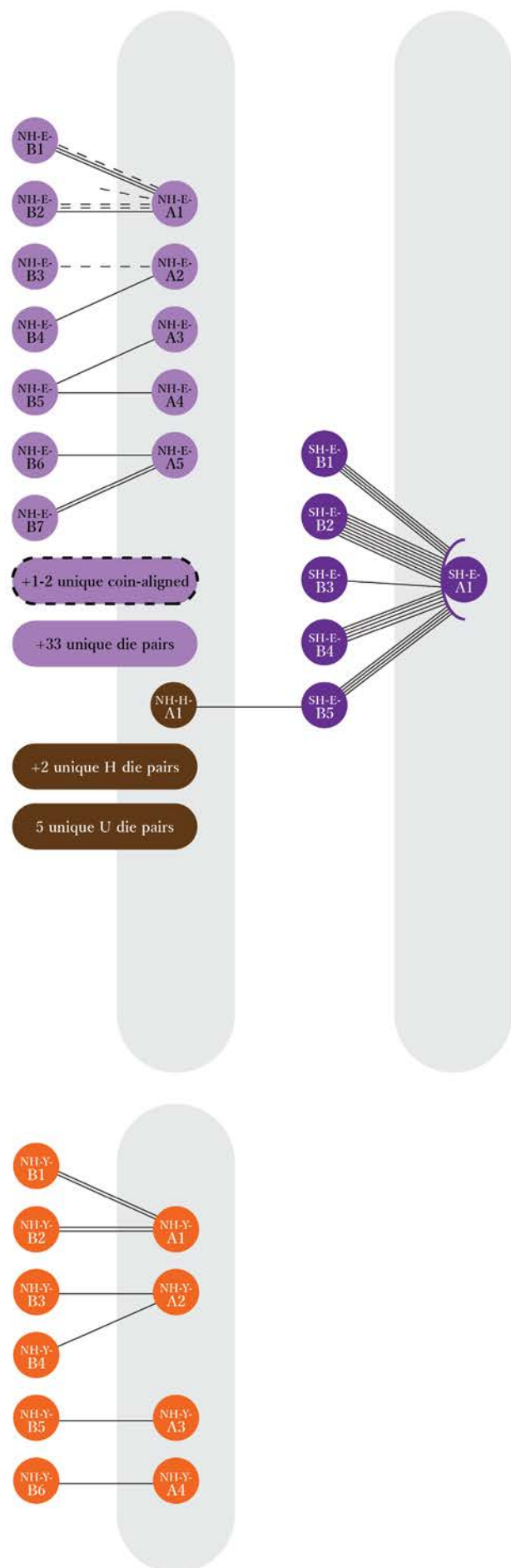


No Hon Y Keicho Ichibu



Appendix 2: Full Die Map





Appendix 3: Commentary on Alternative Double Hon Theories

While I've seen little to no discussion of the purpose behind Double Hon Keicho ichibu, I have run across and considered a few different explanations. While I believe that the data points to them being used as presentation pieces, I'd like to take a moment to address some alternate possibilities.

The most common suggestion I've seen has been that Double Hon pieces were repaired twice, while Single Hon were only repaired once. This would seem to be the most obvious explanation, but I haven't seen any evidence on the existing coins that this is the case. More specifically:

- The existence of a Double Hon struck over a Gaku ichibu (see fig. 18 on page 51) seems to disprove this theory. I doubt the Gaku border would still be visible if this piece was restruck twice.
- I'd expect to see Double Hon introduced later in the mintage if this were the case; pieces would have had to circulate for quite a while before needing two repairs. Based on the calligraphy style, die pairings, previous publications, and Gaku overstrike proportions, Double Hon are instead near the middle of the total minting period for Keicho ichibu.
- Surviving examples across all Single and Double Hon types suggest that the incuse kirimon stamp was not restruck when coins were repaired, meaning any visible kirimon stamp has survived from the original coin. This stamp is visible on a similar proportion of coins across all Hon types (see the chart on the bottom right of page 60). If Double Hon pieces were restruck twice, we would expect the kirimon stamp to rarely be visible; or, if it were added on the second repair, it should be present on most examples. Neither of these are the case.

Unless credible historical documentation can be found in support of this theory, I believe it's debunked by the coins themselves.

Since there's only one A die, perhaps this die was intended to be a Single Hon and the Hon was first mistakenly engraved in the top left corner, then "corrected" and added to the top right. While technically possible, I haven't found any other dies that have such an egregious error in engraving and am skeptical that kinza would've let such an error go into use.

An early theory of mine was that the Double Hon A die was the first Hon die made, intended to be the design for all repaired pieces until the die showed weakness around the left hon and the design was changed. However, based on the proportion of Gaku overstrikes and supported by the timeline in Kumamoto's work, I believe Single Hon K pieces predate all style S examples, placing Single Hon K pieces before Double Hon S and eliminating this theory.

I haven't come across any other suggestions and believe the only theory firmly supported by the surviving coins is that they were struck as presentation pieces. I welcome any other ideas or any historical documentation.

Image Credits

Fig.

1	PCGS MS62, cert number unknown
2	PCGS AU55, cert number 38332884
3	PCGS MS62, cert number 40318912
4	Based on illustration in <i>Portraits of Edo and Early Modern Japan, The Shogun's Capital in Zuihitsu Writing</i> by Gerald Groemer, figure 2.1, using Adobe Stock image
5	PCGS AU58, cert number 50676381
6	PCGS MS62, cert number unknown
7	PCGS MS62, cert number 80792366
8	PCGS AU58, cert number 35398644
9	Left: Ginza Coins, November 20, 2021; 33rd Ginza Coin Auction, lot 233 Center: Same as figure 5 Right: PCGS MS62, cert number 35398645
10	Left: Same as figure 1 Right: PCGS XF45, cert number 38332883
11	Left: Ginza Coins, November 16, 2024; 36th Ginza Auction, lot 238 Right: Same as figure 10 right
12	Ginza Coins, June 10, 2015; 73rd Mail Bid Auction, lot 62
13	Left: Same as figure 10 right Right: Ginza Coins, February 10, 2018; 86th Mail Bid Auction, lot 58
14	Based on illustration in <i>Research on Keicho Koban and Keicho Ichibuban</i> by Masaki Kumamoto, page 29
15	Left to right: 1. Same as figure 3 2. Direct sale from Ginza Coins 3. PCGS AU55, cert number 51070294 4. Ginza Coins, November 18, 2023; 35th Ginza Coin Auction, lot 236
16	Left: Direct sale from Ginza Coins Center: Same as figure 15 far right Right: Taisei Auction, May 2, 2021; Taisei Auction 2021, lot 61
17	Top: Ginza Coins, November 16, 2024; 36th Ginza Coin Auction, lot 235 Bottom: Same as figure 15, third from left
18	Direct sale from Ginza Coins
19	PCGS AU Details (Damage), cert number 28034638
20	Left: PCGS AU58, cert number 47034745 Right: Ginza Coins, November 20, 2021; 33rd Ginza Coin Auction, lot 238
21	Left: Provided by Eric Lin Right: PCGS XF45, cert number 52624245
22	PCGS AU Details (Damage), cert number 57268980
23	Left: Ginza Coins, February 11, 2022; 106th Mail Bid Auction, lot 86 Right: Direct sale from Ginza Coins
24	Left to right: 1. Same as figure 9, right 2. PCGS MS66, cert number 39856035 3. PCGS MS62, cert number 39749049 4. Same as figure 20 right 5. Ginza Coins, April 10, 2019; 92nd Mail Bid Auction, lot 64

	Left: Direct sale from Ginza Coins
25	Center: Ginza Coins, February 9, 2025; 121st Mail Bid Auction, lot 114 Right: Ginza Coins, February 9, 2025; 121st Mail Bid Auction, lot 116
26	Left: Ginza Coins, November 3, 2018; 30th Ginza Coin Auction, lot 88 Right: Ginza Coins, November 18, 2017; 29th Ginza Coin Auction, lot 266
27	Top: Ginza Coins, February 9, 2025; 121st Mail Bid Auction, lot 111 Bottom: Ginza Coins, February 10, 2010; 46th Mail Bid Auction, lot 84
28	Left: Ginza Coins, February 10, 2019; 91st Mail Bid Auction, lot 132 Right: Ginza Coins, February 10, 2012; 56th Mail Bid Auction, lot 71
29	Left: Same as figure 27 top Center: PCGS MS62, cert number unknown Right: Ginza Coins, August 10, 2024; 119th Mail Bid Auction, lot 170
30	Ginza Coins, April 10, 2010; 47th Mail Bid Auction, lot 50
31	Direct sale from Ginza Coins
32	Nihon Coin Auction, December 9, 2023; 58th Nihon Coin Auction, lot 1156
33	Based on illustrations in <i>Research on Keicho Koban and Keicho Ichibuban</i> by Masaki Kumamoto
34	Uses Adobe Stock image
35	<i>Kin Gin Zuroku</i> , volume 2, page 17
36	Ginza Coins, November 20, 2016; 28th Ginza Coin Auction, lot 447
37	Same as figure 19

Appendix 1

Early	Left: Same as figure 9, left Center: PCGS MS63, cert number unknown Right: Ginza Coins, November 18, 2023; 35th Ginza Coin Auction, lot 232
No Hon K	Left: Ginza Coins, November 20, 2021; 33rd Ginza Coin Auction, lot 239 Center: Ginza Coins, November 16, 2024; 36th Ginza Coin Auction, lot 244 Right: Ginza Coins, March 10, 2019; 1st Mail Bid Auction, lot 120
Single Hon K	Left: Same as figure 11, left Center: Ginza Coins, November 20, 2021; 33rd Ginza Coin Auction, lot 242 Right: Direct sale from Ginza Coins
No Hon S	Left: Ginza Coins, November 18, 2023; 35th Ginza Coin Auction, lot 241 Center: Ginza Coins, August 11, 2023; 114th Mail Bid Auction, lot 134 Right: Ginza Coins, August 11, 2022; 109th Mail Bid Auction, lot 119
Single Hon S	Left: Same as figure 2 Center: Ginza Coins, November 18, 2023; 35th Ginza Coin Auction, lot 238 Right: Ginza Coins, November 20, 2016; 28th Ginza Coin Auction, lot 408
Double Hon S	Left: Same as figure 15, #4 Center: Ginza Coins, October 9, 2023; 115th Mail Bid Auction, lot 120 Right: Ginza Coins, November 18, 2017; 29th Ginza Coin Auction, lot 238
No Hon E	Left: Ginza Coins, February 10, 2024; 116th Mail Bid Auction, lot 139 Center: Ginza Coins, February 10, 2021; 101st Mail Bid Auction, lot 81 Right: Ginza Coins, June 8, 2024; 118th Mail Bid Auction, lot 97
Single Hon E	Left: Ginza Coins, February 10, 2020; 96th Mail Bid Auction, lot 104 Center: Direct sale from Ginza Coins Right: Same as figure 20, left
No Hon H	Left: Same as figure 23, left Center: Same as figure 23, right Right: Same as figure 22

No Hon U	Left: Same as figure 25, left Center: Same as figure 25, center Right: Same as figure 25, right
No Hon Y	Left: Same as figure 27, top Center: Same as figure 29, center Right: Same as figure 29, right

Cover Images

Row 1	Left: Same as figure 9, left Right: Same as Appendix 1, No Hon K, left
Row 2	Left: Same as Appendix 1, Single Hon K, center Right: Same as Appendix 1, No Hon S, right
Row 3	Left: Same as Appendix 1, Single Hon S, center Right: Same as Appendix 1, Double Hon S, right
Row 4	Left: Same as Appendix 1, No Hon E, left Right: Same as Appendix 1, Single Hon E, center
Row 5	Left: Same as figure 22 Right: Same as figure 25, center

All Image Sources for Die Study

Cultural Heritage Online 文化遺産オンライン. “Keicho Ryohon Ichibu Kin 慶長両本一分金 [Keicho Double Hon Gold Ichibu].” <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/536150>

Ginza Coins 銀座コイン. “Past Auctions.” https://shop.ginzacoins.co.jp/en/auction/past_events/

Heritage Auctions. <https://www.ha.com/>

Jiyuuya 時遊屋. “Keicho Ichibu Kin Ryohon Kantei Kakitsuke 慶長一分金 両本 鑑定書付 [Keicho Gold Ichibu Double Hon Certificate Included].” <https://jiyuuya.co.jp/?pid=175804919>

Mint Mint Auction ミントミントオークション. “Kako no Okushon 過去のオークション [Past Auctions].” <https://mma-livesystem.com/past-bid-products>

Mr Coins ミスターコインズ. “Keicho Ichibu Ban Kin Ryohon Goku Bihin Keicho 6-Nen - Genroku 8-Nen Ko Kingin Kosen Koin Nihon Kinka 慶長一分判金 両本 極美品 慶長6年 - 元禄8年 古金銀 古銭 コイン 日本 金貨 [Keicho Ichibu Size Gold, Double Hon, Very Good Condition, Keicho Year 6 - Genroku Year 8, Old Gold and Silver, Old Coins, Coin, Japanese Gold Coins].” <https://mr-coins.com/japan-coin/15338/>

Nihon Coin Auction 日本コインオークション. “Past Auctions.” NCA Live. <https://auctions.ncanet.co.jp/auctions/past>

PCGS. <https://www.pcg.com/>

Taisei Auction 泰星オークション. “Past Auctions.” <https://auctions.taiseicoins.com/auctions/past>

Watanabe Coin ワタナベコイン. “Ko Kin Gin 古金銀 [Ancient Gold and Silver].” Watanabe Koin Netto Shoppu ワタナベコインネットショップ [Watanabe Coin Online Shop]. <https://watanabecoin.shop-pro.jp/?mode=cate&cbid=2011553&csid=0&sort=n>

Wikipedia. “Keicho Koban 慶長小判.” Accessed September, 2024. <https://ja.wikipedia.org/wiki/慶長小判>

One image acquired from <https://urutokka.com> in 2024; this website appears to no longer be active.

References

- Bank of Japan Shizuoka Branch. *Suruga Kobanza to Nihonginko* 駿河小判座と日本銀行 [Suruga Koban Mint and the Bank of Japan]. Shizuoka, 2015. <https://www3.boj.or.jp/shizuoka/01gaiyou/img/kobanshiryou.pdf>
- Groemer, Gerald. *Portraits of Edo and Early Modern Japan: The Shogun's Capital in Zuihitsu Writings, 1657-1855*. 1st ed. Palgrave Macmillan, 2019.
<https://play.google.com/books/reader?id=H6KaDwAAQBAJ&pg=GBS.PR2.w.0.0.13>
- Hartill, David. *Early Japanese Coins*. Bedfordshire: Bright Pen, 2011
- Hisamitsu, Juhei 久光重平. *Nihon Kahei Monogatari* 日本貨幣物語 [Japanese Money Story]. Japan: Mainichi Newspaper Company, 1976.
- Japanese Numismatic Dealers Association 日本貨幣商協同組合. *Nihon Kahei Katarogu 2020* 日本貨幣カタログ2020 [The Catalog of Japanese Coins and Banknotes 2020]. Tokyo: 2020.
- Japanese Numismatic Dealers Association 日本貨幣商協同組合. *Nihon Kahei Shushu no Tebiki* 日本貨幣収集の手引き [Japanese Coin Collection Guide]. Tokyo: 2010.
- Kumamoto, Masaki 熊本昌樹. *Keicho Koban, Keicho Ichibuban Kin no Kenkyu* 慶長小判・慶長一分判金の研究 [Research on Keicho Koban and Keicho Ichibuban]. 2023.
- Morishige, Kondo 近藤守重. *Kin Gin Zuroku* 金銀図録 / 金銀圖録 [Gold and Silver Pictorial Record]. Vol. 1 and 2. Japan, 1810.
- Nishiwahi, Yasushi 西脇康. *Sado Koban + Kirigin no kenkyū* 佐渡小判 + 切銀の研究 [Sado Koban and Kirigin (Cut Silver) Research]. Tokyo: Tokyodo Publishing, 2011.
- Nishiwaki, Yasushi 脇西康 and Takeo Takizawa 澤瀧雄武. *Nihonshi Ko Hyakka - Kahei* 日本史小百科 - 貨幣 [Japanese History: Small Encyclopedia of Money]. Tokyo: Tokyodo Publishing, 1999.
- Tsukamoto, Toyojiro 塚本豊次. *Nihon Kahei Shi (Zo Tei)* 日本貨幣史(増訂) [Japanese Monetary History (Revised)]. Japan: Shinbunkaku, 1972.
- Wikipedia. “後藤庄三郎 [Goto Shozaburo].” Accessed May 30, 2025. <https://ja.wikipedia.org/wiki/後藤庄三郎>

